

千葉市荒久遺跡(2)

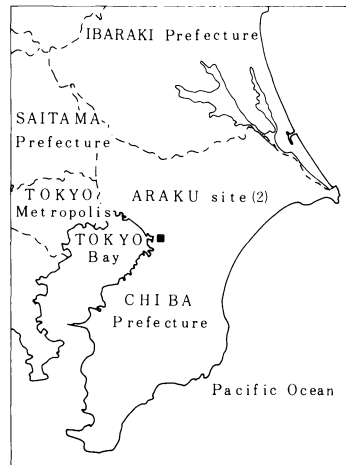
—県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 8 9

千葉県都市部
財団法人 千葉県文化財センター

ちばしあらくいせき 千葉市荒久遺跡(2)

—県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



1 9 8 9

千葉県都市部
財団法人 千葉県文化財センター



荒久遺跡全景

序 文

下総台地の南中央に位置する千葉市は、千葉県の政治・経済・文化の中心としてめざましい発展をとげております。これにともない公共施設の設備・建設も進められておりますが、このたびさらに県民の健康及び文化の発展を促進するために、千葉の中心地に県立青葉の森が設立されることとなりました。この公園は53.7haの敷地面積を有し、文化の森・自然・レクリエーション・スポーツの4つのゾーンからなる総合的な公園であります。

千葉県教育委員会では用地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、千葉県都市部都市整備課をはじめ関係諸機関と慎重に協議した結果、公園内に古墳等の埋蔵文化財を残し、現状保存するとともに、その他の埋蔵文化財については発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、当センターが実施することとなり、昭和62年4月1日から昭和62年9月30日まで調査を行いました。発掘調査の結果、先土器時代から古墳時代に及ぶ遺構・遺物が発見され、とくに古墳時代前期の焼失住居を検出できたことは、今後の集落跡研究にとって貴重な資料を提供したといえます。

このたび「荒久遺跡(2)」の発掘成果を刊行するに当たり、本書が学術資料はもとより、歴史に対する理解を深める資料として広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで御指導をいただいた千葉県教育委員会をはじめ、千葉県都市部都市整備課、千葉市教育委員会、地元関係諸機関各位の御指導・御協力に御礼申し上げますとともに、炎暑をいとわず調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表わします。

平成元年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

凡 例

1. 本書は千葉県千葉市青葉町631-1他に所在する荒久遺跡(2)の発掘調査報告書である。遺跡コードは201-048(2)である。
2. この調査は、県立青葉の森公園整備事業に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県都市整備課との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は昭和62年4月1日から昭和62年9月30日にわたって実施した。
現地の調査は、主任調査研究員金丸 誠、同小林清隆が担当した。また、荒久遺跡(1)の調査を行っていた班長大原正義、主任調査研究員山口典子の協力を得た。
4. 整理作業は昭和63年2月1日から昭和63年10月31日にわたって実施した。
整理担当職員は下記のとおりである。
主任調査研究員 山口典子(昭和63年2月1日～2月29日)
主任調査研究員 萩原恭一(昭和63年6月1日～6月30日)
調査研究員 小林信一(昭和63年7月1日～9月30日)
班長代理 田村 隆(昭和63年10月1日～10月31日)
5. 本書は調査部長堀部昭夫、部長補佐岡川宏道、部長補佐兼班長西山太郎の助言のもとに、小林信一が編集した。各文章の執筆分担は目次に記した。
6. 3章2節の縄文時代・弥生時代の遺物に関する項は調査研究員加納 実氏に整理・原稿執筆をお願いした。
7. 本書を作成するにあたって下記の諸機関・方々から多くの御協力・御教示を得た。記して感謝する。
千葉県都市整備課、千葉県千葉都市計画事務所、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、野沢則幸氏、千葉県文化財センター職員白井久美子・服部哲則氏

用 例

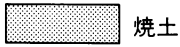
1. 本書で使用した地形図は千葉市都市基本図を縮少して使用している。
2. 本書に掲載した遺構の縮尺は住居跡が1/80, 溝を1/800で統一している。
3. 方位はすべて座標北である。
4. 住居跡内の遺跡出土状況図で使用している記号は, ●が土器および土製品, ■が石製品, ▲が鉄製品である。
5. 遺構実測図に使用しているスクリーントーンは下図のとおりである。



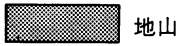
炉



粘土



焼土



地山

6. 遺物の縮尺は土器が1/4, 石製品・土製品・鉄製品1/2を基本にしているが, 極度の大型品や小型品はこの限りではなく, 任意の縮尺となっている。その旨を表示したので, 随時確認していただきたい。
7. 土器については断面を白抜きとし, 陶器については断面を黒とした。繊維が胎土の中に含まれるものについてはスクリーントーンを入れた。
8. 土器の中で赤色塗彩されたものに関しては赤色の網掛を使用した。

* 銭貨の各計測点については以下のとおり。

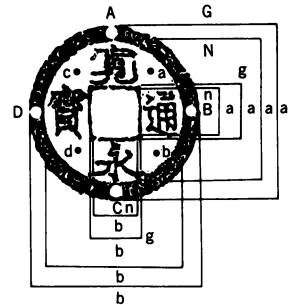
$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}, \text{ 外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2},$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2}, \text{ 内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2},$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A+B+C+D}{4}, \text{ 文字面厚 } t = \frac{a+b+c+d}{4},$$

** 重量は化学天秤 (SHIMADZU Type EB-3200D : 0.1mg) を使用。

厚みはダイヤルキャリパー (N・C・K : 0.01mm) を使用。



本文目次

1章 序章	(小林)	1
1節 調査に至る経緯		1
2節 調査の概略と方法		3
3節 荒久遺跡(2)の立地と周辺の遺跡		4
2章 遺構	(小林)	8
1節 竪穴住居跡		8
2節 溝状遺構		22
3章 遺物		26
1節 先土器時代	(田村)	26
2節 縄文時代	(加納)	39
3節 古墳時代	(小林)	40
4節 歴史時代	(〃)	53
4章 まとめ		54
1節 先土器時代	(田村)	54
2節 縄文時代・弥生時代	(小林)	57
3節 古墳時代	(〃)	57
4節 歴史時代	(〃)	60

挿図目次

第1図	調査地周辺の地形	viii
第2図	小グリッド模式図	1
第3図	確認調査グリッド配置図	2
第4図	遺跡周辺図	5
第5図	荒久遺跡(2)遺構配置図	7
第6図	住居跡101・102	9
第7図	住居跡103・111	10
第8図	住居跡112	12
第9図	住居跡108	13
第10図	住居跡108遺物出土状態	13
第11図	住居跡109	14
第12図	住居跡113遺物出土状態	15
第13図	住居跡113平面図及び炭化材出土状況	16
第14図	住居跡104平面図及び炭化材出土状況	18
第15図	住居跡104竈	19
第16図	住居跡104第1柱穴断面剥取り工程	20
第17図	住居跡110	21
第18図	住居跡110竈	22
第19図	溝配置状況および溝断面	24
第20図	荒久遺跡(2)先土器時代全体図	27
第21図	第1ブロックの器種別(上)・母岩別(下)分布状況	28
第22図	第1ブロック石器実測図(1)	29
第23図	第1ブロック石器実測図(2)	30
第24図	第2ブロック器種別分布状況	33
第25図	第2ブロック母岩別分布状況	34
第26図	第2ブロック石器実測図(1)	35
第27図	第2ブロック石器実測図(2)	36
第28図	背・腹両面にポジ面を有する剥片と石核との接合例	37
第29図	縄文・弥生土器拓影図	39
第30図	住居跡101・102出土遺物	40
第31図	住居跡103・112出土遺物	42
第32図	住居跡108出土遺物(1)	44

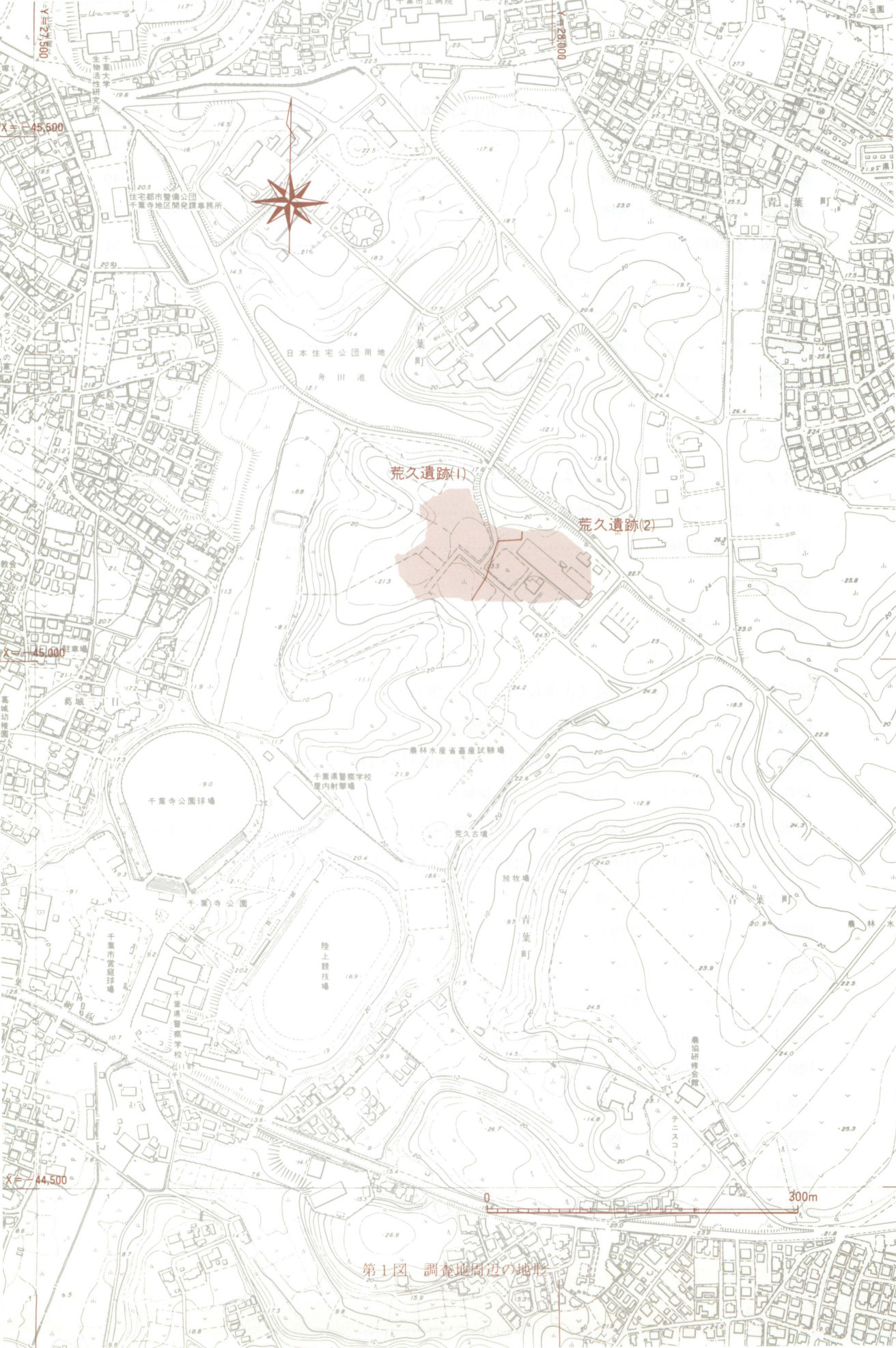
第33図	住居跡108出土遺物(2)・住居跡109出土遺物(1)……………	46
第34図	住居跡109出土遺物(2)……………	48
第35図	住居跡113出土遺物……………	49
第36図	住居跡104出土遺物……………	50
第37図	住居跡110出土遺物……………	51
第38図	溝跡・グリッド出土遺物……………	52
第39図	錢貨拓影……………	53
第40図	荒久遺跡の先土器時代石器群の変遷……………	55
第41図	下総台地における先土器時代石斧出土遺跡分布図……………	56

表目次

第1表	第1ブロック石器属性表……………	31
第2表	第2ブロック石器属性表……………	37
第3表	錢貨計測値……………	53

図版目次

図版1	荒久遺跡周辺の航空写真
図版2	荒久遺跡全景
図版3	(1)荒久古墳現状(2)荒久古墳現状(3)荒久古墳石室
図版4	(1)第1ブロック(2)第2ブロック(1)(3)第2ブロック(2)
図版5	(1)住居跡101・102, (2)住居跡103, (3)住居跡110・111
図版6	(1)住居跡112, (2)住居跡113, (3)住居跡104
図版7	(1)住居跡104炭化材出土状況, (2)住居跡104加工木材出土状況, (3)溝107馬歯出土状況
図版8	(1)住居跡108, (2)住居跡109, (3)住居跡109遺物出土状況
図版9	(1)溝 西から, (2)溝 東から
図版10	先土器時代の遺物(1)
図版11	先土器時代の遺物(2)
図版12	先土器時代の遺物(3)
図版13	住居跡101・102・103出土土器
図版14	住居跡108出土土器
図版15	住居跡108・109出土土器
図版16	住居跡109出土土器
図版17	住居跡113・104・110, グリッド出土土器
図版18	(1)縄文・弥生時代の出土土器, (2)その他の遺物



第1図 調査地周辺の地形

1 章 序章

1 節 調査に至る経緯

千葉市青葉町に所在する農林省畜産試験場跡地に、千葉県によって青葉の森公園建設が計画された。畜産試験場跡地は、以前より荒久古墳の存在が知られていたが、包蔵地についての詳細は不明であった。そのため千葉県都市部都市整備課より千葉県教育庁文化課へ、埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについての照会があった。文化課ではこれに基づいて協議を行い、財団法人千葉県文化財センターに試掘調査を委託することにした。

試掘調査は昭和57年11月1日から同11月30日にかけて行われ、総面積537,000m²のうち斜面部等を除いた台地部分の310,000m²の範囲を調査した。4,438m²、約1.4パーセントの試掘が行われ、その結果、住居跡9軒、溝10条、焼土遺構及び土坑各1基、古墳1基、弥生時代終末から古墳時代の土器が検出された。そして、この試掘調査では台地部分の東側に遺構が確認されなかったため、確認調査をおこなう範囲は112,000m²となった。

この確認調査は昭和58年10月1日から12月31日かけて実施され、多くの遺構が検出された。確認調査にあたっては、まず調査区に公共座標に従ってグリッドを設定した。方眼の設定にあたっては座標X=-44.8、座標Y=27.70を基点にして両軸を各々50m間隔で区切り、大グリッド(50m×50m)とし、さらにその中を5m×5mの100個の小グリッドに分割した。大グリッドはX軸が西から東にA・B・C～Mと進み、Y軸が北から南に1・2・3～8の名称をつけ、両方を組み合わせてA1・A2というように呼称した。そして、大グリッドの中にある小グリッドは北西の隅にある小グリッドを起点として西から東へ00・01・02～09、北から南には10・20・30～90というように一番南東隅にある小グリッドが99になるように設置し、これに大グリッドの名称を組み合わせてA1-00、A2-01というように呼称した。なお、座標X=-44.8、座標Y=27.70の点はA1-00グリッドの北西隅に存在する。

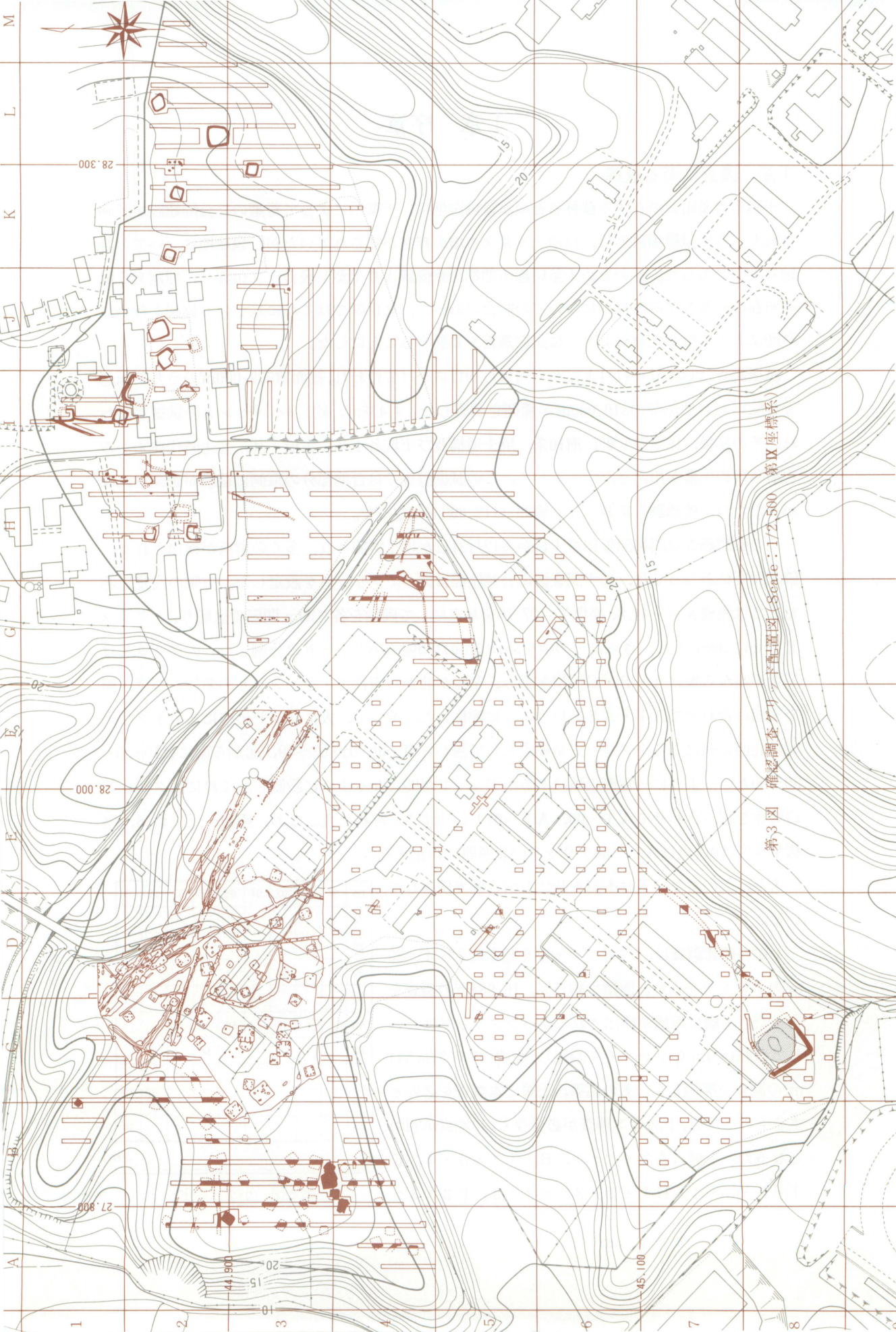
また、このグリッドは本調査時にも引き続き使用している。

上層の確認調査は、まず小グリッドを基本に2×4～80mのトレンチを入れ、面積の約15%、16,984m²の調査を行った。上層に遺構が検出されなかったグリッドにたいしては2m×4mのトレンチを設定し、面積の約0.5%、544m²の調査を実施した。その結果、上層で本調査を必要とするもの3地点、下層で本調査が必要なもの3地点が明らかとなった。上層はA2・3・4、B1・2・3・4、C1・2・3・4、D1・2・3、E2・3、F2・3グ

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

0 50 m

第2図 小グリッド



第3図 確認調査の1/2配置図 (Scale: 1/2,500) 第IX座標系

リッドまで包括する第1地点，C 7・8グリッドの第2－1地点，H 1・2，I 1・2，J 1・2，K 2・3，L 2・3，M 2グリッドの第3－1地点が認められる。第1地点は標高22m前後の台地上にあり，弥生時代後期から古墳時代の集落跡を中心に，一部奈良・平安時代のものも含む遺跡であり，重複を含むものの住居跡66軒以上，土坑21基以上，溝23条以上が存在し，本遺跡で最も多くの遺構が検出されている地区である。第2－1地点は，標高22～23mの台地に所在する。本地点は畜産試験場関係の建物等が密集していた地域にあたり，かなり削平を受けており，場所によってはハードローム以下まで削平を被っているところも存在する。遺構は前述の荒久古墳の1辺24m，幅1.9m～2.2m，深さ0.5m～0.8mの方形プランを呈する周溝1基と時期不明の溝2条が検出された。

第3－1地点は，標高22～23mの台地上に立地し，奈良・平安時代の方形周溝状遺構17基と時期不明の土坑8基，溝5条がみられる。

下層の先土器時代の遺物集中地点は，第2－1地点内のB 7グリッドと，第3－2地点内のL 3グリッド，第3－3地点内のK 4グリッドが存在することが明らかとなった。

これらの本調査範囲の取り扱い，上層本調査範囲については住居跡等の遺構の本調査後に下層を対象とする確認調査を実施し，その結果に基づき必要な箇所について下層の本調査を実施し，下層本調査については，下層の調査のみを実施することが，千葉県教育委員会より回答された。

そして前述のように青葉の森公園建設に先行する調査がこの結果をうけて調査されることとなった。今回の本調査の対象は公園管理施設予定地である第1地点内のE 2・3，F 2・3グリッドを中心とする6,000㎡の面積である。

なお，この調査と並行して，同じく第1地点のC 1・2・3グリッド，D 1・2・3グリッドを中心とする地区に県立中央博物館の野外観察地の造成に伴う本調査が実施された。これらの遺跡は調査地も近接し，同一遺跡であるが，事業者がそれぞれ異なっているため，本遺跡を荒久遺跡(2)とし，野外観察地造成に伴う調査の地区を荒久遺跡(1)として報告することとなった。

なお，第1地点の残りの地点，A 2・3・4，B 1・2・3・4，C 2グリッドは，同じく野外観察地として造成されることとなっているが，この地区については盛土保存のため発掘調査は実施しないこととなった。また，第2－1地点の荒久古墳に関しては現状のまま保存することが決定された。そして，これ以外の地点に対しては公園の整備計画に沿って随時発掘調査が実施される予定である。

2 節 調査の概略と方法

本遺跡の調査と並行して，中央博物館(仮称)野外観察地(荒久遺跡(1))関係でも埋蔵文化財調査を行ったが，これらは前述したように隣接した同一の遺跡であり，実際の作業にあつ

ては、作業の能率上同一の調査として作業工程を組み、両遺跡の調査員が協力して調査を行った。

調査は、バックホウによる表土除去から行ったが、畜産試験場の建物跡やコンクリート道路等が残存していたため、この除去にはかなりの手間と日数がかかってしまった。おおよそ確認面まで下げ、遺構の精査を行うと同時に測量杭が不足している地区に対する杭打を行った。グリッド配置は確認調査時のものと同様である。

検出された遺構は、弥生時代末期から古墳時代後期にかけての竪穴住居跡10軒と遺物、時期不明の溝8条、先土器時代の遺物集中区2箇所であり、遺物包含層からは縄文時代早期の土器と中期の土器、弥生時代後期の土器および歴史時代の古銭等が僅かではあるが検出された。

3節 荒久遺跡(2)の立地と周辺の遺跡

千葉市は東京湾に面し、房総半島の付け根に位置している。市内のほとんどは下総台地といわれる標高20～30mの低い台地によって占められる。この台地は花見川、都川等の東京湾に注ぐ河川やその支流により開析されたり、また東京湾から入り込む溺れ谷によって樹枝状に刻まれた複雑な地形をつくり出している。台地は千葉市幕張から千葉市登戸付近までは海岸線ぎりぎりまで迫っているが、そこから南は台地の前に幅1km以上の海岸平野が開け、村田川や養老川の三角州へ続いている。

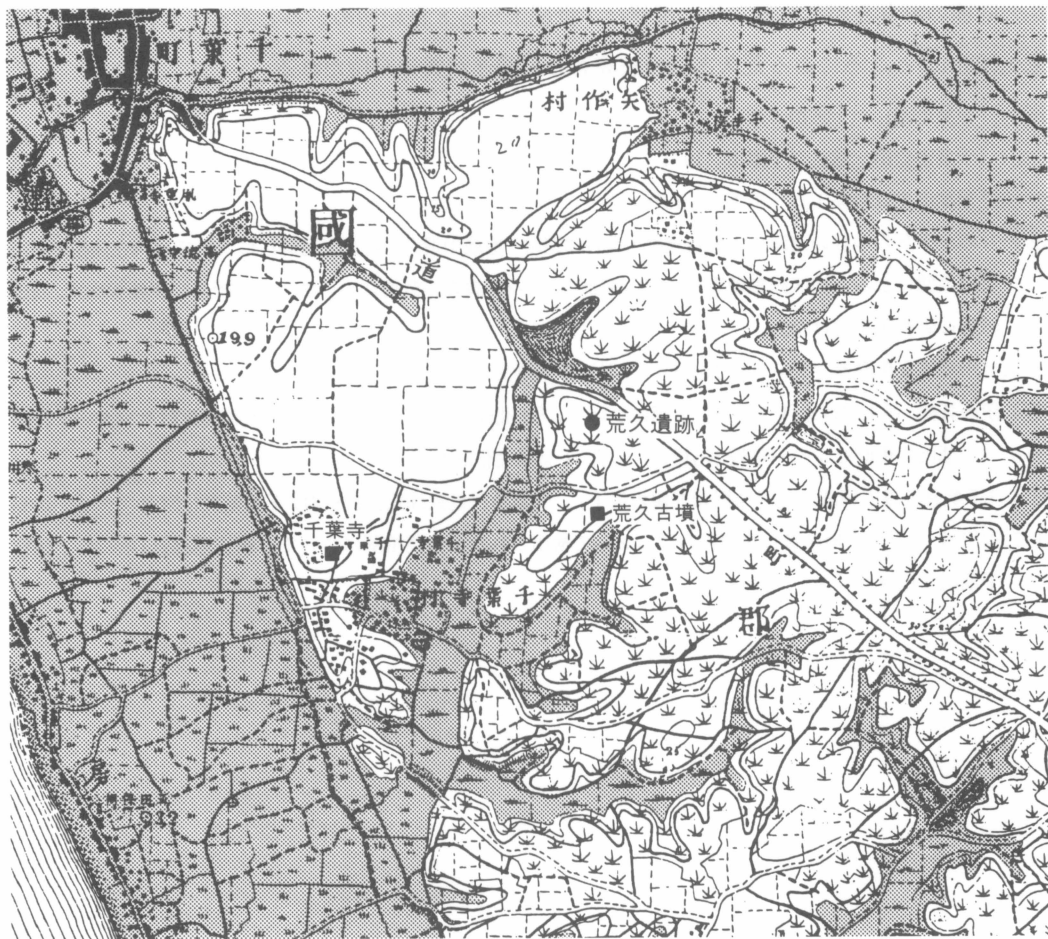
荒久遺跡(2)は東京湾から入り込む谷の奥部に面した標高22～23mの台地上に立地する。この谷は千葉市末広町付近の海岸平野から北に伸びる細長い谷で、通称『千葉寺谷』といわれる。千葉寺谷は更に木の枝のように両側に小支谷を形成しているが、これらに面して幾つかの遺跡が存在する。中でも千葉寺谷の東側の台地は近年の宅地開発などの波により発掘調査が進み現在も継続中でその内容が明らかになりつつある地域である。これら周辺の遺跡のうち、調査が行われた遺跡の幾つかを紹介しておく。

荒久古墳¹千葉市指定史跡。荒久遺跡の調査区からは約250m南にある。現状では墳丘はかなり改変されているが、方墳である。現状では1辺9mを測る。南に横穴式石室が開口するため「石の唐戸」ともいわれる。明治24年に発掘調査を行っているが、遺物は散逸し詳細は不明である。その後昭和34年に再度石室内の精査を行い、人骨1体分と琥珀製棗玉3点・鉄製馬具破片等を出土した。石室は凝灰質性砂岩の切石積みで、短い羨道と玄室からなり、天井には6枚の巨石を使用している。床には粘土を敷き両隅に排水溝を設けている。昭和58年度の確認調査時にも墳丘の周辺にトレンチを設定し、北西側の一部を除き方形に周溝が巡っていることを確認した。周溝の規模は1辺24m、幅1.9m～2.2m、深さ0.5m～0.8mである。石室の主軸方向は古墳の主軸方向とは若干ずれているようである。従って本来は1辺20m程の方墳であったらうと思われる。7世紀に築造されたといわれる。

中野台遺跡^{1・2・3・4}千葉寺谷の西側の台地上に立地し、荒久古墳のさらに南側の谷の入り口近くにある。昭和31年に発掘され、ほぼ完形の弥生式土器の壺2点を出土した。遺構は検出されなかったが、弥生時代の再葬墓ではないかと言われる。昭和60・61年度の調査では縄文時代早期から中・近世の遺構・遺物を検出した。竪穴状区画遺構は中世から近世の居住区、墓域と思われる、区域内から柱穴列、土壌、地下式土壌等を検出した。遺跡の西側については調査が終了していない。

鷲谷津遺跡^{5・6・7}昭和53年度に発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居17軒の他、溝・土壌等を検出した。その後昭和61年から調査され、現在継続中である。奈良・平安時代を中心とする集落である。また、縄文時代早期の遺物包含層を確認した。昭和62年度の調査で、鷲谷津遺跡B区から奈良時代の終りから平安時代初頭のものと思われる蔵骨器が出土した。

地蔵山遺跡 荒久遺跡の南と鷲谷津遺跡の北の2つの小支谷にはさまれた細尾根上にある。荒久古墳からは僅かに230mのところにある。現在調査確認中で、縄文時代早期の包含層、古墳時代の住居跡等を検出している。荒久遺跡と近い時期の集落である可能性が高く本遺跡との関係



第4図 遺跡周辺図（明治15年参謀本部陸軍部測量局作成）

が注目される。

観音塚遺跡⁵・鷲谷津遺跡の東側で、小支谷により画されている。古墳時代後期～奈良・平安時代を中心とする集落跡。やはり昭和54年に調査が行われ、鍛冶遺構の検出で注目された。さらに昭和60年度から昭和63年度の調査でかなりの規模の遺跡であることがわかった。フィゴの羽口・鉄滓のほか畿内系螺旋暗文土器が出土し注目される。地名の由来となった観音塚が所在したが封土はほとんど湮滅している。方形の塚で、布目瓦を出土したと言われ、千葉寺の縁起によれば創建の地とされている。

山の神遺跡⁶ 観音塚遺跡の南東に位置する。奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒のほか土壌、集石礫群が検出された。

千葉寺¹ 千葉市指定史跡。荒久遺跡とは千葉寺谷をはさんで南東約600mの西側の台地に立地する。当寺に伝わる縁起によればその創建は和銅2年(709)といわれる。考古学的な調査は昭和5年、10年、24年、25年、27年の5回にわたって行われ、多数の布目瓦・土師器・須恵器のほか瓦塔を出土した。出土した瓦のなかには市原市光善寺廃寺や同市武士廃寺から出土した軒丸瓦と同種の軒丸瓦が含まれ、その創建は7世紀末から8世紀初めごろと考えられ、本寺から北東へ600mのところにある荒久古墳の被葬者との関連が興味を持たれる。

註 1. 『千葉市誌』 千葉市 1953

『千葉市史第一巻』 千葉市 1974

『千葉市史資料編1』 千葉市 1976

註 2. なお、千葉寺地区の遺跡(中野台遺跡・鷲谷津遺跡・地蔵山遺跡・観音塚遺跡)については現在住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴い調査中である。調査の概要については調査担当の伊藤智樹氏、福田誠氏に御教示を受けた。

註 3. 『千葉県文化財センター年報 No11』 (財)千葉県文化財センター 1985

註 4. 伊藤智樹 「土壌群を伴う竪穴状区画について」『研究連絡誌』第17号 (財)千葉県文化財センター 1986

註 5. 『千葉県文化財センター年報 No12』 (財)千葉県文化財センター 1986

註 6. 『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書 I』 千葉急行電鉄株式会社・(財)千葉県文化財センター 1983

註 7. 福田誠 「千葉寺地区鷲谷津遺跡B区において検出された合口壟棺墓について」『研究連絡誌』第22号 (財)千葉県文化財センター 1988



第5図 荒久遺跡(2)遺構配置図

2章 遺構

1節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は10軒が検出されているが、後に述べる溝跡とともに豚舎・牛舎などの構築物によってかなり攪乱を被っており、遺構の残存率は良くない。しかしながら、住居跡には炭化材が集中してみられるものがあり注目される。以下、時期別に住居跡を説明していく。なお、これらの遺構の番号は現地で使用した3桁の通し番号を使用し、番号の前には遺構の種別を併記することとした。

弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡 住居跡101・102・103・111・112

住居跡101 (第6図, 図版5)

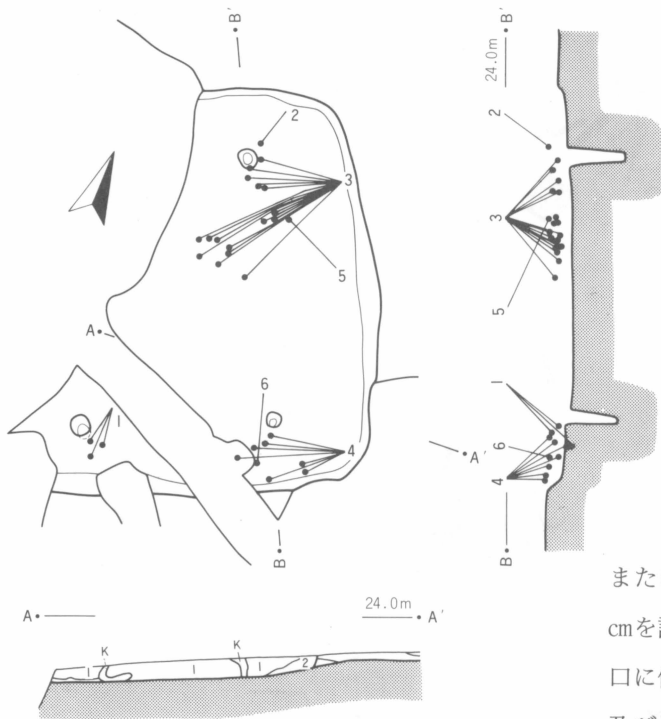
調査区の南西隅D3-85グリッドに所在する。住居跡の西側1/3が大きな攪乱によって破壊されており、北側部分にも溝状の浅い攪乱がみられる。住居跡102と重複関係にあり、102の西壁を切って存在する。平面形はほぼ方形でN-30°-Wに主軸を置く。規模は4.2m×4.0mである。確認面から床面までの深さは平均20cmであり、床面は中央部がやや低くなっているが、とくに硬い面はみられなかった。壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。床面からは3本の支柱穴が検出されたが、遺存部に炉を検出することはできなかった。柱穴はいずれも正円形に近い掘り方であり、径は20cm~25cmで、深さは45cm~60cmである。遺物は全体に床面から浮いた状態で検出されている。

住居跡102 (第6図, 図版5)

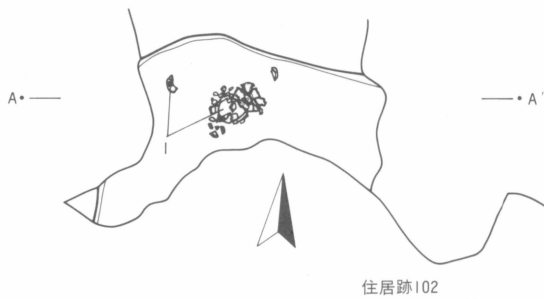
調査区の南西隅のD3-85グリッドに所在する。住居跡101に西壁を破壊され、荒久遺跡(1)から伸びる溝028に東壁を切られ、さらに南側部分を大きな攪乱によって破壊されており住居跡の規模は不明となっている。確認面から床面までの深さは5cm~10cm程度と浅く、壁は傾斜して緩やかに立ち上がる。遺存部からは柱穴や炉等は検出できなかった。遺物は半完形の大型の甕が1個体出土している。土層は、住居跡101・102、溝028ともに各3層に分けられた。住居跡101。1.黒褐色土 ローム粒・褐色土を少量含む。2.黒色土 ローム粒・褐色土を少量含む。3.暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。住居跡102。4.暗褐色土 ローム粒、褐色土を含む。5.暗褐色土 ローム粒及び褐色土を小ブロック状に含む。6.明褐色土 暗褐色土とローム粒との混合土で焼土を含む。溝028。7.暗褐色土 ローム粒を含む。8.黒褐色土 ローム粒及び褐色土を小ブロック状に含む。9.黒褐色土 黒色土と褐色土が小ブロック状に混合し、ローム粒を含む。

住居跡103 (第7図, 図版5)

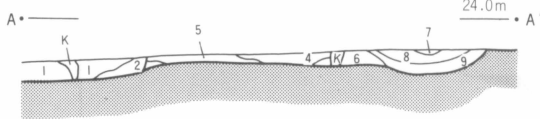
発掘区南西のD3-78グリッドを中心とする地点に所在する。住居跡北東部に攪乱がみられ、壁の一部にも攪乱が存在し、上端が明らかでないところもみられるものの、本遺跡の住居跡で



住居跡101



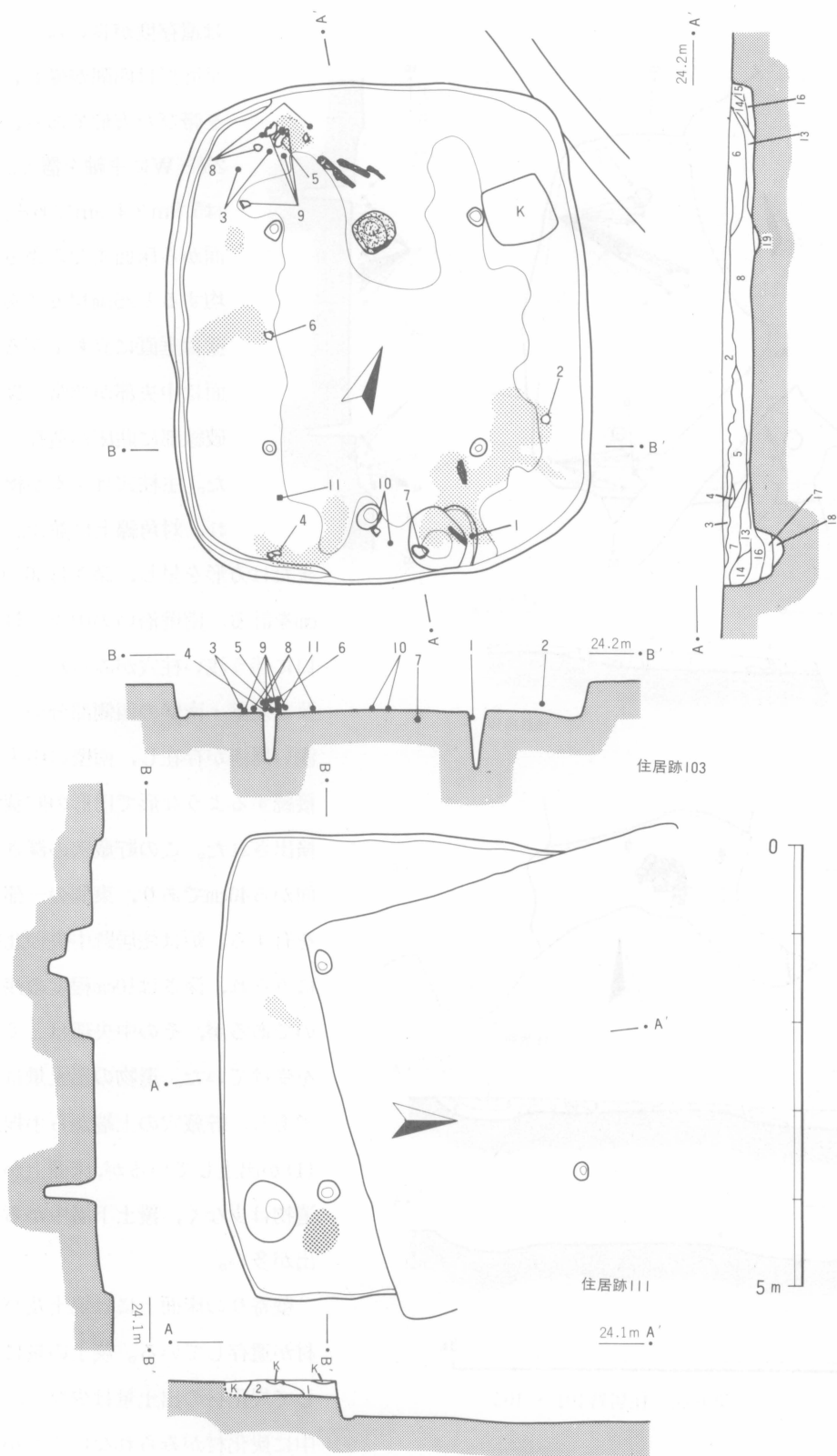
住居跡102



第6図 住居跡101・102

は遺存度が良いほうである。平面形は四隅が僅かに丸味を帯びた方形であり、N-25°-Wに主軸を置く。規模は5.9m×4.9mである。確認面から床面までの深さは平均すると25cm程度であり、壁は垂直に立ち上がる。床面は中央部が非常に硬く、破線部に貼床が遺存していた。支柱穴は4本が検出され、対角線上に並ぶ。円形または方形を呈し、深さは50cm~70cmを計る。南壁沿いの中央には出入口に伴う浅い柱穴がみられる。西壁及び北壁・南壁の西側部分の一部に浅い周溝が存在し、南壁の中央部に接続するような形で円形の貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴の深さは床面から40cmであり、東側の一部に段を有する。炉は住居跡中央の北寄りにみられ、深さは10cm程度の浅いものであるが、その中央部はとくに熱を受けていた。遺物の出土量は僅かである。貯蔵穴の上端から手捏土器(1)が出土しているが、床面上からの遺物は少なく、覆土下層中からの検出が多い。

壁寄りの床面上には焼土及び炭化材が遺存している。焼土の量に比較して炭化材の出土量は少なく、柱穴中に炭化材がみられないことから、柱を除去した後に住居を焼き払った



第7図 住居跡103・111

ものとも考えられる。土層は、焼土の有無で細かく分層できる。1.黒褐色土 黒色土を主体とする。2.黒褐色土 黒色土とローム粒・ロームブロックが混合する。3.黒褐色土 黒色土とローム粒の混合。4.暗褐色土 ロームと黒色土の混合。5.黒色土 焼土粒・ローム粒を含む。6.暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。7.暗褐色土 黒色土とロームの混合。焼土を含む。8.黒褐色土 黒色土とロームの混合。細かい焼土粒を含む。9.暗褐色土 黒色土に少量のロームが混ざり、焼土を多く含む。10.黒色土 細粒の黒色土。11.暗褐色土 黒色土に少量のロームが混ざり、焼土を中程度含む。12.焼土 焼土の単一層。13.暗赤褐色土 黒色土と焼土の混合。14.黒色土 粒の大きなローム・焼土粒が混入する。15.褐色土 ロームを主体とする。16.暗褐色土 黒色土とロームの混合に少量の焼土が含まれる。17.暗褐色土 ローム粒とロームブロック、黒色土が混ざった崩れやすい土。18.黒褐色土 ローム粒混入。19.暗赤褐色土 焼土・ローム粒、黒色土の混合。20.赤褐色土 焼土粒を主体とし、ロームと被熱されたロームを含む(19下部)。

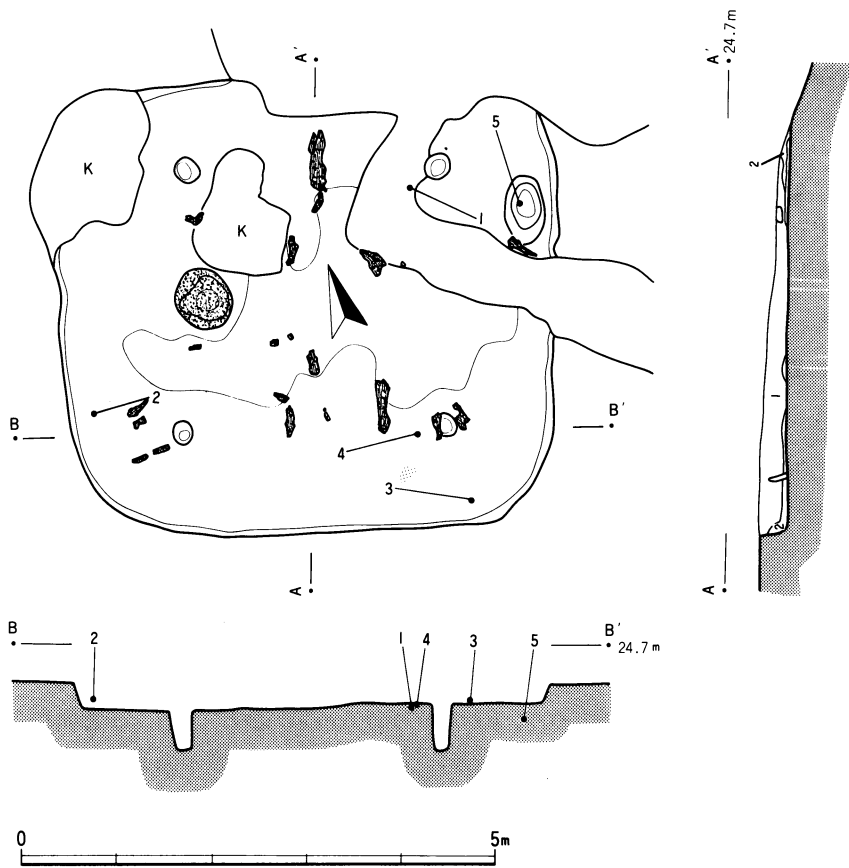
住居跡111 (第7図 図版5)

D 3-57グリッドに所在し、住居跡の北部から中央部が住居跡110によって切られている。平面形はやや膨らんだ方形を呈しており、東西の規模は5m30cmほどである。確認面から床面までの深さは5cm~12cm程度と浅く、とくに西壁ははっきりとした立ち上がりが検出できなかった。床面は硬い面が住居跡南東部に僅かにみられる程度である。支柱穴は南側の2本を検出したのみであり、本住居跡を切って存在する110号跡の床面を剥がしても柱穴を検出することができなかった。柱穴の直径は20cm~25cmで、深さは45cmである。住居跡の南東隅には直径70cmで深さ20cm程度の円形を呈する貯蔵穴が存在する。この貯蔵穴のすぐ北側には床面上に粘土が厚さ3cm~5cm、直径50cm規模で円形に堆積し、住居跡の南側中央には焼土が僅かに堆積していた。本住居跡からは遺物がまったく検出されていないものの、鬼高期の竈を有する110号跡に切られて存在するので鬼高期かそれ以前の時期の遺構と考えられる。また、この110号跡からは混入と思われる弥生時代末から古墳時代初頭の遺物が検出されているので、本住居跡はおそらくはその時期のものと考えられる。

土層は2層に区分される。1.黒褐色土 粗いローム粒を含む。2.黒色土 ローム粒を含む。

住居跡112 (第8図, 図版6)

発掘区の西寄りの中央、E 3-41グリッドに所在する。平面形は長方形を呈し、長軸5.2m、短軸4.8mを計る。主軸方向は西に偏しており、N-73°-Wである。住居跡の北西部に3箇所の攪乱がみられ、北東部に溝状の攪乱が入る。確認面より床面までの深さは平均20cmであり、壁は直立気味に立ち上がる。床は中央部に硬い面を残し、床面からは4本の柱穴と貯蔵穴・炉が各1基検出された。柱穴は対角線上に並び、円形で、深さは約40cmである。貯蔵穴は東壁北側部分に近接してみられ、形態は楕円形を呈し、規模は70cm×40cmで、深さは27cmである。炉は



第8図 住居跡112

住居跡中央のやや東寄りに存在し、円形で深さ約10cmの皿状を呈する浅い窪みであり、焼土が中程度遺存していた。床面直上からは焼土や長さ5cm～60cm程度の炭化材がみられた。遺物の出土は少ないが、壺(2)や甕(4)などが床面から出土している。

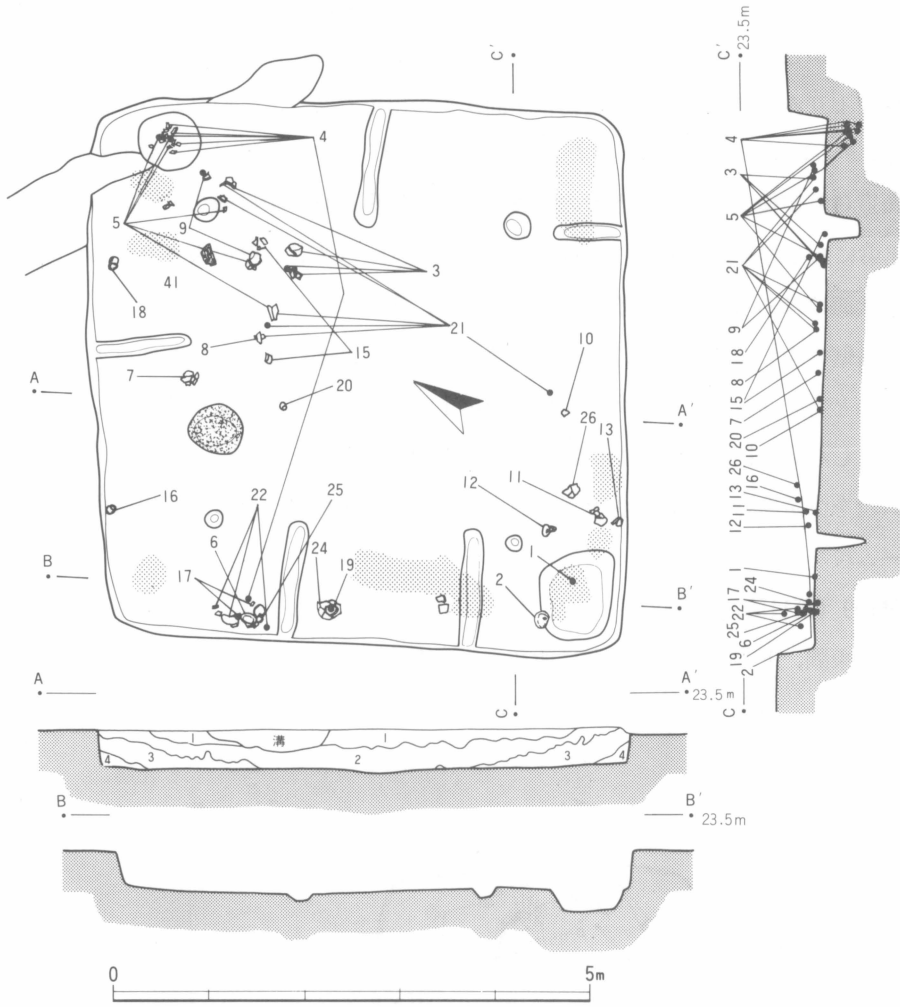
土層は2層に分層できる。1.黒褐色土 緻密な堆積で粗いローム粒と焼土を含む。2.暗褐色土 黒色土とロームが混在し、緻密な堆積状態を示す。

古墳時代前期から中期の住居跡 住居跡108・109・113

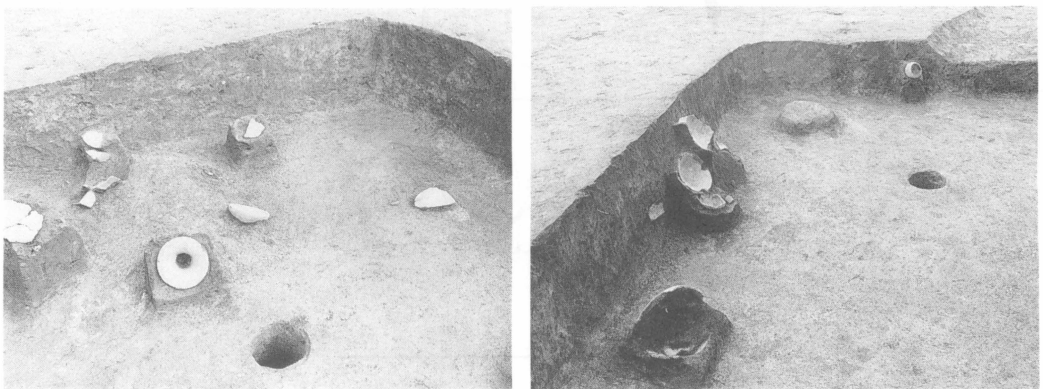
住居跡108 (第9・10図, 図版8)

発掘区の南東隅、F3-66グリッドを中心とする地点に所在する。他の住居跡に比較して遺存状態は良いほうである。平面形はほぼ方形でN-27°-Wに主軸を置く。規模は5.6m×5.6mであり大型の住居跡である。確認面から床面までの深さは平均で約30cmであり、床面は貼床がなされ、全体に平坦である。床はとくに硬い面は明確に検出できなかったが、炉の南東側の小範囲に若干硬さが認められる。壁の遺存は良好で、壁は直立気味に立ち上がる。床面からは主柱穴が4本、貯蔵穴が2個、間仕切りと考えられる溝5条、炉1基が検出された。柱穴は対角

線上に並び、いずれも円形で深さは30cmから50cmである。貯蔵穴は住居跡の北東隅に円形のもの、南西隅に方形のものがそれぞれみられ、円形を呈するものは深さが50cmであり、方形のもの



第9図 住居跡108



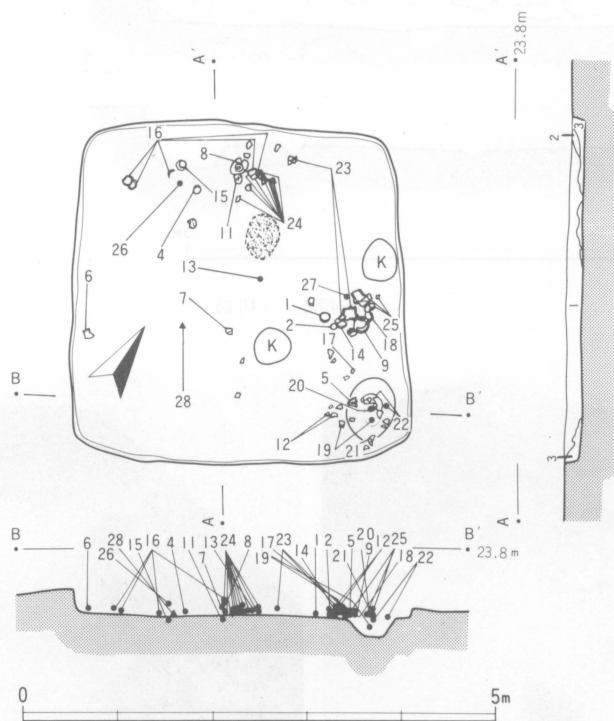
第10図 住居跡108遺物出土状況

のは25cm程度で覆土に焼土が詰っていた。間仕切りと思われる溝は長さが70cmから130cm、幅は20cm前後で、深さは10cm程度の浅いものであるが、床面とは明瞭に区別された。これらはいずれも壁に直交する形で検出され、北壁と東壁の中央に1条、南壁の東寄りに1条、西壁に2条が存在する。炉は住居跡の北寄りの中央にあり、円形で掘り込みは10cm程度と浅いものの、底面は被熱により赤褐色を呈する。遺物は床面からの出土も多く、完形品がみられ、遺存状態が良い。西壁からは壁の途中に掛かったような状態で高杯(6)などが出土し、北壁からも同様な状態で無頸壺(16)が検出された。西壁の中央部分からは甕(24)の中に壺(19)が入った状態で検出され、北東にある貯蔵穴の中からは高杯(4)が出土した。また、北壁の東寄りからは床面からやや浮いた状態ではあるが完形の壺が出土しており、注目される。

住居跡の壁に面した床面には、炭化材・焼土がみられ、本住居跡はいわゆる火災住居の範疇に入るものと考えられるが、全体に炭化材の出土が少なく、火災によって焼失したものかどうかは判然としない。土層は4層に分類できる。1.黒灰色土 ローム粒を少量含む。2.黒色土 粗いローム粒を少量含む。3.暗褐色土 黒色土とローム粒・焼土を含む。4.黒褐色土 黒色土に粗いローム粒を多く含む。

住居跡109 (第11図, 図版8)

発掘区北東隅, F 3-25グリッドに所在する。本住居跡は厚く堆積した黒色土を掘り込んで構築されており、床面はソフトローム面にみられた。北側の壁は明瞭に検出できたが、南側は



第11図 住居跡109

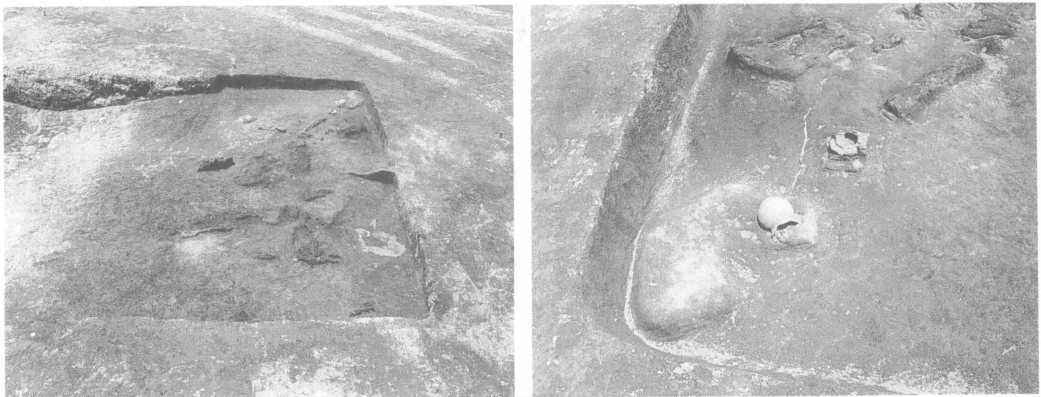
黒色土と区別できず、サブトレンチを設定してなんとか検出することができた。住居跡の中央部の南寄りと東壁中央部付近に小規模な攪乱がみられる。平面形は方形を呈し、主軸はN-37°-Wである。規模は3.5m×3.5mであり、確認面から床面の深さは平均15cm程度であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦であるが、硬い面は認められなかった。床面からは貯蔵穴と炉が検出されたが、柱穴・周溝は検出できなかった。貯蔵穴は住居跡の南東隅にあり、円形で深さは20cmを計る。炉は中央部のやや北寄りに存在し、僅かに焼土がみられるのみで掘り込みは認められなかった。

遺物は床面からの出土が多く、完形のものもみられ、本遺跡の中で最も出土状況が良好である。遺物は大きく3箇所に纏まっており、炉の北側と東壁隅および東壁寄り中央部にそれぞれみられ、炉の北側からは完形の鉢(4)が、東壁寄り中央部では鉢(1)、埴(14)が検出され、東壁隅からは同じく完形のミニチュア土器(3)が出土した。また、貯蔵穴の上からは完形に近い大型の甕(22)が出土し、住居跡の西寄りの中央付近からは鉄鏟(28)が床面に密着して出土した。

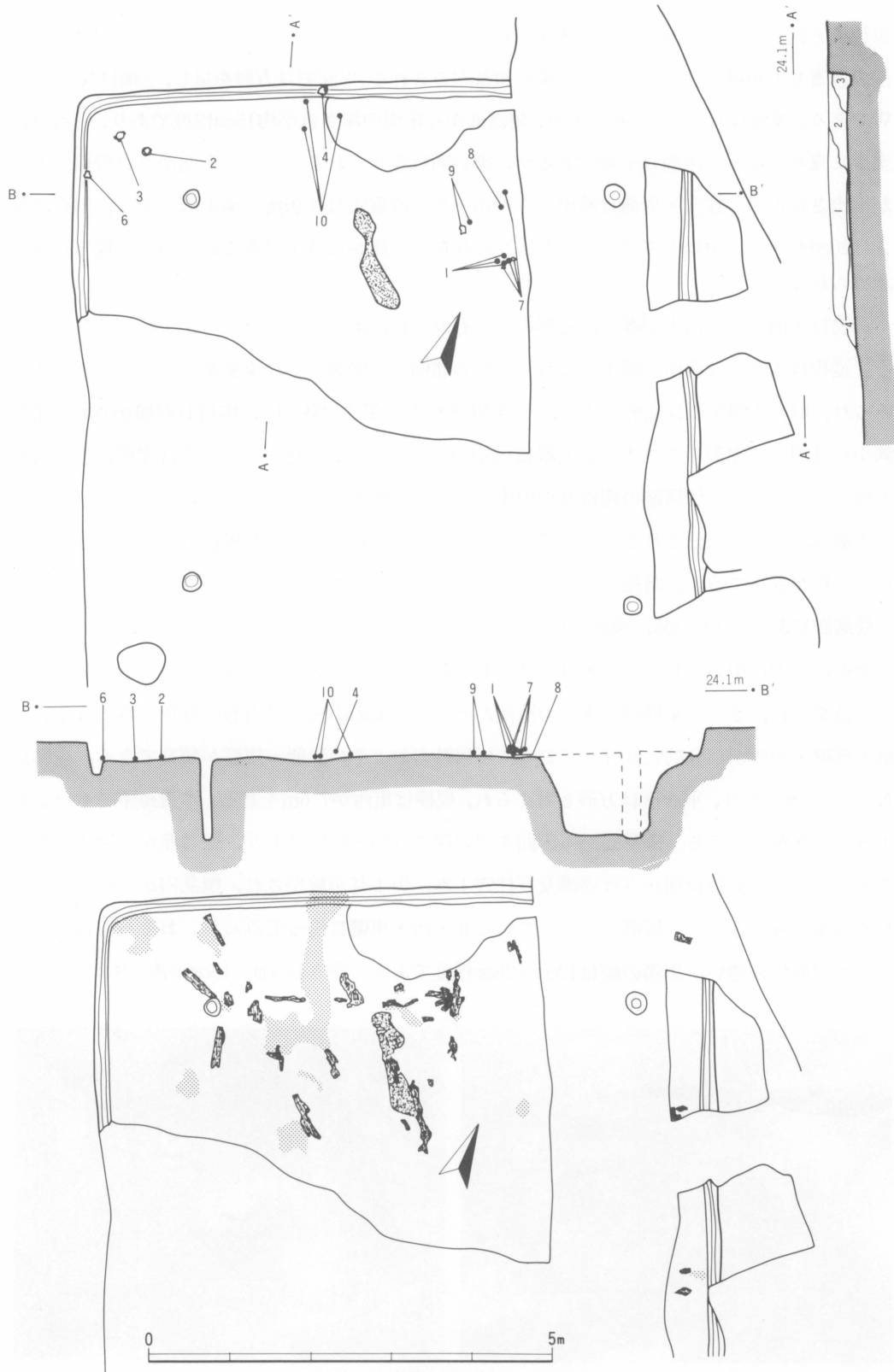
土層は、3つに区分される。1.黒色土 少量のローム粒を含む。2.黒色土 黒色土と焼土・ローム粒が混在する。3.暗褐色土 ロームと黒色土が混在する。

住居跡113 (第12・13図, 図版6)

発掘区の西側中央のE 3-11・21グリッドに存在する。住居跡の南側半分が大きな攪乱によって破壊され、さらに東壁側に溝状の攪乱が入り、北壁の中央に半円形の攪乱がみられる。北壁と西壁・東壁が部分的に残存しており、住居跡のおよその形態・規模が類推できる。主軸はN-26°-Wであり、平面形は方形と考えられ、規模は東西が7.6mを計る。本遺跡中でもっとも大きな住居跡といえる。確認面から床面までの深さは20cm程度であり、壁は僅かに開き気味に立ち上がる。床面残存部からは周溝及び柱穴1本、炉1基が検出され、攪乱内から貯蔵穴1基、柱穴3本が検出された。周溝は残存している北・西・東壁に沿ってみられ、おそらくは全周していた可能性が強い。周溝の幅は12cm~20cm程度であり、深さは5cm~10cmの浅いものである。



第12図 住居跡113遺物出土状況



第13図 住居跡113平面図及び炭化材出土状況図

柱穴は対角線上に配置され、形態はいずれも円形で、直径20cmと小振りにもかかわらず深さは60cm～1 mにおよぶ。貯蔵穴は住居跡の北東隅にみられ、深い攪乱のため大部分が削平され、僅かに底面部分のみが検出された。床面からの推定の深さは55cm程度と考えられる。炉は中央やや北寄りにみられ、長さ120cm、幅10cm～30cmで南北に細長く伸び、深さ数センチ程度の浅いものである。遺物は少量であり、床面から僅かに浮いた状態のものが多いが、北西隅の床面からはほぼ完形の壺(3)が出土した。

床面直上には焼土と炭化材がみられる。炭化材は10cm～90cmほどのものがあり、本住居跡はいわゆる焼失住居の範疇として捉えられる。

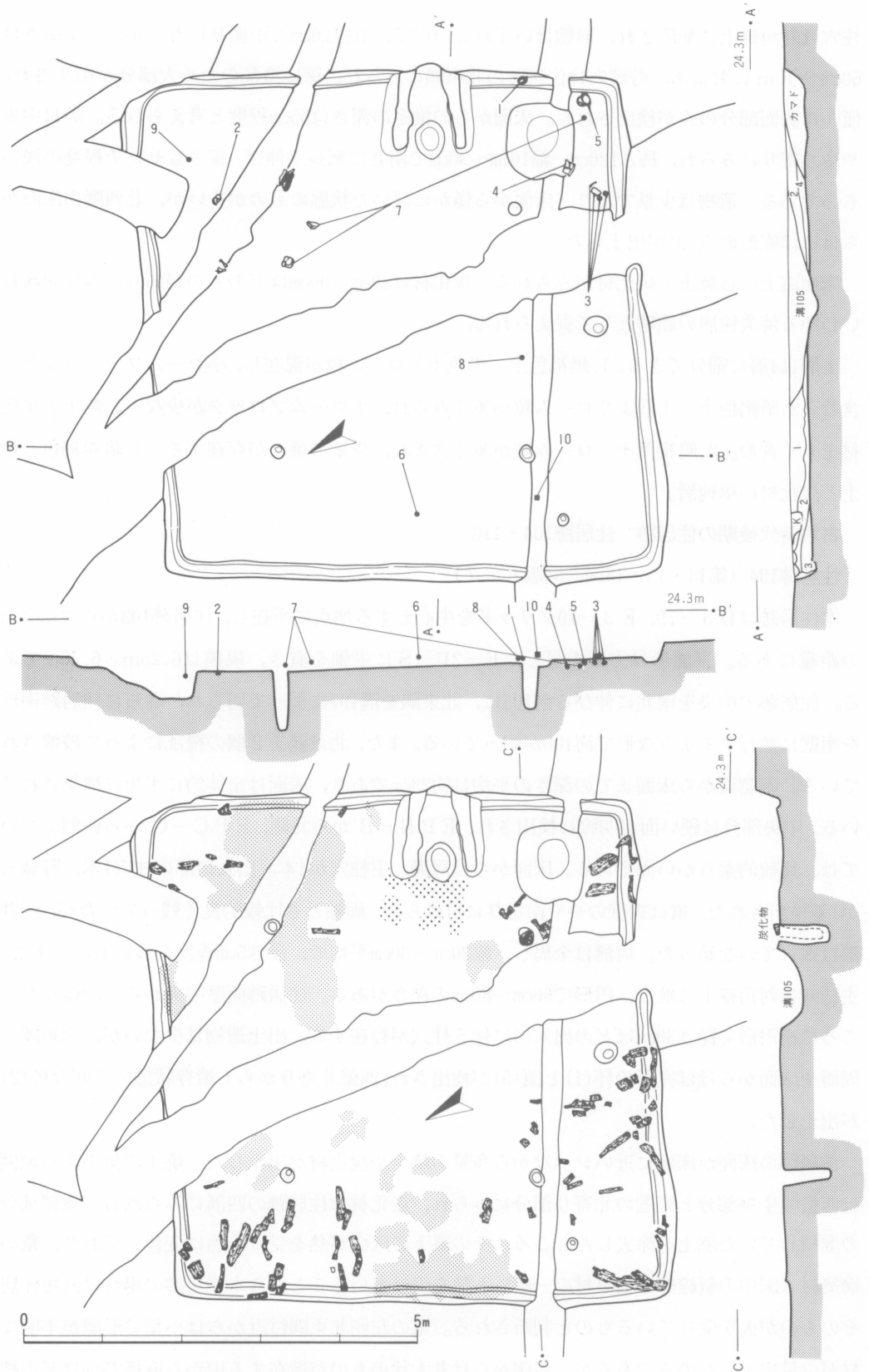
土層は4層に細分できる。1.黒褐色土 黒色土とローム粒が混在し、小ロームブロックを多く含む。2.暗褐色土 1層よりローム粒が多くみられ、小ロームブロックが少なく、焼土・炭化材を多く含む。3.暗褐色土 ローム粒が多く含まれ、少量の焼土が存在する。4.暗赤褐色 焼土と炭化材の単純層。

古墳時代後期の住居跡 住居跡104・110

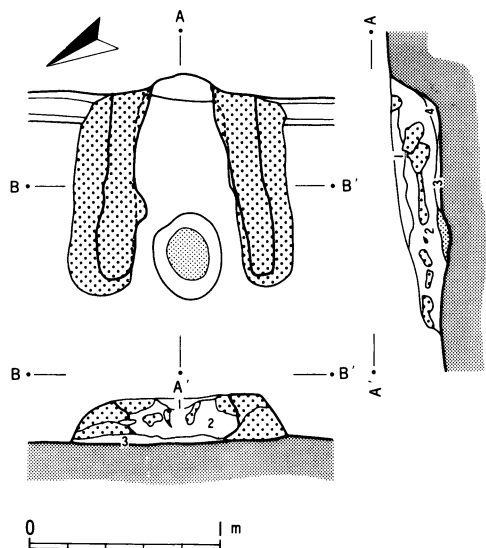
住居跡104 (第14・15・16図, 図版6・7)

本住居跡はD 3-79, E 3-70グリッドを中心とする地点に所在し、住居跡103から東に3 mの距離にある。平面形は方形を呈し、E-21-Sに主軸を置き、規模は6.25m×6.30mである。住居跡の中央を南北に伸びる溝105に、北東隅を溝107によって切られ、さらに住居跡南部を南壁に並行するような形で溝106が切っている。また、北東隅を2個の攪乱によって破壊されている。確認面から床面までの深さの平均は約23cmであり、床面は全体的に平坦に構築されている。中央部分は硬い面が明瞭に検出され、E P B-B'から北側、E P C-C'から西側については、比較的柔らかい面である。床面からは周溝、主柱穴が4本、出入口部の柱穴1本、貯蔵穴が1基検出された。竈は東壁のやや南寄りに付けられ、両袖とも比較的良く残っていたが、天井部は残っていなかった。周溝は全周し、幅20cm～30cm平均で、深さ5cm程度の浅いものである。主柱穴は対角線上に並び、円形で60cm～80cmの深さがある。住居跡南壁中央から30cm離れたところに楕円形で深さ30cmほどの出入口に伴う柱穴が存在する。出土遺物は少ないが、南東隅の周溝や床面からほぼ完形の杯(1)と甑(5)が検出され、西壁北寄りからも遺存状態の良好な杯(2)が出土した。

住居跡の床面か床面に近いレベルから多量の焼土や炭化材が出土した。焼土の集中する範囲は西壁の中央部分と東壁の北寄り部分にみられ、炭化材は住居跡の四隅にみられる。東壁部分の堆積していた焼土を除去したところ、その直下の床面が熱を受け赤色に変色しており、竈の構築材(図中の斜線部も構築材の一部)も熱を受けていることから本住居跡の場合は直接住居そのものが火を受けているものと判断される。竈の左側北東隅付近からは小型で形態が不明な材が少量出土したのみであるが、右側からは丸太状のものが散在する中から直径25cmほどの柱



第14図 住居跡104平面図及び炭化材出土状況図



第15図 住居跡104竈

材を検出することができた。この柱材は柱穴の中に存在し、床面から10cmほど突出しており、その上端面に斜めに切断したような痕跡が残される。南東隅部分では比較的大型のものが多く、長さ1m程度のもも存在し、とくに隅に近接して出土しているものは厚い板状をとどめている。また、端部に切断痕のみられる丸太材や加工された角状の材が数点認められる。西北部分には丸太状の炭化材がみられるが、全体に細いのが特徴的である。周溝内の覆土にも炭化材が認められ、壁の保護材があった可能性が考えられる。これら検出された炭化材は比較的多量ではあるが、住居構

築材の一部分のみであると判断される。本住居跡の場合は切断痕がみられる柱材の存在から類推して、おそらくは住居廃絶時に主要な部材を抜き取った後に住居に火を入れているものと考えられる。このような出土状況は小林清隆・山口典子氏¹⁾がすでに指摘しているように各地でみられ注目される。

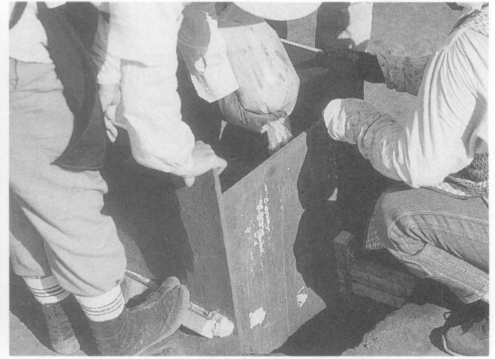
なお、この住居跡104と荒久遺跡(1)の焼失住居跡039については、柱穴の上に柱材が炭化して残っており貴重な資料と認識されるので、切り取り保存を行うことにした。また、これらの住居跡の残存している炭化材についてはできるだけ取り上げ、保存することを考えた。まず、これらの炭化材を検出してからすぐに乾燥による崩壊を防ぐためにPEG（ポリエチレングリコール）の薄め液を日に数回にわけて塗布した。これにより写真撮影や作図作業の間は、ほぼ現状を保つことができたが、いざ取り上げの段になると毎日塗布したのにも関わらず、PEGが内部まで充分浸透しないために大部分が崩壊してしまった。そこで、加工痕のある炭化材や柱材等、重要なものについてはPEGによる保護とともに、取り上げる際には薄い和紙を離型材として被せ、発泡ウレタンに包んで取り上げることとなった。

本住居跡の柱材および柱穴の土層の切り取りは、以下の手順で行った。

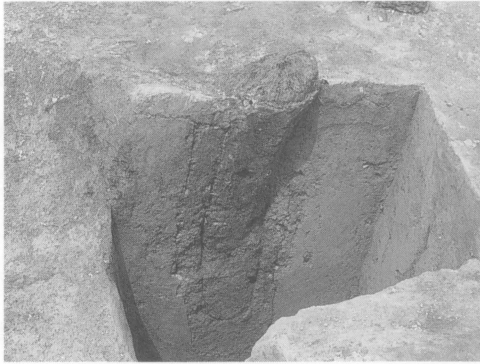
1. 柱穴部分の上面を精査し、半截を行う。その結果、柱材は柱穴の上面までの残存であることが明らかになった。ただし、柱痕は土層断面に明瞭にみられたため、切り取りを行うことにした。
2. 和紙を土層断面に貼り付ける作業を行う。
3. 半截部分に一枚の板を入れ、発泡ウレタンを入れる範囲を縮小してからウレタンを流し込む。
4. 柱穴の部分を中心として50cmを四角形に残して、周囲を半截した面と同じ深さまで掘り下げる。
5. 掘り下げた部分にそれぞれ板を入れ、四角形の箱のように組み合わせた後、発泡ウレタンを注入する。
6. 固まるのを待って下の



1



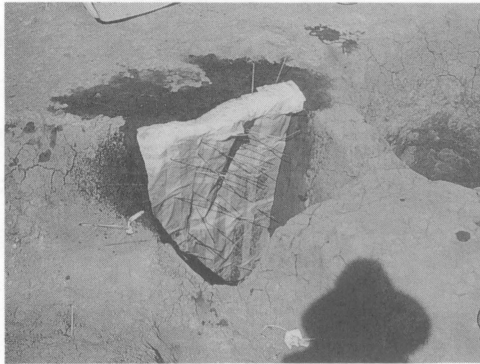
5



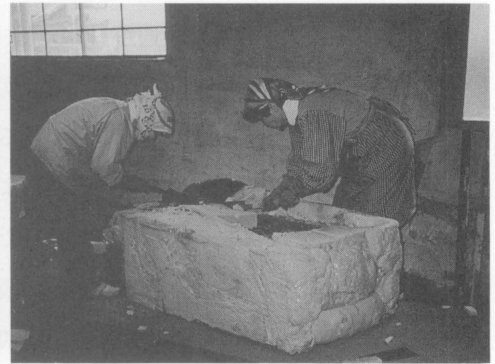
2



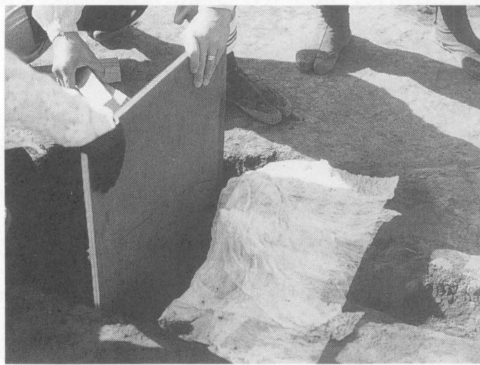
6



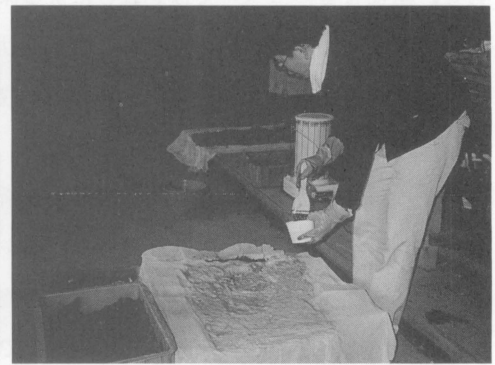
3



7



4



8

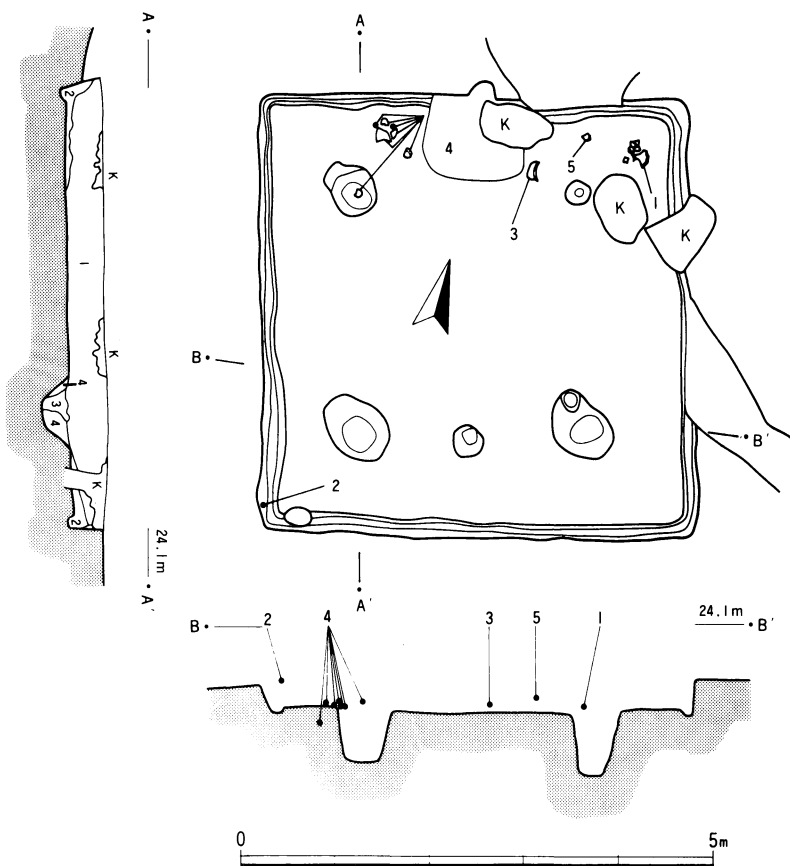
第16図 住居跡104第1主柱断面剥取工程

部分を切り取り、四方の板と一緒に取り上げる。以上が現地で行った作業であり、その後、室内で、7.四方の板を取り、発泡ウレタンを除去する。8.保存処理を行う。等の作業を行った。なお、この柱材を伴う土層断面については、当初柱材と一緒にそのまま保存すること考えたが、検討の結果、無理であるために剥ぎ取りによって保存することになった。現在、パネルにして資料保存がなされている。

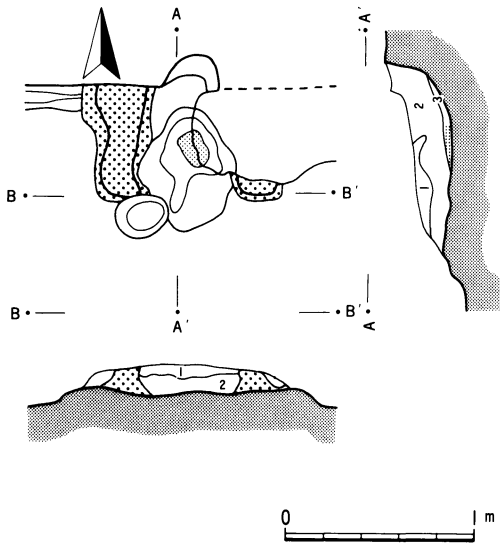
土層は4層に分層でき、1.黒色土層 焼土・ローム粒が混入する。2.明黒褐色土 黒色土と焼土が混ざりあい、黒色土の方が割合的に多い。3.暗赤褐色土 2と逆に焼土が黒色土よりも多い層。4.暗褐色土 ロームと黒色土が混ざり、焼土を含む層。竈の堆積土層は4層に分類される。1.黒色土 山砂と少量の焼土がみられる。2.暗褐色砂質土 山砂・焼土・ローム粒を含む。3.黒色土 少量の山砂を含む。竈構築前に下に貼った土と考えられる。4.暗褐色土 ローム粒と山砂がみられる。

住居跡110 (第17・18図, 図版5)

調査区のD 3-27グリッドに所在する。住居跡111を切って存在し、攪乱が住居跡北東部にみられる。平面形は方形を呈し、N-17°-Eに主軸を置く。規模は4.6m×4.55mであり、竈を有



第17図 住居跡110



第18図 住居跡110竈

する。確認面から床面までの深さは平均30cmであり、床面は中央部がやや低くなっているが、硬い面はみられなかった。壁は直立して立ち上がり、周溝が全周する。周溝の幅は約20cmで、深さは5cm程度である。床面には周溝の他に支柱穴が4本と出入口部に付随する柱穴が1本存在する。支柱穴は対角線上に並び、住居跡北東部の1本が直径25cmのほかは、直径50cm～60cmの大型のものである。深さは45cmから60cmを計る。なお、北西部の支柱穴の内部から遺物が出土しており、柱の抜き取りがなされた可能性が指摘できる。住居跡の南部の2本の支柱穴を結ぶ線上の中央に直径30cm、深さ約30cmの柱穴がみられる。竈は北壁の中央に壁から25cmほど突出して存在するが、大半が攪乱によって破壊され、袖の構築材の多くが流失している。遺物は北壁の竈を中心にしてみられ、北西にある支柱穴の中からは甕(4)の破片が出土し、北東部隅からはほぼ完形の小型の甕(1)が検出された。

土層断面は4層に区分できる。1.黒色土 粗いローム粒・焼土を含む。2.黒褐色土 黒色土とローム粒が混入し、小ロームブロックを含む。3.暗褐色土 黒色土に粗いローム粒が多量に混入する。4.褐色土 小ロームブロック・ローム粒を主体とする。

竈は3層に分層できる。1.黒褐色土 黒色土と山砂が混入する。2.黒褐色土 1の層の中に焼土とロームブロックを含む。3.黒褐色土 山砂・黒色土・ロームブロックを含む。

註 1.小林清隆・山口典子 「千葉市荒久遺跡の焼失住居の調査について」『研究連絡誌』第22号 (財)千葉県文化財センター 1988

2節 溝状遺構(第19図, 図版9)

本遺跡では性格不明な溝状遺構が8条検出された。これらの時期については、ほとんど遺物が出土せず不明と言わざるを得ないが、これらの溝はいくつかの住居跡を切っており、どれも住居跡の時期よりも下降すると考えられる。また、覆土が住居跡と明らかに異なっていること、溝跡の周辺より寛永通寶などの銭貨が出土していることを勘案するならば、これらの溝の時期は近世より以前に遡る可能性は極めて少ないと考えられる。

溝跡114

E 2 グリッドに所在する。北西から南西に直線的に伸び、上場幅130cm、下場幅50cm、深さ25

cm平均で、全長約26mである。土層は、1.黒灰色土 少量のローム粒を含む。2.黒色土 荒いローム粒を含む。3.暗褐色土 ロームと黒色土の混合に分類できる。

溝跡048(2)

調査区の北西端から南東に斜めに横切る溝であり、一部分、荒久遺跡(1)まで伸びる。D 2・E 2・E 3グリッドに所在する。ほぼ直線的であるが、この溝は最低3本の溝が重複しており、その中には底面が硬く締まっており、道路として用いられた可能性が考えられるものが存在する。溝跡048(2) 1は溝跡048(2) 3を切り、上場60cm、下場30cm、深さ20cmである。土層は1層のみである。1.黒色土 ローム粒を少量含む。本跡からはフイゴの羽口が検出されている。また、荒久遺跡(1)の溝跡048(1) 1からは少量の土師器片とともに寛永通宝、近世の播鉢破片等が検出されている。

溝跡048(2) 2は溝跡048(2) 3を切り、底面が硬く締まっており、道路の可能性も考えられる。ただし、轍の痕跡は認められなかった。上場は140cm、下場70cm、深さ50cm前後である。土層は8層に区分される。1.黒色土 ローム粒を少量含む。2.暗茶褐色土 ローム粒を多く含む。3.黒褐色土 ローム粒を含み、やや硬い。4.黒色土 ローム粒を少量含む、硬い。5.黒色土 ローム粒を含み、硬い。6.黒褐色土 ローム粒を含み、硬く締まりを有する。7.暗褐色土 荒いローム粒を含み、硬い。8.暗褐色土 ロームブロック(10mm)を含む。6～8層は土質そのものについては大きな変化はみられないが、断面は明確に層となってみられた。

溝跡048(2)3は上場が4m20cm、下場3m60cm、深さが40cm前後であり、大型の溝である。これも底面が硬く締まっており、道路である可能性高いが、轍の痕跡は検出できなかった。

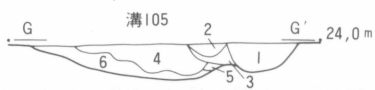
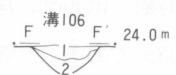
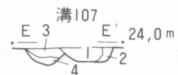
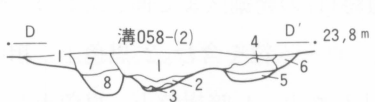
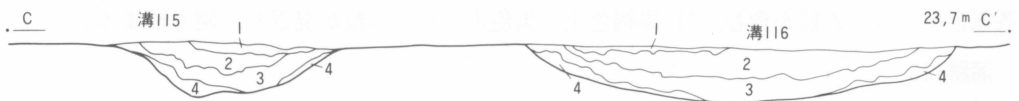
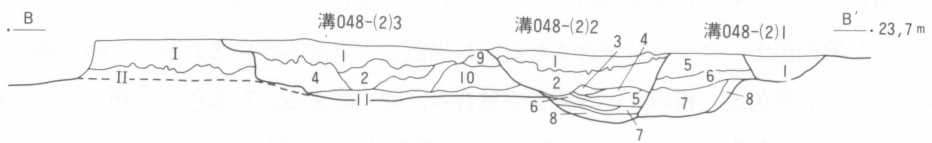
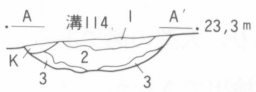
土層は11層に区分できる。1.黒灰褐色土 ローム粒が含まれる。2.黒褐色土 ローム粒が少量含まれる。3.黒褐色土 ローム粒が含まれる。4.黒色土 ロームが含まれる。5.暗茶褐色土 ローム粒を含む。6.黒色土 粗いローム粒を少量含む、硬く締まる。7.黒色土 粗いローム粒を含む。8.暗褐色土 黒色土とローム粒が混ざる。9.黒褐色土 少量のローム粒を含む。10.暗茶褐色土 ローム粒を含む。11.黒褐色土 黒色土とローム粒が混ざり、硬く締まる。

溝跡115

調査区のほぼ中央を斜めに走る。E 2・E 3グリッドにまたがって検出された。上場幅3m50cm、下場幅1m50cm、深さ40cm平均である。一部分が荒久遺跡(1)の発掘区まで伸びており、全長は約48mである。土層は4層に区分できる。1.黒灰褐色土 ローム粒を含む。2.黒色土 粗いローム粒を少量含む。3.黒褐色土 黒色土とローム粒が混入した土。4.暗褐色土 黒色土とローム粒が混入した土。

溝跡116

調査区のほぼ中央を溝跡115と並行して斜めに走る。この溝は攪乱や掘り込みが浅いために検出できなかった部分も存在するが北東は荒久遺跡(1)の発掘区内の溝058と合流し、南東は調査



第19図 溝配置状況および溝断面

区の南東隅まで伸び、さらに調査区外まで広がる長い溝である。溝内にはところどころに柱穴様掘り方が並んで検出された。それらの径は80cmで、深さは15cm平均であり、柵列の掘り方である可能性が高い。溝の上幅は1m60cm、下場70cm、深さ40cm内外であり、全長は120mを計る。形態は浅い皿状を呈する。土層は4層に分類できる。1.黒色土 少量のローム粒を含む。2.黒褐色土 黒色土に粗いローム粒を含む。3.黒色土 細かな黒色土を主体とする。4.黒褐色土 黒色土とローム粒の混合。

溝跡058-(2)

調査区南西のD 3グリッドに所在し、北東方向に走り、北側は荒久遺跡(1)の溝058と接合し、南側は溝107に切られる。住居跡104の北東隅を切る。上場は80cm～2m20cm、下場40cm～1m50cm程度で、深さは約30cmであり、断面形態は浅い皿状の部分やW字状を呈するところも存在する。全長40m。土層は9層に区分できる。1.黒褐色土 暗褐色土を含み、ローム粒を含む。2.黒褐色土 ローム粒を多量に含む。3.黄褐色土 ローム土を主体とする。4.黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土を少量含む。5.黒褐色土 ローム土を多量に含む。6.暗褐色土 ローム土を含む。7.黄褐色土 ローム粒(大粒)を含む。8.暗褐色土 ローム土・ロームブロックを含む。

溝跡107

調査区の南西、E 3グリッドに所在し、調査区の南壁から北に弓状に伸び、溝058(2)を切り、溝106を切る。上幅40cm、下幅30cm、深さ15cm程度の浅い溝であり、土層は2層に分類される。1.暗褐色土 ロームブロック・焼土を含む。2.黒褐色土 粗いローム粒を少量含む。3と4は溝058(2)の土で、2層に分類でき、058(2)の1層と8層に対応する。溝の上層から馬の歯が出土(図版7)している。

溝跡106

調査区の南西、D 3・E 3グリッドに所在し、調査区の南壁から北西に直線的に伸び、住居跡104の南側を切り、溝107と溝105に切られ、荒久遺跡(1)の溝046と溝028を切る。上場は30cm～50cmで、下場10cm～20cm、深さ25cm程度であり、細い溝である。全長は68mである。土層は2層に分類され、1.黒色土 ロームの細粒を少量含む。2.黒褐色土 粗いローム粒を含む。

溝跡105

調査区の南西、D 3グリッドとE 3グリッドの中間に所在する。調査区の南壁から北に伸び、住居跡104の中央部を切り、溝106と溝046-(2)を切る。上場は60cm～2m、下場35cm～90cm、深さは30cm前後である。土層は6層に分類できる。1.黒褐色土 ローム粒・焼土の細かい粒を含む。2.暗褐色土 粗いローム粒を多く含む。3.褐色土 ローム粒が3に対し黒色土が2程度混入する。4.黒褐色土 ローム粒をやや多く含む。5.暗褐色土 ローム粒(3mm)と焼土の細粒を含む。6.暗褐色土 ローム粒を含む。

3章 遺物

1節 先土器時代

概要 調査の結果確認された先土器時代遺物集中箇所は2地点あった。1箇所は中央博物館調査区に接する西側の部分で、これは中央博物館分報告書で第5ブロックとしたIX層中部の集中箇所のすぐ南側の地点に相当する。IX層中からの検出であった。両者間には2種の共通する母岩があり、同一ユニットと扱えられる可能性もある。もう1箇所は、調査区東端の北側斜面部にかかる地点で、ハードローム層の上部から検出されている。本ブロックは遺物量こそ少なかったが、この層準としては初の局部磨製石斧破片が含まれており、この種の石器の変遷のヒアタスを埋める貴重な資料となった。本報告書では、これを第1ブロックとし、IX層のものを第2ブロックとした(第20図)。

土層に関しては、隣接する荒久遺跡(1)と全く同様の堆積状況が確認されている。第2黒色帯に関しては、下総台地西縁部では通常4枚に細分をされているが、荒久遺跡においては、3層に区分した。すなわち、最下部の最も黒味の強い層(IXc層)、その上部のやや色調の明るい層(IXa層)、VI層と漸移的な最も明色のVII層とした。明褐色スコリア質ロームであるIXb層は確認できなかった。

第1ブロック

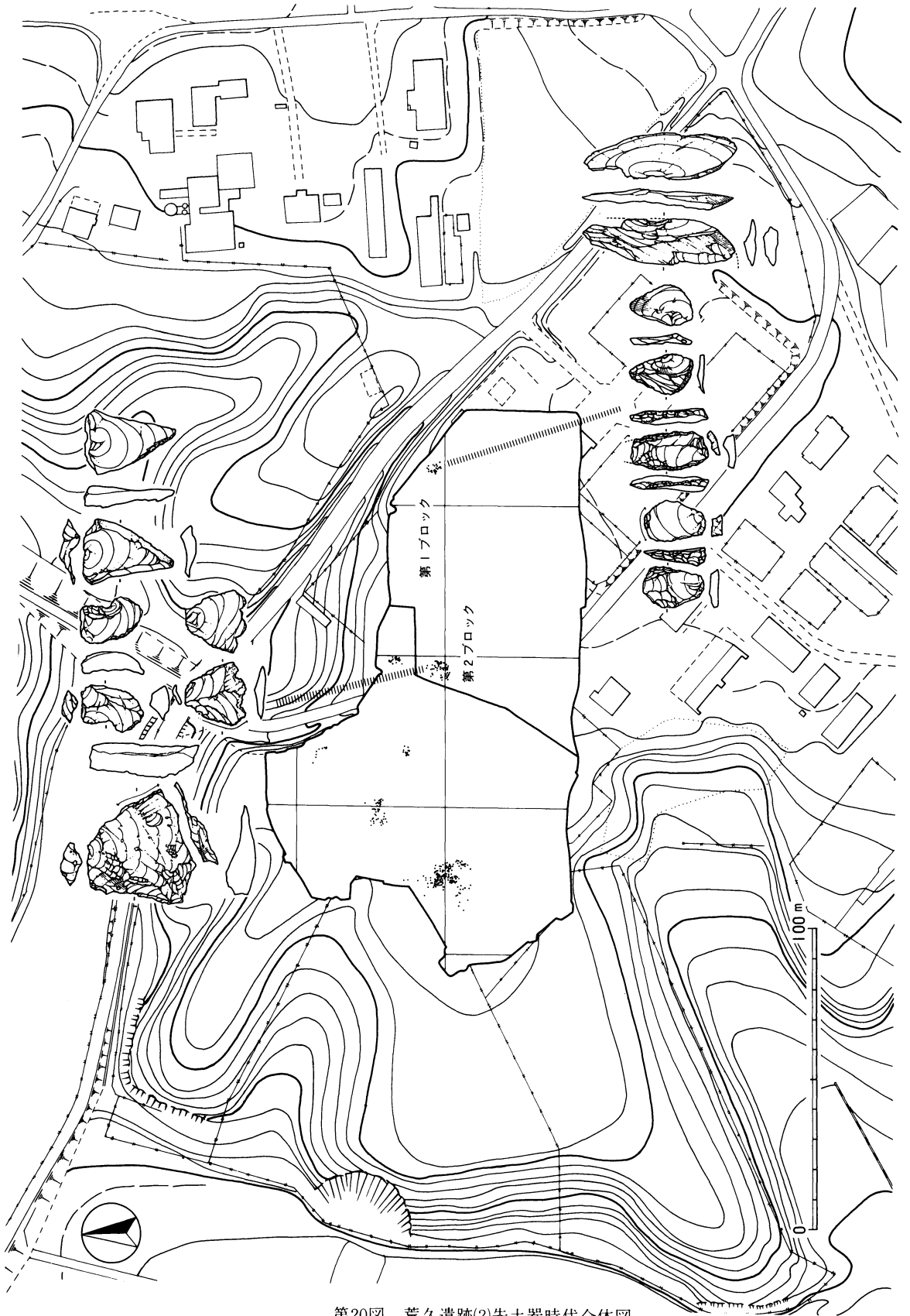
a.分布状況 F2-92グリッドのほぼ中央、長軸4.7m、短軸3.5mぐらいの略円形の範囲に石器が分布していた。この範囲の東北部に多くの資料を検出したが、全体の密度はそれほど高くない。垂直分布は、第21図の投影から判断されるように、ハードローム層上部に集中している。このハードローム層を0.2mぐらい掘り下げるとVI層になるので、産出層準としてはIV層からV層に到るいずれかの面が想定されるが、詳細は不明である。

b.出土遺物 総数25点の遺物があり、ナイフ形石器2点、端削器1点、局部磨製石斧1点、剥片10点、削片9点、石核2点という構成となっている。石材としては、珪質頁岩、黒曜石、粘板岩の3種あり、特に珪質頁岩のものが多く(第22・23図)。以下、図に従って観察したい。

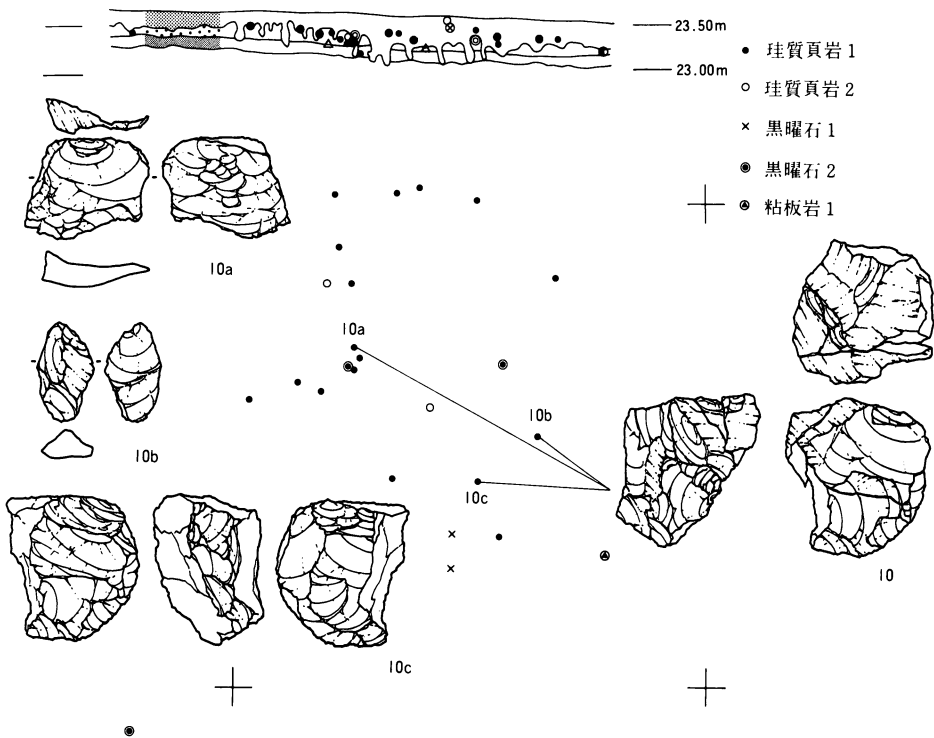
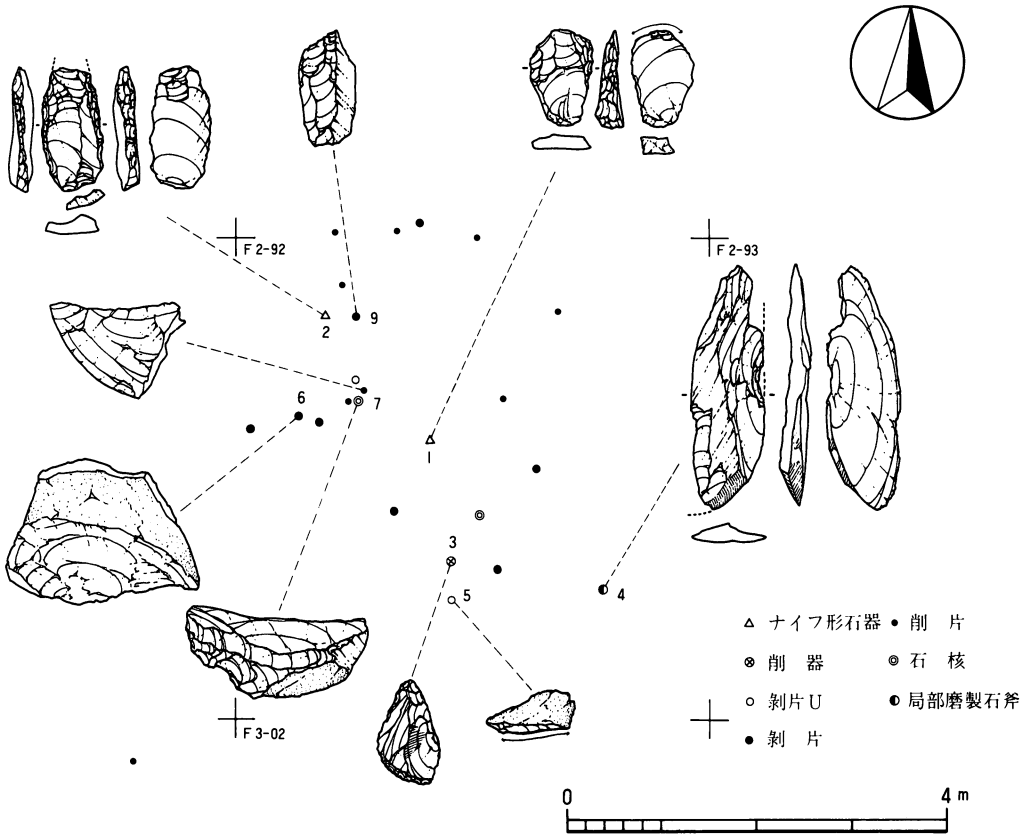
1は珪質頁岩製のナイフ形石器である。基部に打面を残した貝殻状剥片の1側縁に細部加工がある。刃部は扇形で鋭い刃角を保つ。

2も基部に打面を残すが、石刃状の縦長剥片素材のものである。先端部が折れてしまって全体の形状は不明となっている。両側縁に細部加工があり、ふつうのナイフ形石器のように未加工の刃部を残していない。あるいは、側削器であるかもしれない。凝灰質の縞入りの珪質頁岩製である。

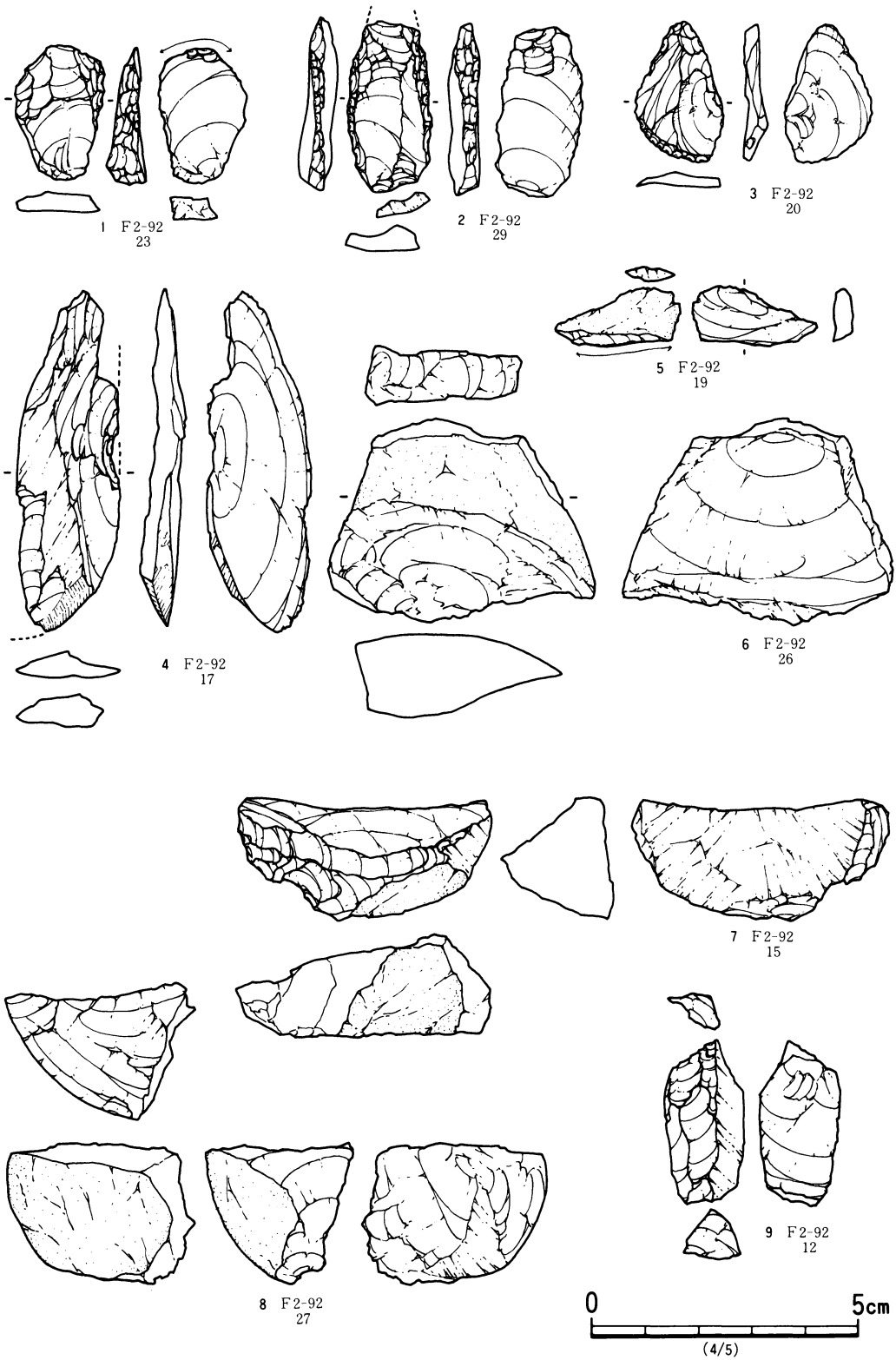
3は端削器とした。黒曜石の貝殻状剥片の側縁に細部加工を施し、緩い弧状の刃部を作出している。扁平薄手のもので刃角は48°前後である。灰褐色鈍色の斑紋入りの黒曜石製。



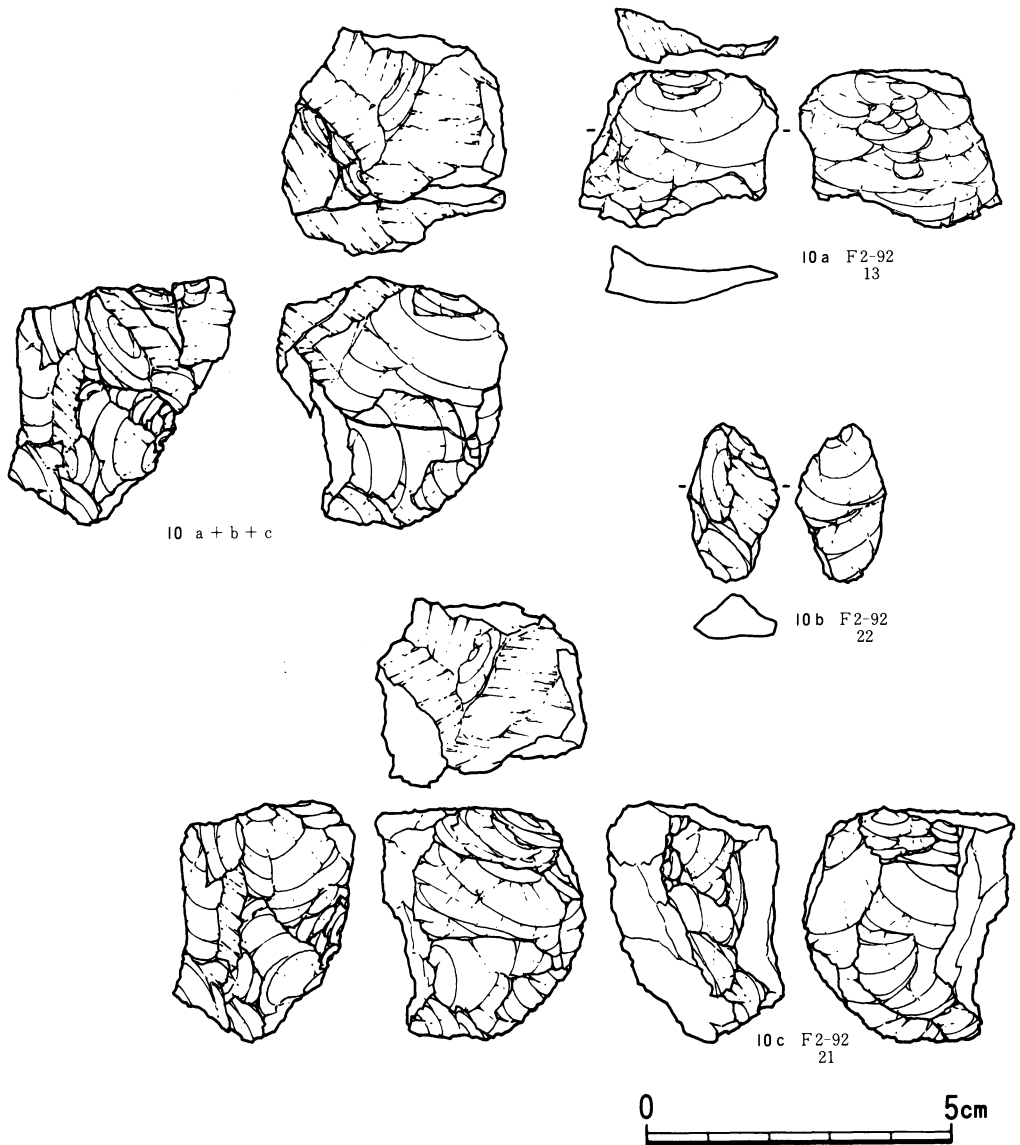
第20図 荒久遺跡(2)先土器時代全体図



第21図 第1ブロックの器種別(上)・母岩別(下)分布状況



第22図 第1ブロック石器実測図(1)



第23図 第1ブロック石器実測図(2) (4/5)

4は破片化しているが、明らかに局部磨製石斧と見られる。暗灰色の粘板岩製で、側縁部の加撃によって剝落して破片化している。刃部は両面から入念に研磨され、一端に僅かに蛤刃状の刃縁が遺存している。研磨部には細条線が密に認められ、研磨方向を少しずつ変えながら刃部を研ぎ出す過程が窺われる。

6～10に珪質頁岩の同一個体に属する剝片と石核をまとめた。6は礫面付きの大型剝片、8も同種のもの、9は厚味のある小型の例である。7は剝片素材の石核としたが、原礫分割面を打面として小型の貝殻状剝片を生産するものであろう。10は石核と剝片・削片の接合例で、打面転位による横長剝片の生産が企図されている。

c.小結 小規模なブロックであったが、一応、ナイフ形石器、削器、石斧など諸種の石器類

がそろい、珪質頁岩の一種が消費されている。局部磨製石斧はブロックの縁辺にあるが、確実にハードローム層上部から出土している。本地域においては、今まで、ATより上部のローム層中から局部磨製石斧の検出された事例はないので、本例がこの層準における初出ということになる。

第1表 第1ブロック石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	F2-82-11	削片	10.0×12.5×3.3	0.39									珪質頁岩 1
2	12	削片	14.2×7.6×4.0	0.28									〃
3	13	剥片	12.5×10.1×4.1	0.69		1(0)	8.0×3.8	124°	II	F	-	-	〃
4	14	削片	17.5×17.0×6.0	1.47									〃
5	F2-92-11	削片	8.7×6.3×1.7	0.09									〃
6	12	剥片	28.3×17.6×10.0	4.64	9	1(0)	11.8×8.5	104°	II	-	-	H	〃
7	13	剥片	26.0×31.4×8.3	7.28	10a	1(0)	26.0×7.0	110°	II+IV	F	-	-	〃
8	14	削片	8.2×14.3×6.0	0.53									黒曜石 2
9	15	石核	22.2×47.8×28.1	17.24	7								珪質頁岩 1
10	16	削片	5.0×8.2×3.5	0.08									黒曜石 2
11	17	石斧	64.3×21.2×5.0	6.43	4								粘板岩 1
12	18	剥片	17.3×10.3×3.0	0.44		p	-	-	II	-	-	H	珪質頁岩 1
13	19	剥片	11.7×22.4×4.7	0.81	5	1(0)	9.3×3.0	93.5°	IV	F	+	-	黒曜石 1
14	20	端削器	26.0×16.5×4.3	1.23	3	2(0)	-	108.5°	II	F	-	-	〃
15	21	石核	38.1×36.7×28.0	41.02	10c								珪質頁岩 1
16	22	削片	16.0×14.9×7.3	2.36	10b	p	-	-	II+不明	F	-	-	〃
17	23	ナイフ	26.3×17.1×5.6	2.61	1	1(0)	-	88.5°	II+III	F	+	-	珪質頁岩 2
18	24	剥片	20.0×13.3×4.7	1.16		-	-	-	不明	-	-	破片	珪質頁岩 1
19	25	剥片	30.7×24.8×10.9	6.69		1(0)	20.9×9.0	105°	II+IV	H	-	-	〃
20	26	剥片	38.7×50.2×26.6	29.12	6	1(1)	28.0×11.2	93°	III	H	-	-	〃
21	27	剥片	25.6×36.3×24.7	20.29	8	1(0)	32.9×22.0	77°	III	F	-	-	〃
22	28	削片	9.0×8.8×2.7	0.12									〃
23	29	ナイフ	32.6×15.3×5.8	3.52	2	C	9.1×4.0	107.5°	II+III	-	-	-	珪質頁岩 2
24	30	削片	3.6×6.7×3.3	0.01									珪質頁岩 1
25	F3-01-11	削片	8.7×4.3×1.4	0.01									黒曜石 2

(注) 石器属性表の見方

1. 打面 打面を構成する剥離面数を示す。括弧内はその内ネガティブバルブのあるものの数である。pは点状打面を、1は線状打面である。またCは自然面である。
2. 背面構成 Iは原礫面に大きく被覆されるもの。IIは腹面の剥離方向と一致する剥離面。IIIは腹面と逆位の剥離面。IVは腹面に直行もしくは斜交する方向から加撃された剥離面とする。○を付したものは礫面付の剥離面である。また、剥離方向の識別の困難な節理面はFとする。背面が横方向の剥離面から構成される場合は、以上の記号を組み合わせる。
3. 末端 剥片末端の形状は3種に分類する。FはFeather end, HはHinge fracture,あるいはStep fracture, OはOutrepasséあるいは石核底面を切るもの。
4. 折面 折損した剥片の遺存部を表記。Hは頭部, Mは中間部, Bは尾部。Rは背面に対して右側, Lは左側となる。

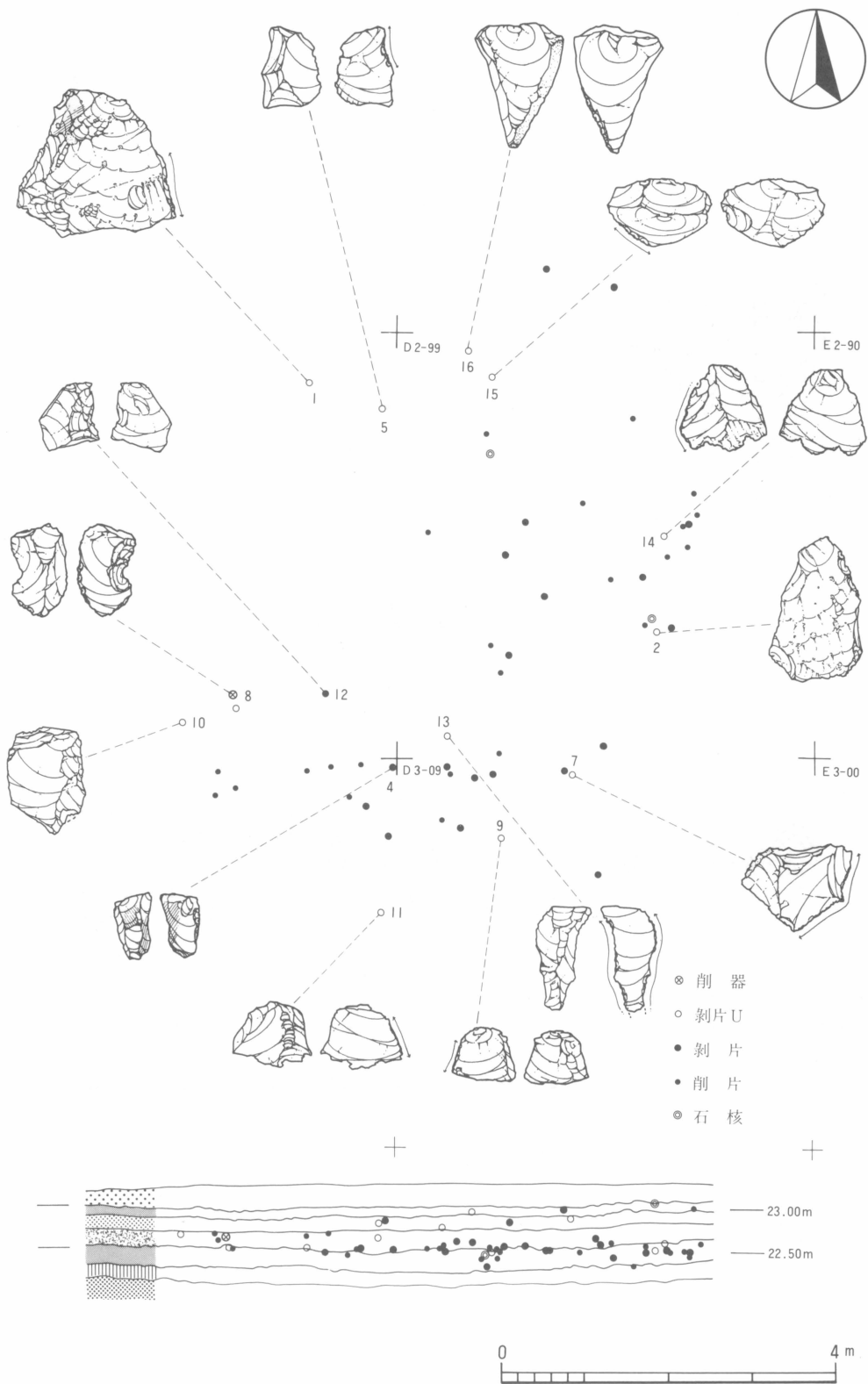
第2ブロック

a. **分布状況** D2-99グリッドを中心に隣接3区に亘る7.6m×5.2mの分布域が形成されている。この範囲内では、その南縁部と西縁部に遺物の集中する傾向が認められる。垂直分布の状況は、VI層から出土し始め、IX層の下部に到る約0.8mのレベル差があるが、投影図から判断されるようにIXc層上面に貼り付くように検出されたものが多く、ほぼこの層準を産出層準と認定した。これは、本ブロックと同一母岩をもつ、荒久遺跡(1)第5ブロックの産出層準と矛盾しない(第24・25図)。

b. **出土遺物** 剥片21点、使用痕ある剥片13点、削片22点、削器1点、石核2点、計59点の遺物が出土した。剥片主体のブロックであるが、14もの母岩によって構成されており、集中的に消費された母岩は存在しない。なお、荒久遺跡(1)第5ブロックにおける黒曜石1が本ブロックの黒曜石4と、黒曜石2が黒曜石2とそれぞれ同一の母岩である。また、本ブロックの黒曜石2としたものは、荒久遺跡(1)第3ブロックの黒曜石2と酷似しており、これも共通母岩である蓋然性が高い。

第26図～第27図に代表的な石器を掲げた。1～4は黒曜石製の剥片で、比較的大型のものが選択的に搬入されている。2と3は大型剥片の断片で、背面あるいは腹面中央部を加撃し不定な断片に分割する手法がとられている。バイポーラー・テクニクの応用と見られる。4～16は不定形剥片であり、使用痕の顕著なものや、8のように凹削器と見られるものがある。15では、腹面・背面にポジティブバルブが残されており、第28図の接合例のような方法によって剝離されたものと考えられる。17は接合資料で、厚手の剥片を分断して小型の石核を生じている例である。本資料は黒曜石2と分類したもので、良質な石材であることが、このような剥片の使い方を結果させた要因であると推測したい。

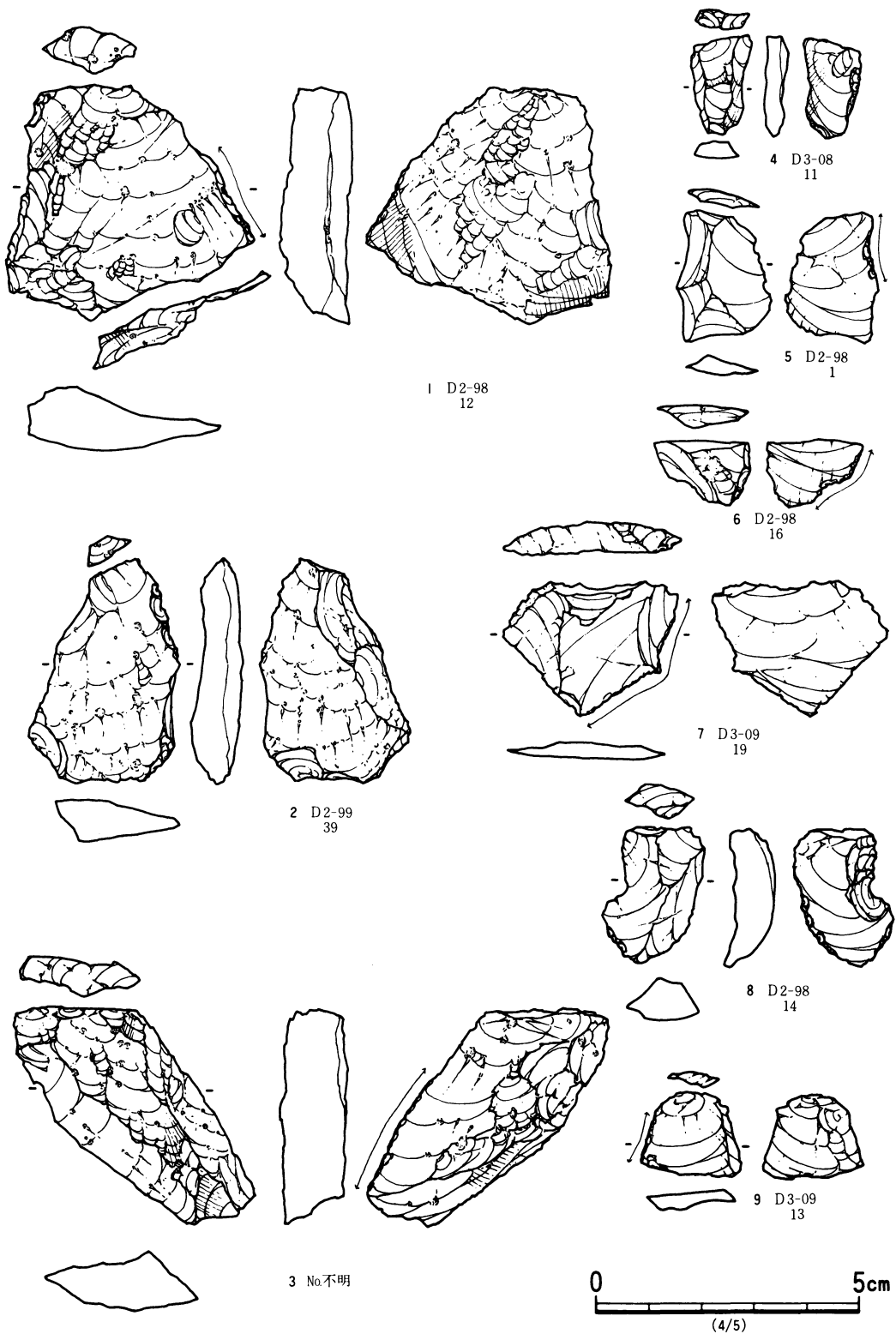
c. **小結** 剥片主体の構成をとるブロックであるが、34点ある剥片のうち38%に使用痕が確認された。剥片はいずれも小型不定形なもので、かつ構成石材も変化に富み、限定的な石材資源の分布に規定されたあり方を示している。このことは、比較的大き目の黒曜石が分断されていることや、良好な黒曜石からは石核が碎片化するまで剥片を生産している状況からも窺うことができる。同一台地上には、本ブロックと関連しそうなブロックがいくつかあるが、それらの相互関係は把握できなかった。



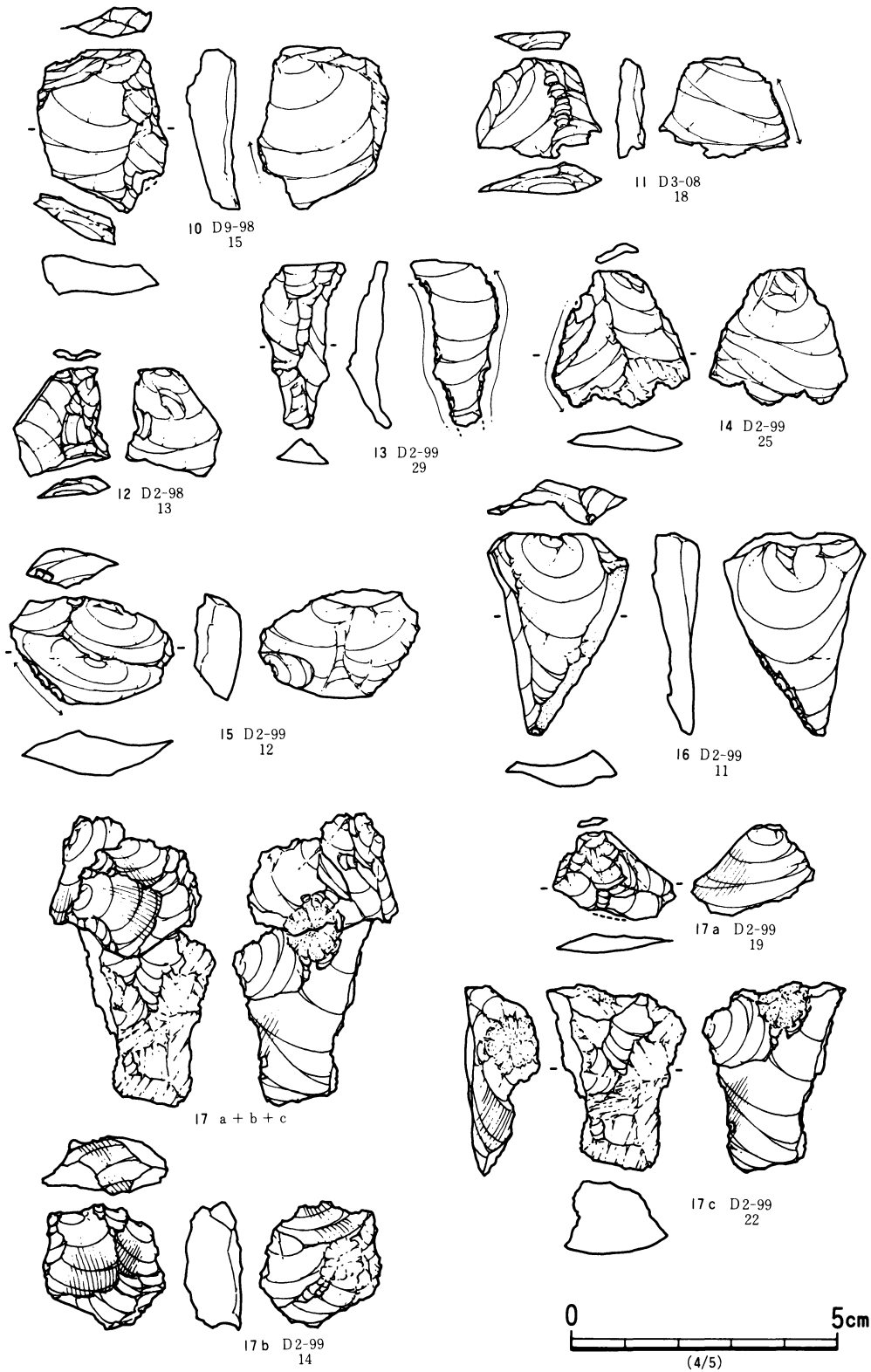
第24図 第2ブロック器種別分布状況



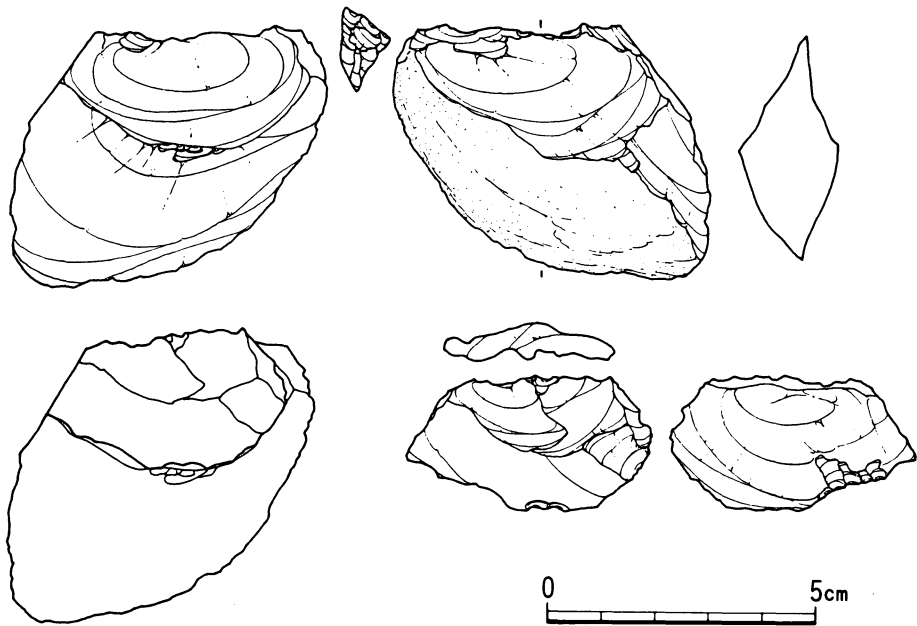
第25図 第2ブロック母岩別分布状況



第26図 第2ブロック石器実測図(1)



第27図 第2ブロック石器実測図(2)



第28図 背・腹両面にポジ面を残す剥片と石核との接合例
(市原市草刈六之台遺跡X層)

第2表 第2ブロック石器属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	D2-89-12	剥片	11.8×7.2×4.1	0.30		P	-	-	II	-	-	H	珩質頁岩 1
2	13	剥片	16.2×13.8×4.1	1.21		-	-	-	II	F	-	B	黒曜石 1
3	D2-98-11	剥片	23.3×18.1×4.0	1.38	5	-	-	-	II+III+IV	H	+	B	チャート 1
4	12	剥片	44.0×47.6×11.2	19.11	1	1(0)	17.9×9.6	94°	II	F	+	-	黒曜石 2
5	13	剥片	19.7×17.6×5.1	1.72	12	2(0)	9.4×2.2	107.5°	III+IV	-	-	H	珩質頁岩 2
6	14	削器	26.7×19.8×8.0	3.24	8	2(1)	12.1×5.7	110°	II	F	+	-	チャート 1
7	15	剥片	30.8×15.7×7.2	6.58	10	2(0)	16.0×6.4	103°	II	O	+	-	珩質頁岩 2
8	16	剥片	12.4×18.1×4.2	0.64	6	-	-	-	II+III	F	+	B	チャート 2
9	D2-99-11	剥片	37.8×26.3×5.5	4.63	16	2(0)	24.3×7.0	100°	II	F	+	-	珩質頁岩 3
10	12	剥片	20.0×30.7×8.9	4.24	15	1(0)	15.9×7.0	110.5°	II	H	+	-	珩質頁岩 1
11	13	削片	4.6×8.2×2.1	0.06									黒曜石 3
12	14	石核	20.3×25.1×10.0	4.43	17b								〃
13	15	削片	7.6×3.7×3.1	0.01									石英 1
14	16	削片	7.3×7.4×2.3	0.11									黒曜石 2
15	17	剥片	18.8×12.2×3.2	0.60		1(0)	5.2×3.1	112°	II	F	-	-	黒曜石 1
16	18	削片	5.3×10.4×3.1	0.13									黒曜石 4
17	19	剥片	14.8×22.6×4.1	1.03	17a	1(0)	5.3×2.0	111.5°	II	F	-	-	黒曜石 3
18	20	剥片	13.2×13.5×2.4	0.44		1(0)	7.9×2.0	91.5°	II+IV	H	-	-	〃
19	21	削片	11.5×10.0×3.9	0.27									黒曜石 4
20	22	石核	33.9×26.3×13.7	8.41									黒曜石 3

No	遺物No	分類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
21	23	剝片	10.0×18.1×4.0	0.51		-	-	-	II	F	-	B	黒曜石 2
22	24	削片	4.4×11.0×4.7	0.15									黒曜石 4
23	25	剝片	25.0×25.8×5.0	2.77	14	1(0)	7.7×2.8	106°	II	F	+	-	珩質頁岩 4
24	26	削片	9.8×13.7×4.2	0.44									黒曜石 2
25	27	削片	17.2×10.4×5.9	0.68									黒曜石 4
26	28	剝片	28.9×18.0×3.3	2.02		-	-	-	I	H	-	B	安山岩 1
27	29	剝片	30.4×17.6×6.3	1.83	13	-	-	-	II	F	+	B	珩質頁岩 2
28	30	削片	7.8×5.6×3.7	0.13									黒曜石 3
29	31	剝片	21.5×25.7×6.7	2.60		1(0)	14.3×7.2	107.5°	II	F	-	-	黒曜石 1
30	32	削片	5.0×5.8×1.8	0.04									安山岩 2
31	33	削片	8.0×5.0×4.6	0.18									黒曜石 3
32	34	削片	10.6×6.1×2.7	0.21									黒曜石 4
33	35	剝片	11.2×10.3×3.2	0.19		-	-	-	II	F	-	B	黒曜石 3
34	36	削片	13.4×8.1×4.0	0.36									黒曜石 4
35	37	剝片	16.1×8.8×2.3	0.33		1	-	-	II	-	-	H	黒曜石 4
36	38	削片	8.0×4.2×2.1	0.04									〃
37	39	剝片	39.7×32.3×8.7	8.74	2	-	-	-	II	-	+	破片	〃
38	D3-08-11	剝片	18.8×12.9×4.1	0.83	4	3(2)	9.8×4.2	101°	II	F	-	-	〃
39	12	削片	11.8×8.3×1.7	0.12									黒曜石 4
40	13	削片	4.2×9.1×2.1	0.03									〃
41	14	削片	13.1×18.4×2.3	0.40									〃
42	15	削片	7.8×6.8×2.7	0.09									〃
43	16	剝片	20.1×21.2×5.2	1.13		1(0)	8.0×5.3		II	F	-	-	珩質頁岩 1
44	17	剝片	15.1×10.0×6.1	0.83		-	-	-	II+IV	F	-	B	黒曜石 4
45	18	剝片	19.8×24.5×5.0	2.21	11	-	-	-	II+III	-	+	M	珩質頁岩 2
46	19	削片	12.5×13.7×3.6	0.34									黒曜石 4
47	20	削片	7.0×7.3×2.1	0.06									〃
48	21	削片	3.3×6.3×1.0	0.01									〃
49	D3-09-11	剝片	17.3×20.0×5.2	1.35		1(0)	19.2×7.6	113.5°	II	F	-	-	黒曜石 3
50	12	剝片	21.2×18.3×3.6	1.19		1(0)	13.7×4.8	118°	II	F	-	-	珩質頁岩 1
51	13	剝片	15.4×19.3×4.8	0.94	9	1(0)	8.5×3.0	103°	II	H	+	-	チャート 1
52	14	剝片	15.2×16.1×4.0	1.26		-	-	-	II	-	-	破片	珩質頁岩 1
53	15	削片	10.8×10.9×3.0	0.23									〃
54	16	剝片	12.0×14.6×4.3	0.53		-	-	-	II+IV	-	-	破片	黒曜石 3
55	17	剝片	15.5×22.8×4.3	1.10		1(0)	3.1×1.8	118.5°	III+IV	F	-	-	珩質頁岩 1
56	18	剝片	13.1×10.2×2.0	0.25		1(0)	7.3×2.6	123°	II	F	-	-	チャート 3
57	19	剝片	25.6×33.0×5.2	3.41	7	-	-	-	III+IV	F	+	B	チャート 1
58	20	削片	13.0×6.2×3.2	0.20									〃
59	No 不明	剝片	40.7×45.1×11.0	13.87	3	-	-	-	II	-	+	破片	黒曜石 3

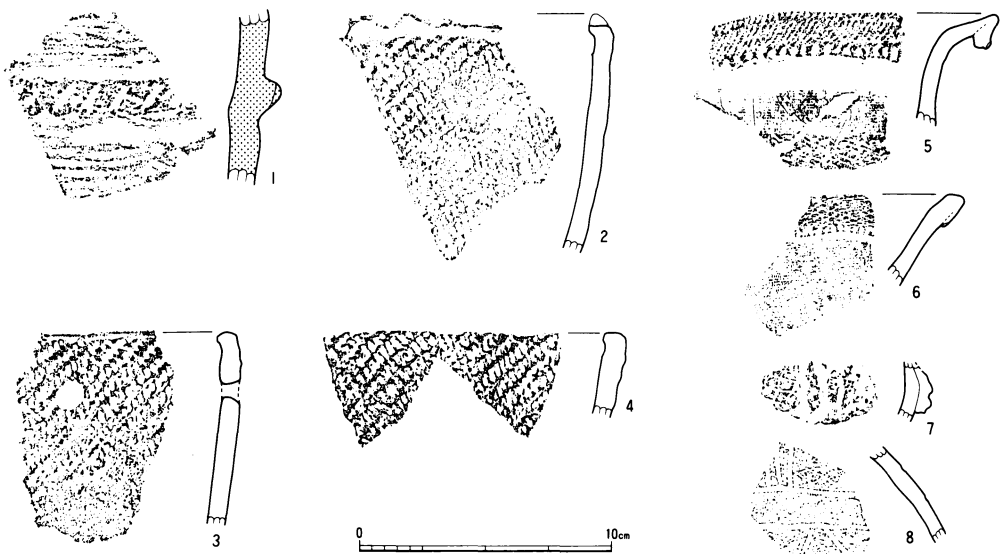
2節 縄文・弥生時代 (第29図, 図版18)

本遺跡からは僅かではあるものの、縄文・弥生時代の土器が出土している。

1～4は縄文土器である。1は繊維を含む条痕文土器で、隆帯の貼り付け後に条痕を施す。隆帯上の刻みは扁平で先端の鋭利な板状工具によるものであろう。色調は内外面とも淡黄褐色、器肉は黒灰色で石英を含む。茅山上層式土器であり、本遺跡出土の該期の土器はこの1片のみである。2は縄文のみの土器である。口縁内面の沈線→縄文LR→口唇部の調整→粘土紐による突起の貼り付け、という施文工程をとる。色調は燈褐色で焼成はやや堅緻である。加曽利B1式期の所産であり、同一個体と思われるもの計10片のうち図示可能な1片のみとりあげた。3・4は縄文のみの土器である。口縁内面の沈線→口唇部の調整→縄文LR, という施文工程をとり色調は外面が黒褐色、内面・器肉は燈褐色、白色砂粒を多く含み、穿孔を有する。焼成は堅緻である。加曽利B1式期の所産であり、同一個体と思われるもの計5片のうち図示可能な2片をとりあげた。

5～8はすべて弥生時代後期の所産である。5は複合口縁を有し、縄文LRは口唇部までおよぶ。口縁部下端に先丸棒状工具による刺突文を有し、頸部には赤色塗彩が認められ、下半には波状文が施される。6は複合口縁を有し、網目状撚糸文と刺突文が施される。7は複合口縁の破片で、網目状撚糸文が施される。2個1対と思われる棒状浮文の断面は逆U字状を呈し頂部には竹管状工具による刺突文が3乃至4個施される。以上5～7はいずれも壺形土器の口縁部である。8は壺形土器の肩部(胴上半部)の破片で、網目状撚糸文を地文とした帯状の区画文内に直線や「ハ」字状のモチーフが描かれる。

以上が本遺跡から出土した縄文・弥生時代の土器であるが、いずれも遺構に伴うものではなく且つ小量であることから、該期における本遺跡の性格等について言及することはできない。



第29図 縄文・弥生土器拓影図

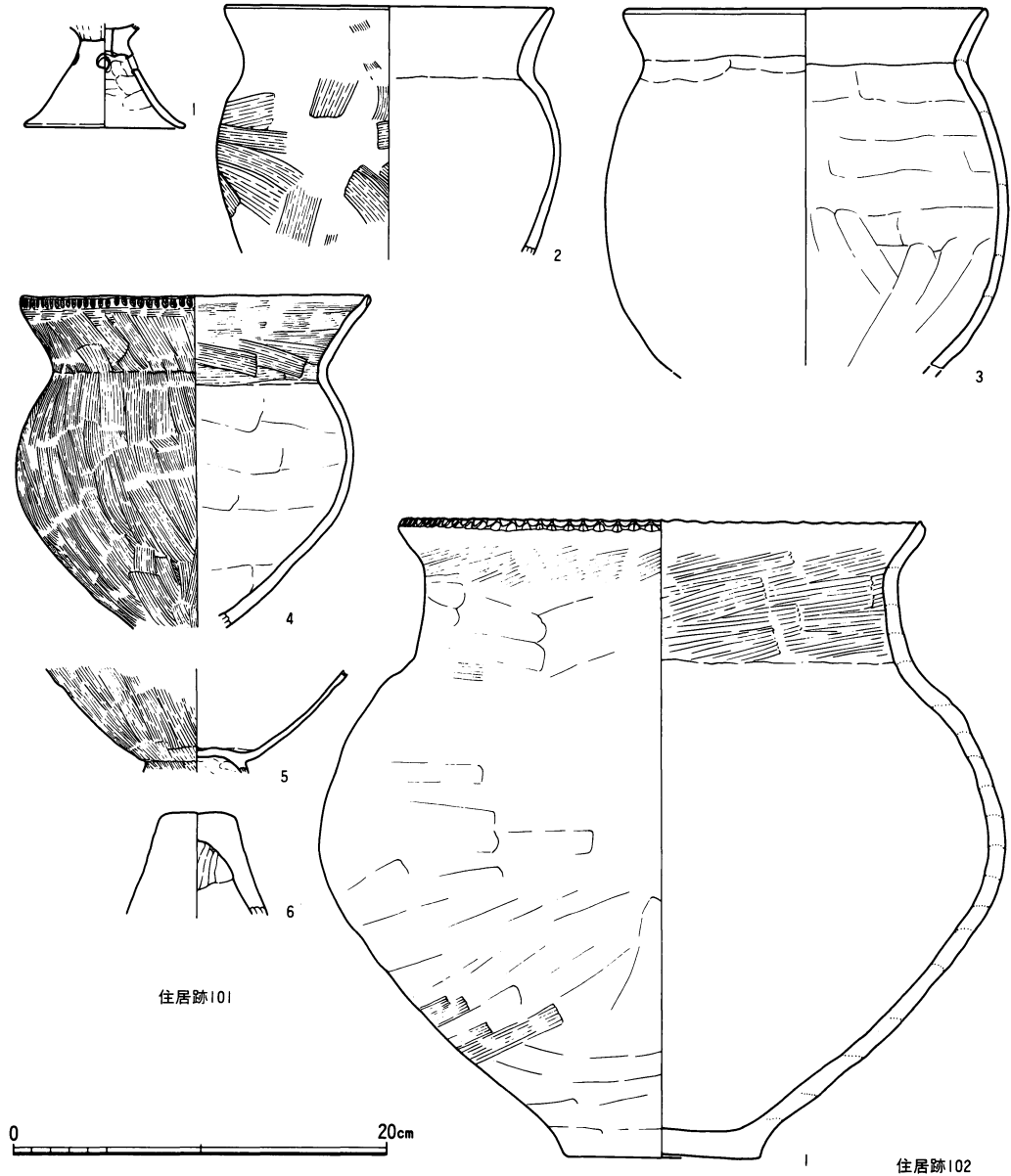
3節 古墳時代

本遺跡からは弥生時代末から古墳時代の所産と考えられる住居跡が10軒検出されている。それらは大きく3期に時期区分することが可能である。以下、時期別に住居跡ごとにそれらの遺物を概略する。

弥生時代末から古墳時代初頭の遺物

住居跡101(第30図上段1～6, 図版13)

1は小型の器台であり、底部は穿孔され、上部には4単位の円形の穿孔がなされる。器部と



第30図 住居跡101・102出土遺物

台部の境は外面にヘラナデ後にミガキが施され、内面には指ナデがなされる。台部外面はハケナデ後ミガキ、内面は指ナデ後ミガキが施される。2は丸胴の甕であり外面にハケがみられる。内面にはナデがなされる。内外面ともに器面が荒れている。3は丸胴の甕であり、胴部外面は横方向のヘラケズリ後にナデがなされる。4は台付甕であり、口縁部外面にハケによる刺突がなされ、外面および口縁部内面にハケナデがなされ、胴部内面にはナデが施される。5は台付甕の底部および台部の一部であり、おそらくはいわゆるS字状口縁の台付甕になるものと思われる。外面に被熱痕がみられる。器肉は非常に薄く、色調は暗灰褐色を呈し、在地の土器群とは胎土・焼成が異なる。他地域からの搬入品の可能性が高い。6は台付甕の脚部であり、内面にナデがみられる。

住居跡102(第30図下段1, 図版13)

本住居跡からは1個体のみ出土である。1は大型で丸胴を呈する甕であり、外面口縁端部には刺突圧痕がみられ、胴部外面は横方向のハケが施された後にナデがなされる。口縁部内面にもハケが施される。底部および胴部内面にはナデがみられる。

住居跡103(第31図上段1～11, 図版13)

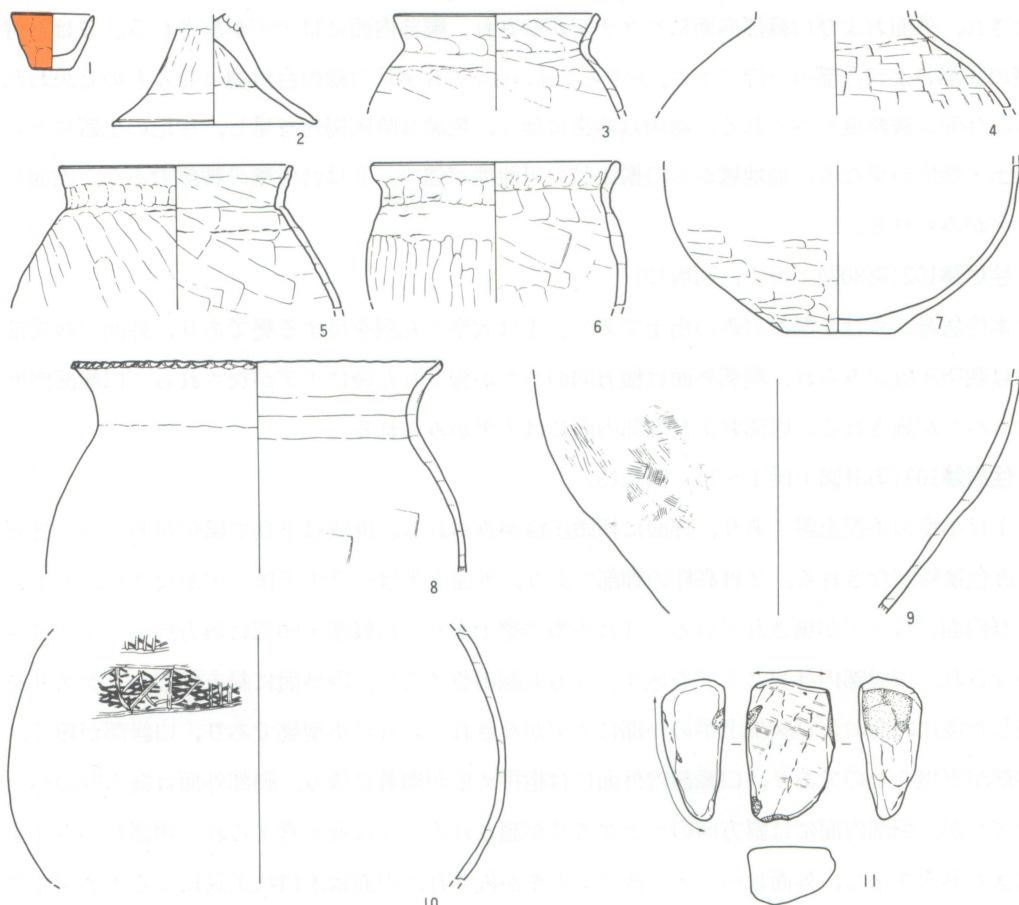
1は小型の手捏土器であり、外面に指頭圧痕がみられる。焼成は不良で風化が著しい。外面に赤色塗彩がなされる。2は高杯の脚部であり、外面上半はヘラナデ後ナデがなされ、下半および内面にはナデが施されている。3は小型の甕であり、口縁部・頸部に斜方向のヘラケズリがなされ、口縁部内外面にナデを施す。5も丸胴の甕であり、内外面に斜方向のヘラケズリを施した後に内面および胴部上半の一部にナデがなされる。6は小型甕であり、口縁部が短く、端部が平坦なものであり、口縁部内外面には指押え痕が顕著に残る。胴部外面は縦方向のヘラケズリが、胴部内面には斜方向のヘラケズリが施される。4は壺と考えられ、頸部が小さくすぼまる形態を示し、外面はヘラナデ後にミガキが施され、内面は木口状工具によるナデがなされる。10も壺と考えられ、胴部外面上半には斜格子目状に縄文が施された後にヘラで区画がなされる。下半部は横方向のミガキが密に入る。内面にはナデがみられる。色調は外面が橙褐色で、内面が淡黄褐色を呈する。

7～9は大型の甕である。7は内彎気味に立ち上がり、胴部外面は横方向のヘラケズリ後ナデ、のちに粗いミガキが施され、内面はナデ後に粗いミガキがなされる。底部外面はヘラケズリがみられる。8は口縁端部に刺突圧痕がみられ、内外面にナデがみられる。色調は黄褐色および淡黄灰褐色である。9は胴部下半のみの遺存である。底部が小さくすぼまり、外面にはハケ後、部分的にナデ消しを行い、さらにその後斜および横方向のミガキがなされる。内面はナデの後に横・斜方向のミガキが施される。

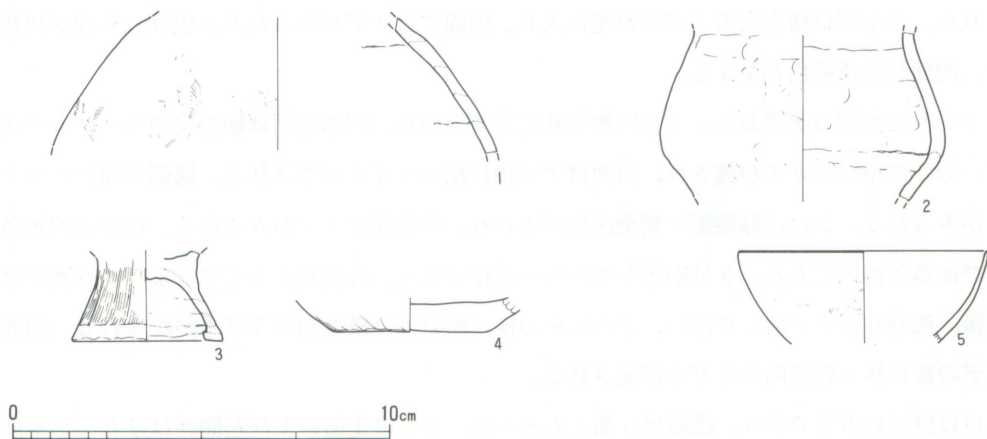
11は砂岩の砥石であり、砥面は5面ともみられ、とくに正面および左側面はほとんど全面に砥面が明瞭にみられる。

住居跡112(第31図下段1～5)

1は胴部上半のみの残存で器種の判別が難しいが大型の壺になるものと考えられる。外面は斜方向のハケが施された後に縦方向のミガキがなされる。2は小型の甕であり、胴がやや下膨れになる形態を示す。外面は木口状工具によるナデがなされ、内面は下部に縦方向のヘラケズ



住居跡103



第31図 住居跡103・112出土遺物

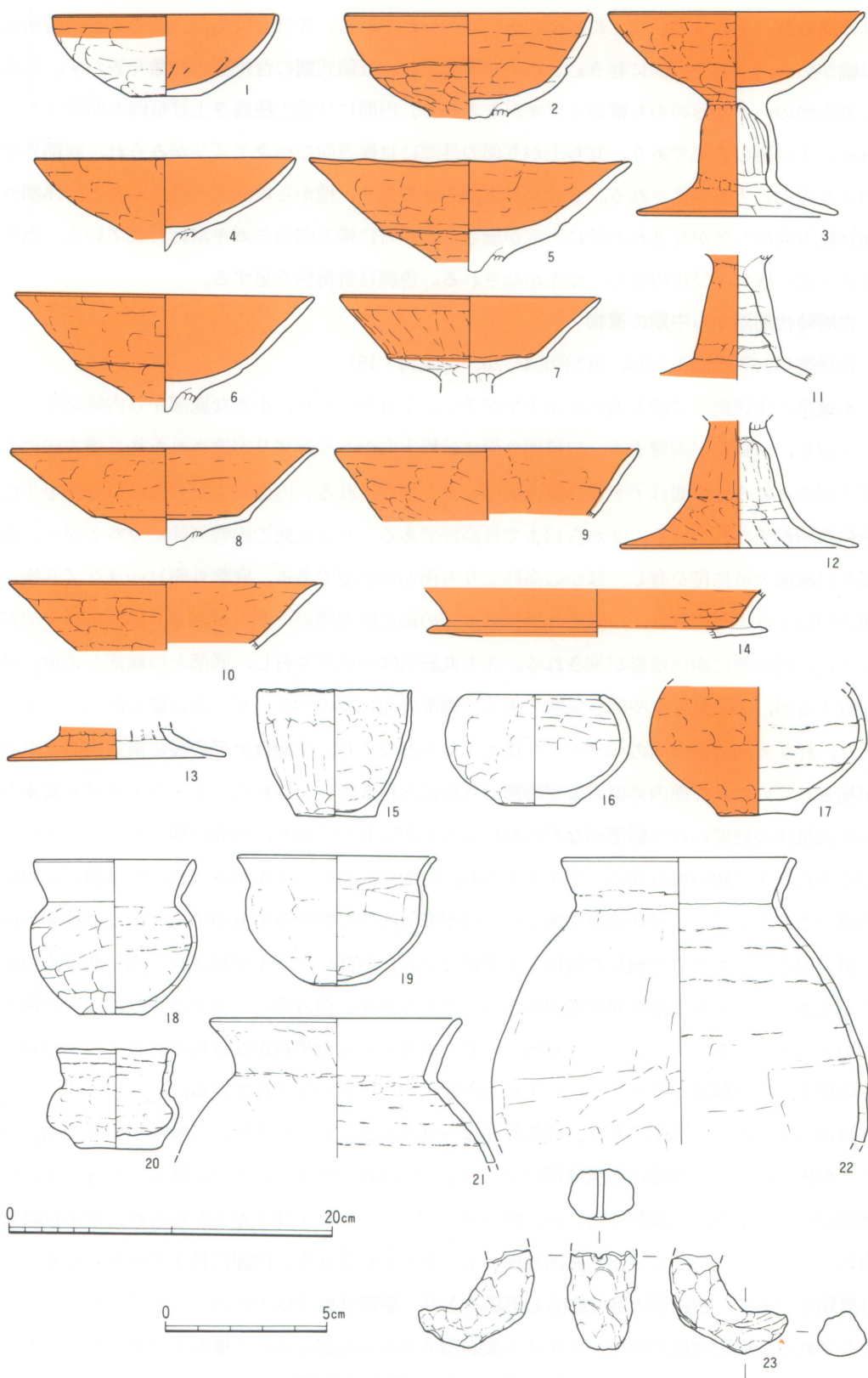
りが施され、上面は木口状工具によるナデが行われている。3は台付甕の台部である。接地面は幅が広く、平坦で内側に巻き込まれる形態をとり、五領式期の台付甕の特徴を表わす。外面は縦方向のハケ整形ののち縦のミガキがなされる。内面には粘土紐巻き上げ痕跡が明瞭にみられる。4は甕の底部であり、立ち上がり部の外面には横方向のヘラケズリがみられ、底部外面および内面にナデが施される。5は鬼高式期の杯であり、他からの混入と考えられる。体部外面は縦方向のハケがなされた後にナデが施され、さらに横方向のミガキが行われている。内面はナデ後、縦および楕円形のミガキがなされる。色調は黄褐色を呈する。

古墳時代前期から中期の遺物

住居跡108(第32図1～23, 第33図24～26, 図版14・15)

本遺跡の住居跡中で最も遺物の出土量が多い。1は杯であり、小さな底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部が内彎する。口縁部外面には横方向のヘラケズリが施された後に横方向のミガキがなされる。内面はナデ後に横方向のミガキがなされる。内面および外面の口縁部上半に赤色塗彩が施されている。2から13までは高杯である。2は丸底で内彎気味に立ち上がり、底部と口縁部の境に稜を有し、ほかの高杯よりも僅かに小型である。底部外面はヘラケズリ後に横方向のミガキが施され、口縁部外面にはナデの後に横方向のミガキが入る。内面にはナデがなされ、内外面に赤色塗彩が施される。3も丸底気味の底部を有し、底部と口縁部との境に稜を有するが、2よりもやや開き気味である。脚部外面は縦のヘラケズリ後に縦方向のミガキが入り、杯部外面は横方向のヘラケズリ後にミガキがなされ、内面はナデの後に横方向のミガキが施されている。杯部内外面および脚部の外面に赤色塗彩がなされる。4・5・6は丸底または丸底気味の底部から口縁部がなだらかに立ち上がるものであり、外面は横方向のヘラケズリがなされた後に粗い横方向のミガキがなされ、内面にも粗いミガキがみられ、内外面に赤色塗彩がなされる。7・8は杯部が平底ないしは平底気味な形態を示すものであり、7は杯部外面に斜方向のヘラケズリを施した後にミガキがなされ、内面にミガキが施され、内外面に赤色塗彩がなされる。8は杯部外面に横方向のヘラケズリの後、横方向のミガキが入り、内面は横方向のヘラケズリ後、ナデ、ミガキが施される。内外面に赤色塗彩がなされる。11・12・13は上述の杯部に伴う脚部と考えられ、いずれも外面に赤色塗彩がなされている。

14は大型の器台の器部であり、底部外面はヘラナデ後にナデが入り、口縁部下半と内面にはナデが施される。内外面に赤色塗彩がなされる。15は鉢であり、大きな底部から内彎気味に口縁部が立ち上がり、口縁部外面上面は横方向のヘラケズリおよびミガキがなされ、下半は縦方向のヘラケズリおよびミガキ、底部外面にもミガキがなされる。内面にはナデがみられる。16は無頸壺であり、胴部が大きく膨らむ形態をとり、胴部外面は横方向のヘラケズリ後にミガキがなされる。内面は横方向のヘラケズリ後胴部下半から底部にかけて横および斜方向のミガキが行われている。外面全体に煤の付着がみられる。17は頸部が欠損し判別しにくい、胴部が



第32图 住居跡108出土遺物(1)

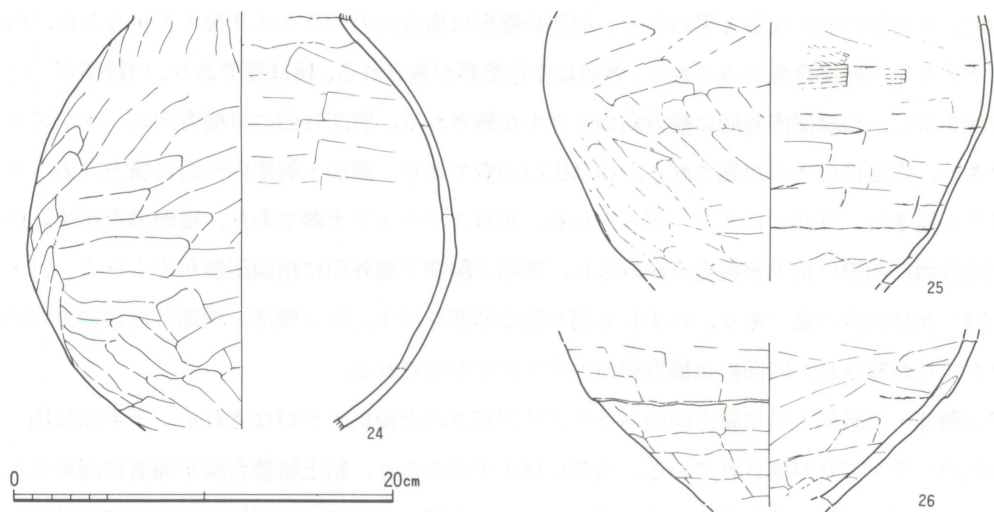
張っており器種は壺になると思われる。胴部の整形は横方向のヘラケズリ後ナデがなされ、内面はナデと粘土紐接合痕がみられる。外面に赤色塗彩が施される。18は壺であり、口縁部が「く」の字状を呈し、口縁部内外面に横方向のミガキが施される。胴部外面には横方向のヘラケズリがなされ、内面にはナデが施される。19は広口の壺であり、頸部・胴部内外面に横方向のヘラケズリが施され、外面にはミガキがみられる。20はミニチュア土器であり、壺形態を示す。口縁部内外面に明瞭に粘土紐接合痕がみられ、頸部と胴部下端外面に指頭圧痕がみられる。21・22, 24～26は大型の甕であり、いずれも胴が張る形態を示す。21は頸部・胴部外面に斜方向のヘラケズリが施され、内面には横方向のヘラケズリがなされる。

22は頸部・口縁部上半に縦方向のヘラケズリが施された後にナデがなされる。下半部は横・斜方向のヘラケズリが施されている。内面にはナデがみられ、粘土紐接合痕が顕著に認められる。24の外面には斜・横方向のヘラケズリが入り、内面にはヘラナデが施される。25は外面に斜方向のヘラケズリがなされた後にナデが加えられ、内面は上部にハケナデが施され、中・下部にはヘラナデ後にナデがなされる。内面に粘土紐接合痕が認められる。21・22, 25には内外面に斜・横方向のミガキが入る。26は内外面にヘラケズリ後にナデがなされ、外面中央部に粘土紐接合痕が顕著にみられ、一部内面にも認められる。23は玉状土製品であり、一見、曲玉形土製品だが、穿孔部分が線状を呈しており、曲玉形土製品の穿孔の仕方と異なる。また、整形が粗雑であることから、把手付の甕の把手部分の可能性が強い。

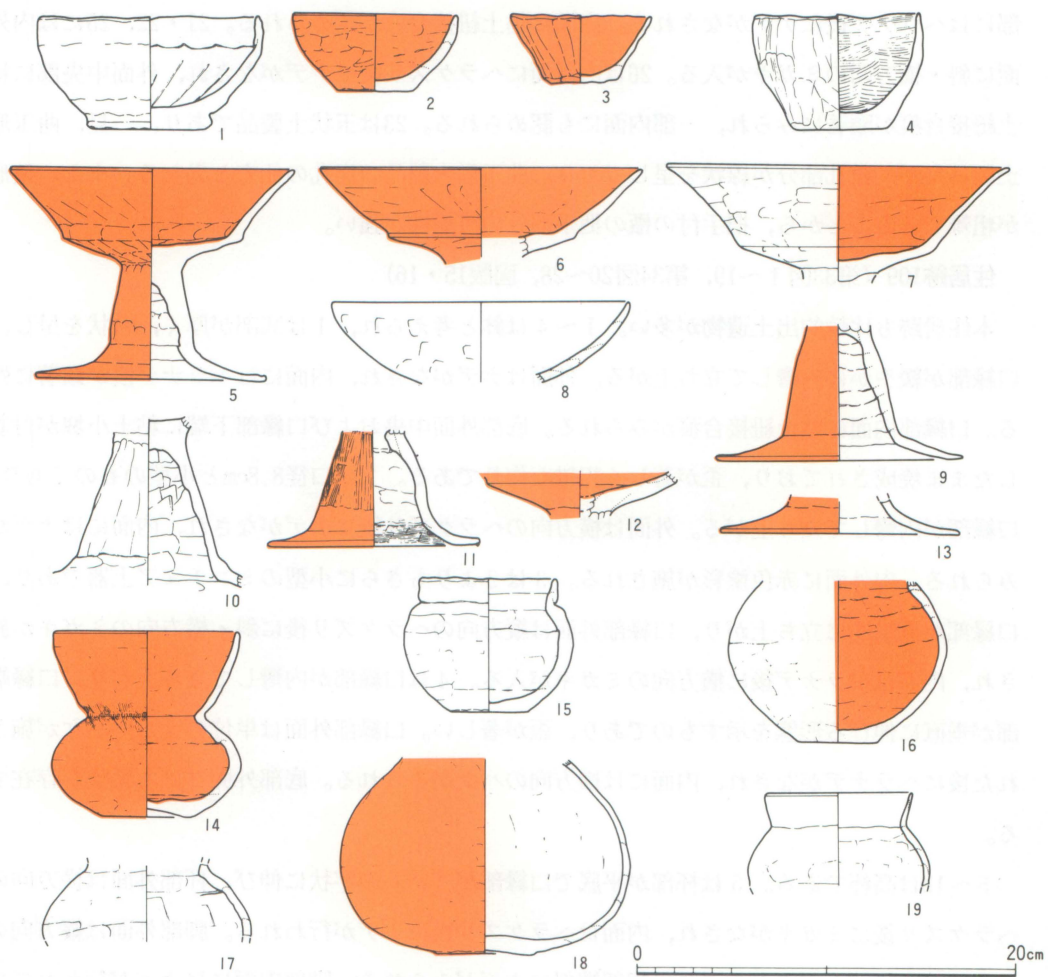
住居跡109（第33図1～19、第34図20～28、図版15・16）

本住居跡も比較的出土遺物が多い。1～4は鉢と考えられ、1は底部が厚く、台状を呈し、口縁部が緩やかに内彎して立ち上がる。外面はナデがなされ、内面にはヘラナデ痕が顕著に残る。口縁部内面に粘土紐接合痕がみられる。底部外面中央および口縁部下端に粘土小塊が付着したまま焼成されており、歪が著しく粗雑な作りである。2は口径8,8cmと小型のものであり、口縁部が内彎して立ち上がる。外面は横方向のヘラケズリ後にナデがなされ、内面にはナデがみられる。内外面に赤色塗彩が施される。3は2よりもさらに小型のミニチュア土器であり、口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部外面は縦方向のヘラケズリ後に斜・横方向のミガキが施され、内面はヘラナデ後に横方向のミガキが入る。4は口縁部が内彎して立ち上がり、口縁端部が垂直に伸びる形態を示すものであり、歪が著しい。口縁部外面は単位の大いハケが施された後にヘラナデがなされ、内面には横方向のハケがみられる。底部外面には木葉痕が存在する。

5～13は高杯である。5は杯部が平底で口縁部が「ハ」の字状に伸び、杯部外面は横方向のヘラケズリ後にミガキがなされ、内面はヘラケズリ後にナデが行われる。脚部外面は縦方向のヘラケズリ後にミガキがなされ、脚部端部にナデがみられる。脚部内面にはナデが行われている。杯部内外面、脚部外面に赤色塗彩がなされる。6は杯部が平坦で、口縁部が直線的に伸び、



住居跡108(2)

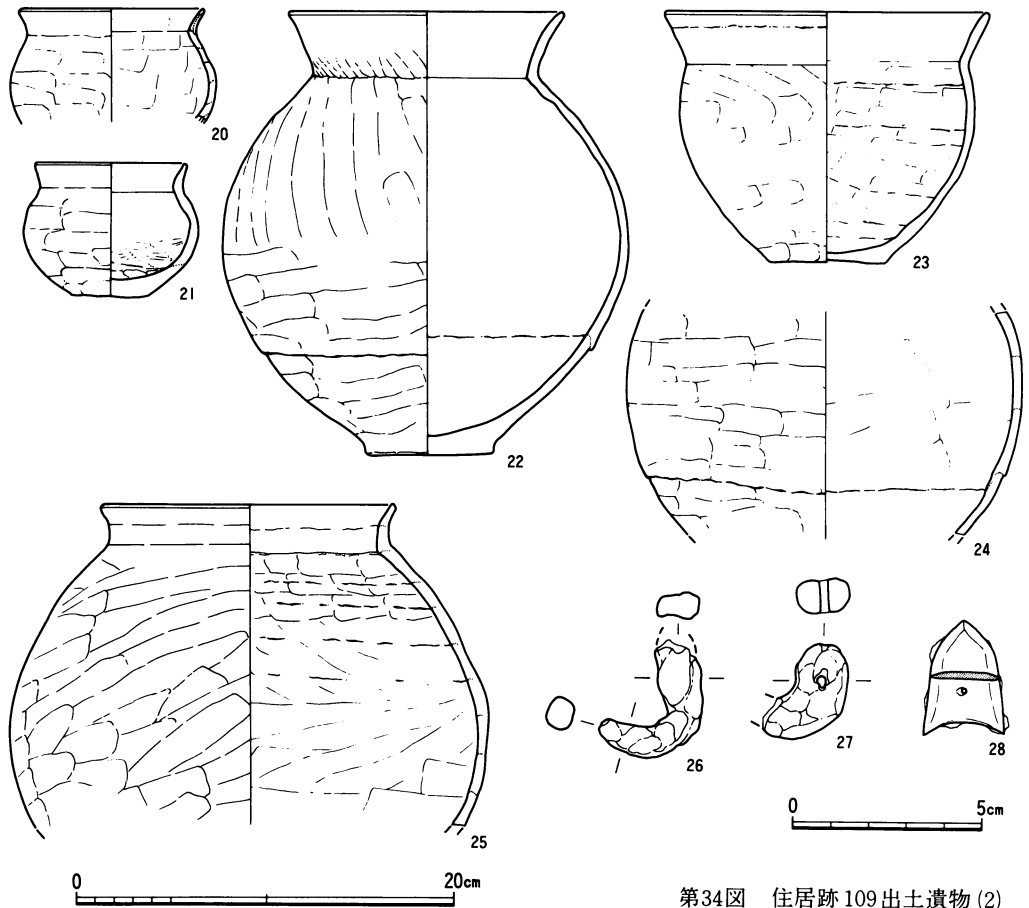


第33図 住居跡108出土遺物(2)・住居跡109出土遺物(1)

内外面にヘラナデ後にナデが加えられ、赤色塗彩が行われている。口縁部上半は熱を受け黒褐色に変色している。7は5とほぼ同様な形態になるものと考えられ、外面は横方向のヘラケズリ後に横方向のミガキが施され、内面はナデ後に横方向のミガキがなされる。熱を受けており、内面の一部に赤色塗彩痕が残存する。8は杯部が丸底を呈し、外面は横方向のヘラケズリ後に横方向のミガキがなされ、内面にはナデがなされる。9は外面にナデを施した後に縦方向のミガキがなされ、内面にはナデがなされているが、粘土紐接合痕が明瞭にみえる。外面のみに赤色塗彩が施される。10は脚部外面に縦方向のヘラケズリがなされた後に縦方向のミガキが施され、内面にはヘラケズリがみられる。11は脚部外面に縦方向のハケが明瞭に認められ、裾部外面にはナデがなされる。脚部内面はナデがなされ、裾部内面は外面と同様なハケが施される。外面のみに赤色塗彩がみられる。12は杯部底部の破片であり、内外面ともにナデが施され、赤色塗彩がなされる。13は脚部の裾部であり、内外面にナデがなされる。外面に赤色塗彩が施される。14は埴であり、口縁部が内彎気味に立ち上がり、底部中央部が窪む。口縁部外面にはナデがなされ、頸部には縦方向のハケが入り、胴部はヘラナデ後にミガキが施される。内面にはナデがみられ、内外面に赤色塗彩痕が残る。内面は剝離が著しく、胴部外面から底部にかけて煤が付着している。15は小型の壺であり、丸胴で口縁が直立する形態を示す。口縁部は短く、折り返し口縁となっており、胴部外面は横および斜方向のヘラケズリ後に横方向のミガキが入る。内面はナデによる整形である。16は口縁部が欠損していて判断しにくいだが、これも胴部の形態からみて壺と考えられる。外面は横方向のヘラケズリ後に横方向のミガキがなされ、内面は頸部の残存部分にミガキがみられ、その他の部分にはナデがなされる。内面は剝離が顕著にみられる。17は頸部が欠損しているが丸胴の埴と考えられる。外面は横方向のヘラケズリ後にナデが施され、内面にもナデがなされる。

18は大型の壺であり、胴部下半が膨らみ、西洋梨状を呈する。外面上半は縦方向のヘラケズリ、下半は横方向のヘラケズリが行われた後にナデがなされ、底部外面はヘラケズリが施される。内面はヘラナデ後にナデが加えられる。外面に赤色塗彩がなされる。19も小型の壺であり、口縁部が「く」の字状に外反する。外面は胴部に横方向のヘラケズリがなされ、頸部から胴部に横方向のミガキが施される。内面は頸部に横方向のミガキがなされ、胴部に横方向のハケが入る。20は壺であり、短い口縁部が「く」の字状に外反する。胴部外面は横方向のヘラケズリが入り、下半部にはさらにミガキが施される。内面にはナデがみられる。21も小型の壺であり、短い口縁部が僅かに外反する。胴部外面は横方向のヘラケズリがなされ、口縁部から胴部下半まで横方向のミガキが施される。内面には胴部下半にハケがみられ、その後に全面にナデが加えられる。

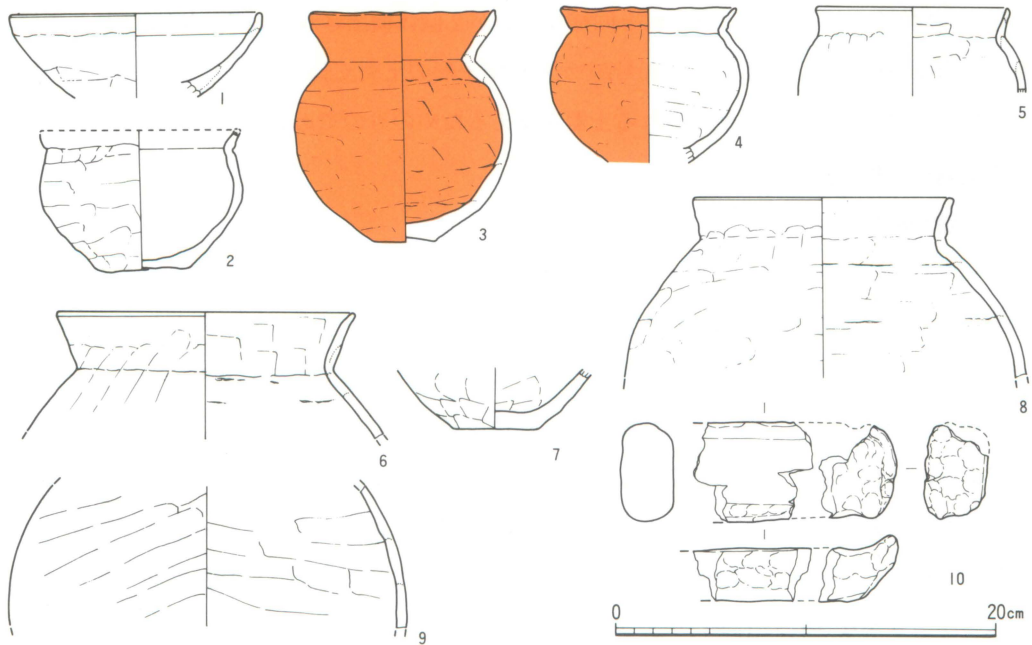
22から25は大型の甕であり、22は丸胴で、底部が厚手の作りのものである。頸部外面および胴部上半は斜方向のヘラケズリがなされ、下半は横方向のヘラケズリが施され、胴部外面全体



第34図 住居跡 109 出土遺物 (2)

に横方向の粗いミガキが入る。口縁部内面にも横方向のミガキがなされ、他の部分にはナデがみられる。胴部下半内外面に粘土紐接合痕が顕著に認められる。23は最大径が口縁部にあり、口縁部が開き気味の形態のものであり、胴部内外面には斜・横方向のヘラケズリが入り、口縁部上半の一部を除いた他の部分に横方向のミガキが施される。口縁部外面上半に粘土紐接合痕がみられる。24は丸胴を呈し、外面は横方向のヘラケズリ後に横方向のミガキが入り、内面は横方向のヘラケズリ後にナデおよび横方向のミガキがなされる。胴部内外面下半に粘土紐接合痕がみられる。25は丸胴で、口縁部が短く直立気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。胴部外面は斜方向のヘラケズリがなされ、内面はヘラナデが施される。口縁部内外面に粘土紐接合痕が認められる。

26は土製勾玉であり、上端部の一部を欠損する。穿孔はみられず粗雑な作りであり、指頭押圧によるナデがなされる。27も土製勾玉であり、先端部を欠損する。直径0.3cm程度の楕円形の穿孔がみられ、指頭押圧によるナデがなされる。28は無柄の鉄鏃であり、腸袂五角形式のもので、長さ2.9cm、幅2.1cm、厚さ0.2cm、孔径0.1cmを計る。



第35図 住居跡113出土遺物

住居跡113(第35図1～10, 図版17)

1は丸底の杯であり、外面は横方向のヘラケズリ後に縦および横方向のミガキがなされ、内面はナデおよび底部にミガキが入る。2は小型の短頸壺であり、胴部外面には横方向のヘラケズリがなされた後にナデが施される。内面はナデがみられる。内外面ともに器面の荒れが著しい。3は壺であり、小さな底部から内彎気味に立ち上り、胴が張り、口縁部が「く」の字状に外反する。胴部外面は横方向のヘラケズリ後にナデおよび横方向のミガキがなされる。内面は口縁部にナデおよびミガキがなされ、他の部分にはヘラナデがみられる。底部外面を除くすべてに赤色塗彩が施される。4も壺であり、丸胴で、短く外反した口縁部を有する。胴部外面に横方向のヘラケズリ後に斜・横方向のミガキが入る。内面にナデがなされる。外面に赤色塗彩がなされている。5は小型の甕である。胴部外面は器面の荒れが著しく不明瞭であるが、縦方向のヘラケズリが認められる。内面にはナデがなされる。

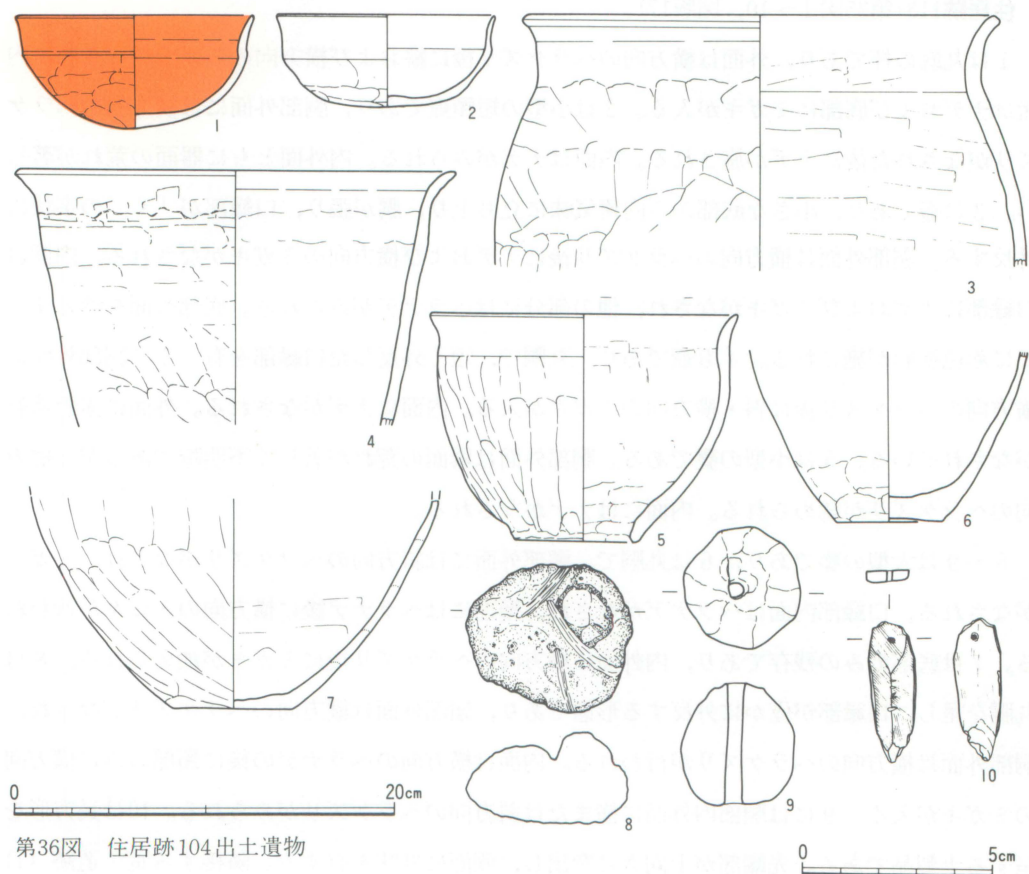
6～9は大型の甕であり、6は丸胴で、頸部外面には斜方向のヘラケズリがなされ、ミガキがなされる。口縁部内面はヘラナデがなされ、頸部にはヘラナデ後に横方向のミガキが行われる。7は底部のみの残存であり、内外面に横方向のヘラケズリ後にミガキが加えられる。8は丸胴を呈し、口縁部が僅かに外反する形態であり、頸部外面は縦方向のヘラケズリがなされ、胴部外面は横方向のヘラケズリが行われる。内面は横方向のヘラナデの後に頸部のみに横方向のミガキが入る。9には胴部内外面に横または斜方向のヘラケズリがみられる。10は長方形を呈する土製品である。先端部が上向きに突出し、側面に丸味を有する。隣接する荒久遺跡(1)

の竪穴住居010¹からは炉内よりこれと同様なものが2個体検出されている。また、これと同様なものが市原市草刈B区の1号跡²と70号跡²から烏帽子形の土製支脚³とともに検出されており、これらは、炉内で煮炊き等に使用される土器を支えるためのものであると推察される。

古墳時代後期の遺物

住居跡104(第36図1~10, 図版17)

1・2は丸底の杯であり、1は半球状の底部から口縁部が僅かに外傾しながら立ち上がり、口縁部内外面には横方向のナデがなされ、底部外面は横方向のヘラケズリが施される。内面にはナデがなされ、内外面に赤色塗彩が施される。2は1よりも底部がやや平坦であるが、そのほかの形態・技法はほぼ同様である。ただし、赤色塗彩は行われていない。3・6・7は大型の甕であり、3は長胴に近い形態を示し、口縁部が外反気味に立ち上がり、上半部が外反する。胴部外面は縦および斜方向のヘラケズリがなされ、内面にはナデがなされる。胴部外面と口縁部内面に横方向のミガキが加えられている。6は長胴甕の底部であり、胴部外面下端に横方向のヘラケズリがなされ、上半にナデが行われる。内面にはナデがみられるものの遺存度が悪く整形は不明である。底部外面には木葉痕の一部が残る。7は丸胴になるものと考えられ、外面は斜方向のヘラケズリ後に斜方向のミガキがなされ、内面にはナデが行われる。4と5は単孔



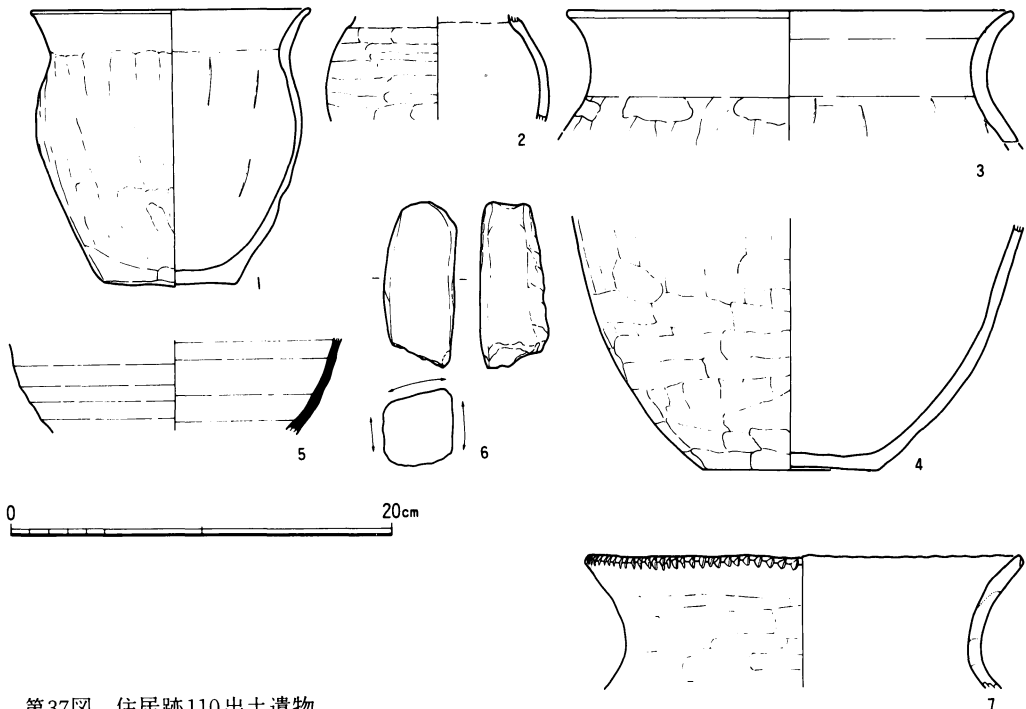
第36図 住居跡104出土遺物

式の甗である。4は大型で長胴形を呈し、胴部外面は縦方向のヘラケズリ後に横および斜方向のヘラケズリがなされ、さらに斜方向のミガキが加えられる。内面にはナデがなされる。5は小型で、底部が小さくすぼまる形態のものである。胴部外面に縦方向のヘラケズリがなされ、内面は胴部にナデが行われ、胴部下半および孔部に横方向のヘラケズリが施される。

8は用途不明土製品である。被熱で極めて脆くなっており、気泡が表面に多くみられる。色調は暗灰褐色を呈する。溝状のものがみられるが人為的なものかどうか不明である。鍛冶炉の炉壁の可能性も考えられる。9は土製丸玉であり、中央に円形の直径4mmの孔が開き、外面には指ナデによる整形が行われる。10は滑石製の剣形模造品であり、長さ3.7cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを計る。基部に径1mmの孔が開けられている。表面は1条の稜線が観察され、また、研磨の際に生じた細かい擦痕が著しく残される。

住居跡110(第37図1～7、図版17)

1・3・4は甗である。1は小型で、「く」の字状口縁を有し、最大径が口縁部にみられる。胴部外面は縦方向のヘラケズリがなされ、胴部下端に横方向のヘラケズリが行われた後に、部分的にミガキがなされる。内面はナデが施される。外面に被熱痕が認められる。3は大型で丸胴を呈するものと考えられ、頸部内外面に縦方向のヘラケズリがみられる。4も大型で、大きな底部から胴部がなだらかに立ち上がり、胴部外面には横または縦方向のヘラケズリがなされ、内面にはナデが認められる。内面は器面の剝離が著しい。2は壺であり、胴部内外面にナデがなされる。5は須恵器の壺の胴部破片であり、内外面に横ナデがみられる。6は砂岩質の砥石



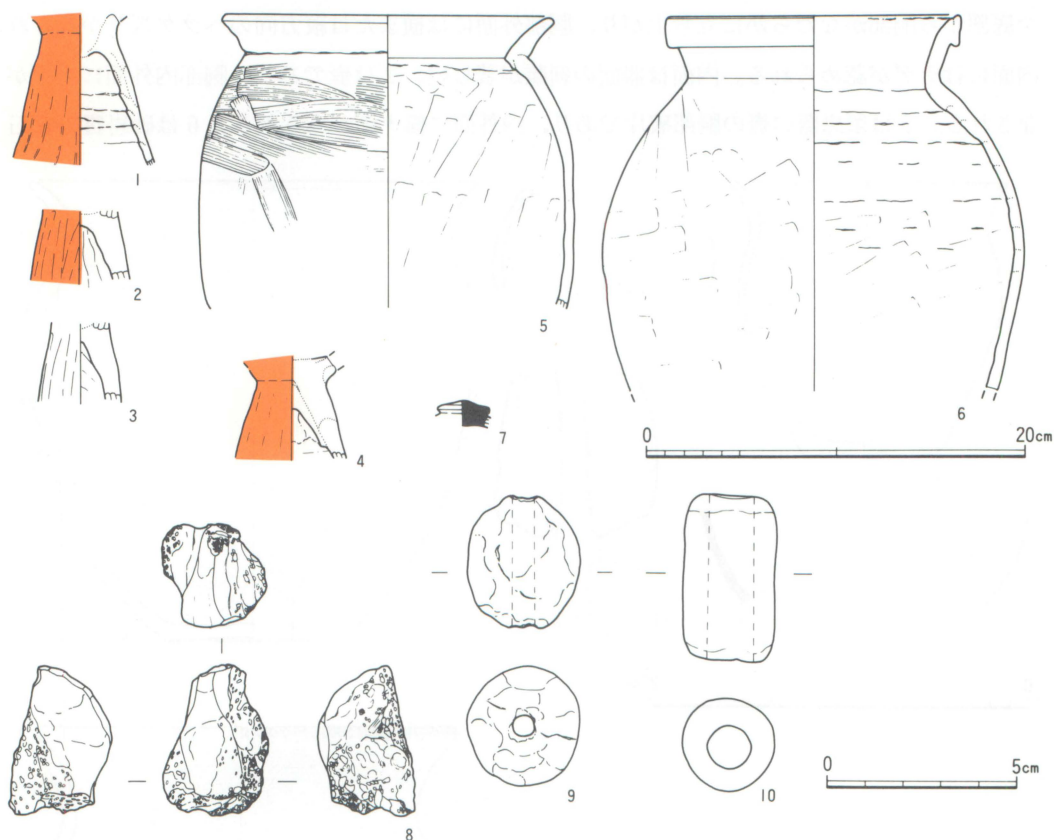
第37図 住居跡110出土遺物

であり、長さ8.5cm、幅3.7cm、厚さ4.0cmを計る。側面の3面が擦られている。7は本住居跡と切り合い関係にある住居跡111から混入したものと考えられる大型の甕である。口縁端部にはヘラによる刺突がみられ、口縁部・頸部外面には横方向のヘラケズリ後にミガキがなされ、内面はナデの後に横方向のミガキが加えられる。

溝・グリッド出土の遺物(第38図1～6、8～10、図版17)

溝の覆土からも古墳時代の遺物が出土しているが、これらの溝は古墳時代よりも後のものであり、溝内出土遺物は混入品として捉えられるので、グリッド一括遺物とともに報告する。

1・2はE2、3はE3、4～6・10はF3グリッドからの出土であり、7は荒久遺跡(1)から伸びる溝跡048-(2)1号跡内の出土で、9は溝跡105からの検出である。なお、5・6に関しては出土位置が住居跡108に近く、この住居跡の遺物と同時期のものとして捉えられるので住居跡108に帰属する可能性が強い。1～4は高杯の脚部であり、外面にはいずれも縦方向のヘラケズリがなされ、内面にはナデが行われている。1と3には外面に縦方向のミガキがさらに施されており、4の脚部下端内面には横方向のヘラケズリがみられる。1～3は外面のみに赤色塗彩が施されるが、4は外面と杯部内面に赤色塗彩がみられる。1の内面には粘土紐接合痕が顕著に残る。5は寸胴で短く肥厚した口縁部を有する甕である。胴部外面は細かなハケとナデが施



第38図 溝跡・グリッド出土遺物

され、内面には縦方向のヘラケズリがなされ、ナデが行われる。頸部内外面に粘土紐接合痕がみられる。6は折り返し口縁を有する丸胴の甕である。口縁部外面にはナデがなされ、頸部外面に斜方向のヘラケズリ・ミガキがなされ、胴部外面には横方向のヘラケズリ後に横および縦方向のミガキが施される。口縁部・頸部内面にはヘラナデ後に横方向のミガキが入り、胴部には横方向のヘラケズリやナデがなされる。8は鍛冶の羽口の一部と考えられる。表面がザラザラの状態になっており、鉄滓状の発泡物が付着している。9は土製丸玉であり、径3.1cm、高さ3.4cmを計り、直径5mmの孔が開く。指ナデによる整形が行われ、赤色塗彩痕が僅かに残存する。10は長方形で、断面が円形を呈する土錘である。長さ4.3cm、幅2.4cmで、円形で幅が1.1cmと広い孔が開く。外面にはナデ整形がなされる。色調は濃い橙褐色を呈する。

註 1. 荒久遺跡 (1)010号跡の時期は本遺跡の住居跡113の時期とほぼ同様である。

註 2. 草刈遺跡のものは時期が本遺跡のものよりも古い。

高田 博他 「草刈遺跡 (B区)」『千原台ニュータウンIII』 千葉県文化財センター 1986

註 3. この土製支脚については藤岡孝司氏が3個体で1つの機能を果たしていたと推考している。藤岡孝司 「粗雑な器台状脚形土器について」『研究連絡誌』第2号 (財) 千葉県文化財センター 1983

4 節 歴史時代

本遺跡においては歴史時代の遺物は極端に少なく、実測可能なものは3個体のみである。

第38図の7はF3グリッドから出土した奈良時代の須恵器蓋の鈕部破片である。擬宝珠状を呈し、色調は灰色で胎土・焼成は良好であり、外面には淡黄褐色の自然釉がみられる。東海地方からの搬入品と考えられる。第39図の1・2は銅銭である。1はE3グリッド表採の永楽通寶であり、初鑄は明の永楽9年(1411)の渡来銭である。2は寛永通寶であり、17世紀後半代の所産と考えられる。銭貨各部の計測値は第3表に示した。



1. 永楽通寶 (E3-14)



2. 寛永通寶 (E2-93)



第39図 銭貨拓影 (S=1/1)

第3表 銭貨計測値

番号	出土地点	銭種名	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
1	E3-14	永楽通寶	3.01	24.05	20.75	7.45	5.95	1.27	0.82
2	E2-93	寛永通寶	2.42	22.8	18.65	7.2	6.1	1.21	0.54

4章 まとめ

1節 先土器時代

荒久遺跡(2)から検出された先土器時代の遺物集中地点は2箇所であったが、中央博物館建設予定地とは本来同一の遺跡と考えるのが自然であるので、両者を合わせた石器群の変遷図を作成した(第40図)。大別して3枚の文化層の重複が観察される。

最上層は細石刃主体の文化層で、中央博物館調査区に1箇所の集中箇所があった。中層は本遺跡に1箇所集中地点があり、最下層は両遺跡にまたがって数箇所のブロックが存在したらしい。この文化層に関しては中央博物館分の報告書に譲るとして、ここでは中層の問題点について簡単に触れておきたい。

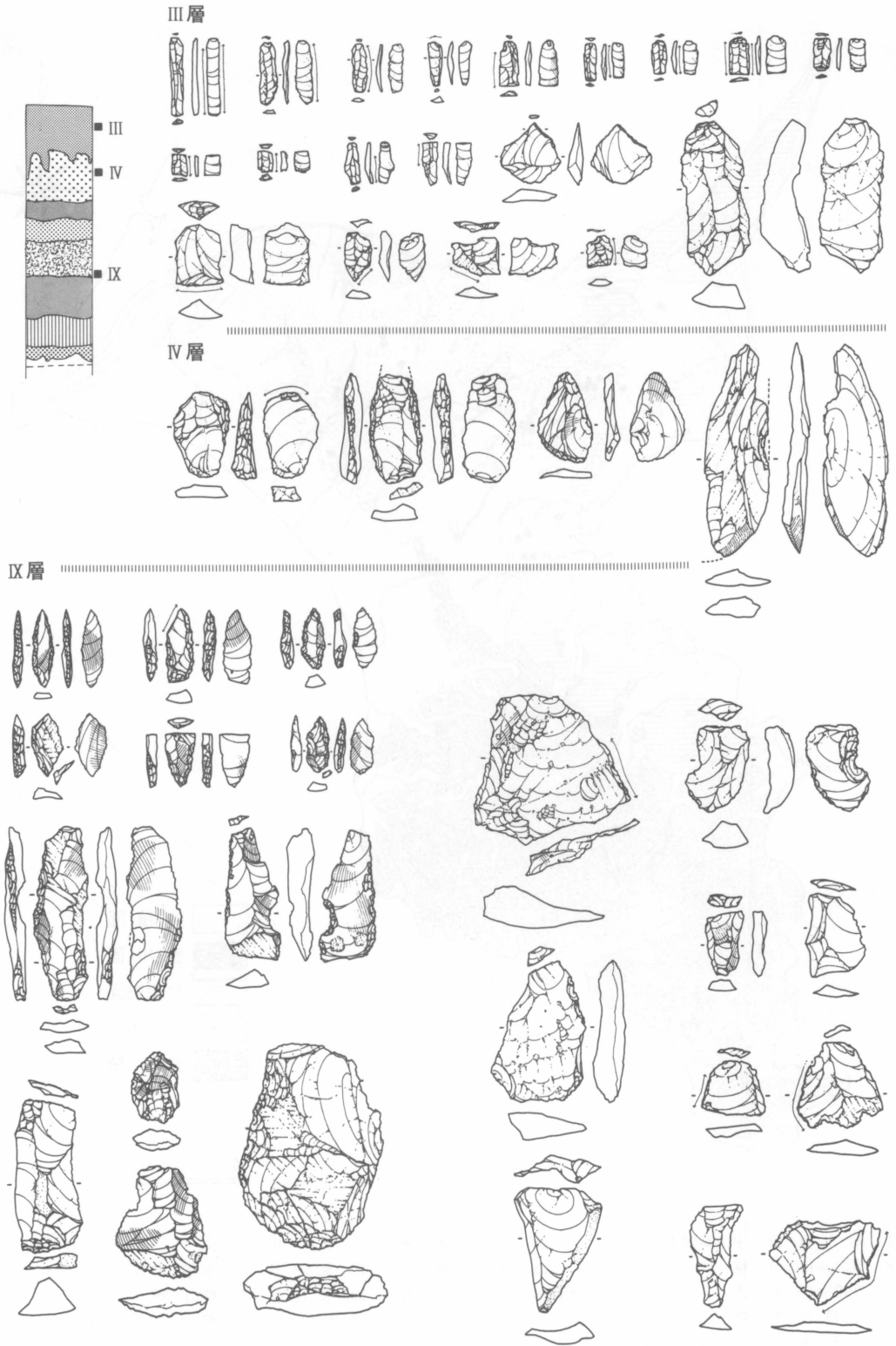
荒久遺跡中層の石器群はハードローム層の上部を産出層準としていた。ナイフ形石器や剝片製端削器など、本層準の石器群としてはごく一般的な石器類が含まれているが、1点とは言え、局部磨製石斧破片を得たのは大きな収穫であった。

関東地方における石斧の産出層準は概ねAT降灰以前に集中しており、石斧自体が一種の標準化石と見られる場合も多い。事実、本地域においても、従来、石斧の出土が報じられている遺跡は管見によれば33遺跡あるが(第41図)、ATよりも上部から検出された事例は皆無であった¹。麻柄一志は中部地方日本海側を中心とする諸例を検討し、石斧がAT以降の石刃石器群まで連続時に継起する事実を指摘した(麻柄1985)。AT以降の石刃石器群との共伴関係は、関東地方においても一例知られている(金山・土井・武藤1984)。

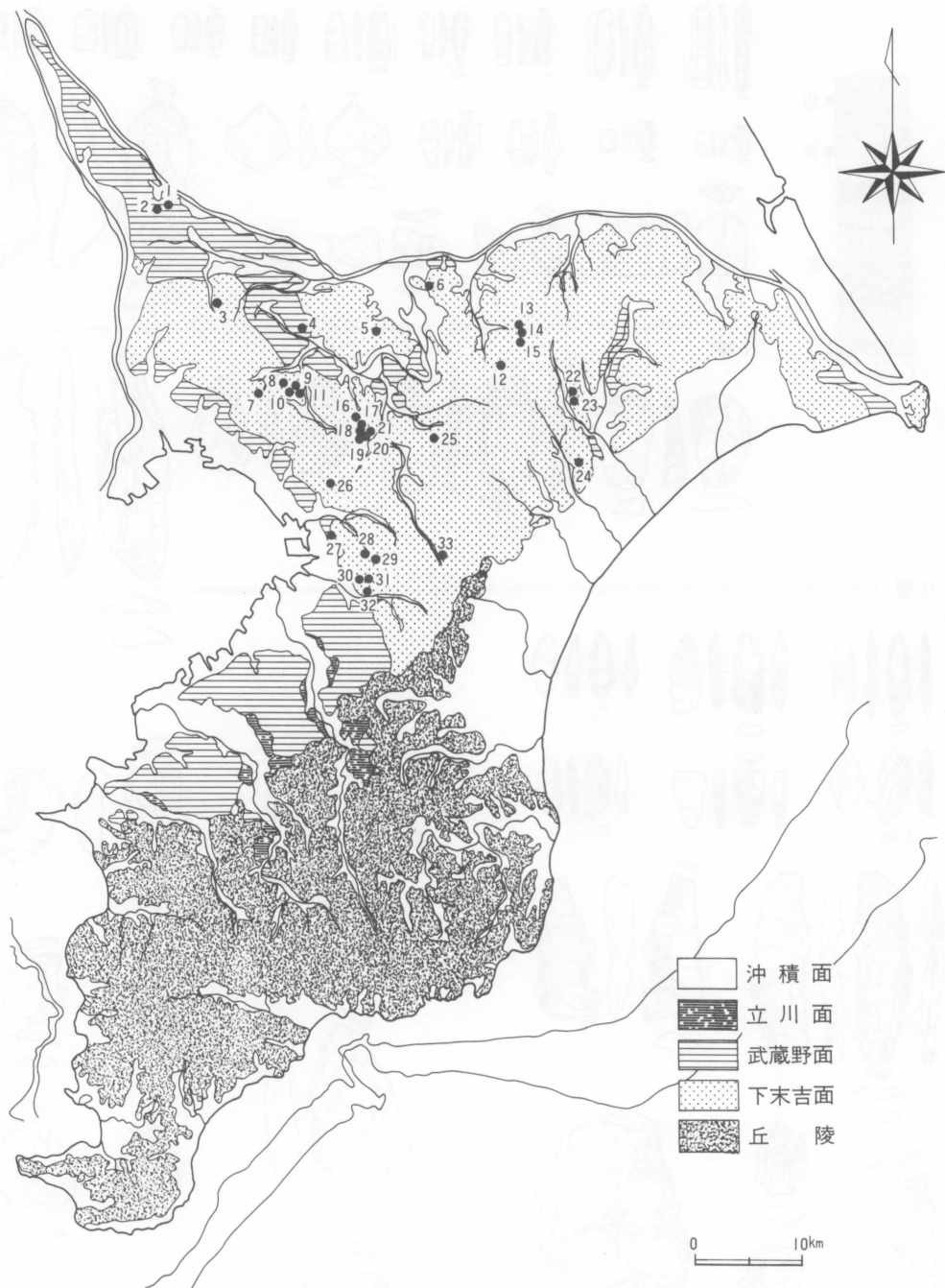
この状況を如何に評価するかは見解の岐れるところであるが、型式としての石斧と、石斧の担った機能的役割とその変換過程双方を厳密に分離した上での総合的考察が必要である。型式としての石斧が消滅した後にも、機能としての石斧は存続したにちがいない。〈おの〉という心象は、ある自然的・文化的脈絡の内部で多様な形態と結びつくが、その多様性の収斂する領域に本遺跡や、橋本遺跡の石斧を位置づけることにしよう。

註1. 石斧出土遺跡は以下の34遺跡である。文献のないものが多いが、大半を実見の上、出土状況を確認している。

1. 中山新田I(田村1986), 2. 聖人塚(田村1986), 3. 谷田木曾地(清藤1984), 4. 角田, 5. 坊山, 6. 権現後(橋本1984), 7. ヲサル山(藤岡1986), 8. 白幡前, 9. 林跡, 10. 芝山, 11. 池花南, 12. 御山, 13. 和良比, 14. 棒山・呼戸, 15. 出口・鐘塚, 16. 白井南石神第1地点(小田1975), 17. 大作, 18. Na55(古内1971), 19. Na61, 20. Na67B, 21. 大堀, 22. 餅ヶ崎(築瀬1988), 23. 向台(石田1985), 24. 土持台(三浦1986), 25. 吹入台(三浦1986), 26. 六通金山(関口1981), 27. 草刈六之台, 28. 草刈C, 29. ナキノ台, 30. 神明社裏, 31. 荒久(2)(本書), 32. 東内野, 昭和63年調査区, 33. 葎山, 34. 中台柿谷(奥田他1986)



第40図 荒久遺跡の先土器時代石器群の変遷



- | | | | | | | |
|------------|----------|----------|---------|--------|-------------|------------|
| 1 聖人塚 | 2 中山新田I | 3 林跡 | 4 谷田木曾地 | 5 角田 | 6 向台 | 7 芝山 |
| 8 フサル山 | 9 権現後 | 10 坊山 | 11 白幡前 | 12 東内野 | 13 空港No.67B | 14 空港No.61 |
| 15 空港No.55 | 16 大堀 | 17 出口・鐘塚 | 18 池花南 | 19 和良比 | 20 棒山・呼戸 | 21 御山 |
| 22 土持台 | 23 吹入台 | 24 中台柿谷 | 25 大作 | 26 餅ヶ崎 | 27 荒久(2) | 28 神明社裏 |
| 29 六通金山 | 30 草刈六之台 | 31 ナキノ台 | 32 草刈C | 33 葎山 | | |

第41図 下総台地における先土器時代石斧出土遺跡分布図

2 節 縄文時代・弥生時代

本遺跡では遺構が全く検出されず、土器片が僅かに検出されたのみであった。縄文時代では早期の茅山上層式土器、後期の加曽利B式土器であり、弥生時代のものは後期の複合口縁を有するもののみであり、該期における本遺跡の性格等は不明といわざるを得ない。

3 節 弥生時代末から古墳時代

今回の調査では、10軒の竪穴住居跡が検出された。攪乱が大部分の住居跡に入り、検出状況はあまり良好ではなかった。しかし、出土した土器の内容は比較的豊富であり、荒久遺跡(1)出土の土器群と考え合すれば千葉市周辺域における当該期の土器研究にとって貴重な資料を提供したと言える。

住居跡の平面形は方形を基調とするもので、住居跡104・108・109・110のようにほぼ正方形に近いものが多い。最も規模が大きいものは、一辺7.6mの住居跡113であり、最も規模が小さいものは縦横が3.5mを測る住居跡109である。支柱穴は重複により大部分が破壊された住居跡102と住居跡109を除いた住居跡に認められ、住居跡104・110には出入り口に伴う柱穴がそれぞれ1基ずつ検出された。炉は住居跡103・108・109・112・113に認められるが、住居跡113の炉は細長く掘り込みも浅い不明瞭なものであった。竈は住居跡104・110から山砂を使用したものが検出された。周溝は住居跡103・104・110・113から検出され、住居跡104・110の周溝については全周するものと考えられる。貯蔵穴は住居跡103・104・108・109・112・113から検出され、中には住居跡108のように貯蔵穴を2基有するものもみられる。また、住居跡108からは住居跡の壁と直行する形で、床面に長さ70cm～130cm、幅20cm、深さ10cm程度の溝が5条検出された。溝は北・南・東壁に各1条、西壁に2条存在し、溝と溝とに区画された区域は縦が170cm～250cm、横が70cm～130cm程度で人間が寝られる空間が形成されており、これらの溝は間仕切りのためのものと判断される。住居跡の北東・南西隅には貯蔵穴がみられ、炉の南東（住居跡の中央部）には床面が硬くなっている部分がみられるので、本住居跡の場合には壁の周囲は寝間および貯蔵・物置空間、住居跡中央部が居間的空間として使い分けられていたことが類推できる。

住居跡103・104・108・112・113からは焼土と炭化材が床面より検出された。これらはいわゆる焼失住居の範疇として捉えられるが、いずれも検出された炭化材の量は上屋構築材の一部にすぎなかった。しかしながら、住居跡104の柱穴からは直径25cm程の柱材の一部が検出され、貴重な成果が得られた。このように柱材が残存していた例としては本県では荒久遺跡(1)¹、千葉市星久喜遺跡²、沼南町片山古墳群内D地点遺跡³等が挙げられるが、本遺跡の住居跡104の柱穴内の柱材は上部が切り取られており注目される。

焼失住居については戦乱等による火災が主体原因⁴と言う説も存在するが、本住居跡の事例においては、支柱が切断されており、構築材（梁・桁材等）の残存が非常に悪く柱材等が運び出

されている可能性や竈が壊された後に火を受けたと考えられる等から、住居廃棄後に火を被った可能性の強いことが窺える。

なお、焼失住居にみられる竪穴住居跡の廃棄については群馬県村主遺跡⁵の中において、中沢悟氏が住居の引越しに伴う一つの行為として検討している。氏が対象としている奈良時代の竪穴住居跡と本住居跡は共通点が多く注目される場所である。しかしながら、焼失住居の有する意味を一概に断じることは非常に困難である。時代は大分下るが、鎌倉時代には、罪の「ケガレ」を祓う為に加害者と被害者の家を焼くこと⁶も行われており、焼失または焼却にいたる過程については多くのことがらが考えられる。これらの事例を明らかにするためには今後、さらに細密な調査を行う必要が認められる。明確な焼失または焼却した住居跡の類例の増加を期待したい。

住居跡からは比較的多くの土器が検出されている。しかしながら、本遺跡の場合重複関係が少ない上に古墳時代でもそれぞれ隔った時期のものが10軒のみの検出であり、土器の細かな変遷を追うことは非常に困難である。本遺跡と隣接する荒久遺跡(1)からは43軒の竪穴住居が検出されているので、荒久遺跡全体の細かな土器の変遷は荒久遺跡(1)の報告書に譲り、本報告書では、荒久遺跡(2)のみの大まかな土器変遷を提示することにとどめたい。

本遺跡の土器群は以下の3期に区分できる。

第Ⅰ期

住居跡101・102・103・111・112出土土器が挙げられる。

器台 小型で器部中央に貫通孔を有し、台部に4個の円形の穿孔がなされる。台部にハケナデの後、ミガキがなされる。

壺 頸部が大きくすぼまり、外面にヘラナデ、内面にハケナデがなされるものと胴部外面上半に斜格子目状に縄文が施された後にヘラで区画がなされたものがある。

甕 甕はすべて口縁部が外反する形態のものであり、口唇部に刻み目を有するものとなないものに大別できる。主体を占める甕は刻み目を持たない甕であり、これらはハケ整形のものとなデを主体とするものに分けられる。刻み目を有するものは口縁部・胴部にハケが施されたものとなデとヘラケズリがなされたものが認められる。

台付甕 口縁部に刻み目を有するものとS字状口縁と考えられるものがある。刻み目を有するものは内外面にハケ整形がなされている。S字状口縁と考えられるものは器壁が薄く、色調は外面暗灰褐色、内面明灰褐色を呈し、胎土には長石・石英粒や雲母が混入している。本遺跡の土器群とは胎土・色調が異なっており他地域からの搬入品と考えられる⁷。

手捏土器 猪口状を呈し、外面に指頭圧痕がみられる。

第Ⅱ期

住居跡108・109・113出土土器が挙げられる。

杯 丸底で口縁部が内彎しながら立ち上がる。口縁部・底部外面に横方向のヘラケズリがなされた後に横方向のミガキがなされ、内面にはナデの後に横方向のミガキがなされる。

高杯 杯部が丸底と平底のものに2大別され、口縁部が内彎気味のものと外反するものが認められる。脚部はいずれも円筒形で裾部は「ハ」の字状を呈する。ヘラケズリ整形のものとハケ整形のものが存在する。ミガキや赤色塗彩がなされたものが多い。

器台 大きな突帯を有し、器部が逆「ハ」の字状に開く。赤色塗彩が施される。

鉢 いずれも平底で、器高が高くコップ状を呈するものと口縁部が内彎気味のものが存在する。外面はヘラケズリがなされる。ミガキや赤色塗彩が施されたものがある。

埴 大きく口縁部が開くものであり、ハケやナデがなされ、赤色塗彩が施されたものがある。

壺 甕の次に出土量が多い。短い折り返し口縁を有するもの、短い口縁部を有するものと「ハ」の字に口縁部が開くもの、胴部が西洋梨状を呈するものがある。整形はヘラケズリが主体であり、一部にハケ整形が施されたものがある。ミガキや赤色塗彩がなされたものも存在する。

無頸壺 胴部が大きく膨らむ。胴部内外面にヘラケズリがなされ、ミガキが施される。

甕 胴部が丸胴を呈するものが主流を占め、口縁部に最大径を有するものも僅かであるが認められる。外面はヘラケズリ整形がなされ、内外面にミガキが施されたものがみられる。

第Ⅲ期

この期は住居に竈を有する時期のものであり、住居跡104・110出土土器が挙げられる。

杯 丸底で底部と口縁部との境に明瞭な稜がみられる。底部外面には横方向のヘラケズリが施され、口縁部内外面に横方向のナデがなされる。赤色塗彩が施されたものも存在する。

甕 大型で長胴の単孔式のものとして小型で胴部が若干膨らむ単孔式のものがある。ヘラケズリ整形がなされ、ミガキが施されたものもみられる。

須恵器壺 胴部の内外面に横ナデが施される。

壺 胴部内外面にナデがなされたものがある。

甕 II期よりもやや長胴化している。ヘラケズリ整形を基調とし、一部にミガキが入るものがある。

以上3時期に区分したが、これらの土器群は典型的な千葉地域の土器であり、周辺地域の土器編年と対比するならばI期は東寺山遺跡⁹の第I期(新)から第II期にかけて、II期は東寺山遺跡の第IV期、III期の住居跡104は谷津遺跡第116号住居跡⁹等に類例が認められ須恵器模倣の土師器杯出現以降の時期と考えられる。I期は弥生時代末から古墳時代初頭、II期は古墳時代前期から中期、III期は古墳時代後期で6世紀前半から7世紀前半代の所産であると考えられる。本遺跡のI期とII期は数十年単位の隔りが想定でき、さらにII期とIII期でもある程度の時期差が考えられ、III期も厳密に言うならば住居跡104と住居跡110との間にも若干の時期差が想定できるので、本遺跡の集落は断続的に営まれていたと言える。

隣接する荒久遺跡(1)からは、I期の住居跡が26軒、II期が4軒、III期¹⁰が8軒認められ、本遺跡とほぼ同時期の遺構が検出されており、荒久遺跡(1)・荒久遺跡(2)ともに断続的な集落の変遷を示しているといえるであろう¹¹。

- 註 1. 小林清隆・山口典子 「千葉市荒久遺跡の焼失住居の調査について」『研究連絡誌』第22号(財)千葉県文化財センター 1988
- 註 2. 田川 良他 「星久喜遺跡」『千葉市文化財調査報告書』第8集 1984
- 註 3. 小久貫隆史他 「片山古墳群内D地点遺跡」(財)千葉県文化財センター 1988
- 註 4. 石野博信 「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念会 1985
- 註 5. 中沢 悟 「大原II遺跡・村主遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 註 6. 清田善樹 「中世の大和における住屋放火」『文化財論叢奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』1983
- 註 7. 名古屋市立博物館に遺物を持参して同地のS字状口縁の台付甕と付け合わせたが、名古屋周辺のものとは胎土・色調が異なっていた。おそらくは、本遺跡のものは名古屋以東、関東以西に産地が求められる可能性が強い。
- 註 8. 沼沢 豊他 「東寺山石神遺跡」(財)千葉県文化財センター 1977
- 註 9. 倉田義広他 「谷津遺跡 本文編」千葉市文化財調査報告書第10集 千葉市教育委員会 1984
- 註10. 荒久遺跡(1)のIII期は7世紀後半の時期の住居跡も含まれる。
- 註11. ただし、荒久遺跡(1)・(2)よりも西側のA2・3・4、B1・2・3・4、C2グリッドにも多くの住居跡が確認調査時に検出されており、同地点にI期からIII期の時間的空白を埋める竪穴住居跡が存在する可能性も考えられることを指摘しておきたい。

4 節 歴史時代

溝状遺構が8条検出されたのみで、近世の遺物が出土した溝048-(2)以外は時期を決定できる遺物がみられなかった。溝の底面が硬く締まって道路状を呈するものも存在し、溝以外にも使用された可能性が考えられるものも認められるが、これらの溝の具体的な性格については不明である。

以上、荒久遺跡(2)についてのまとめを行った。荒久遺跡(1)・(2)はともに古墳時代の集落跡が主体の遺跡であった。同時期の墓跡や生産跡を今回は検出することができなかったが、荒久遺跡は現在調査途中であり、今後調査が進み、荒久古墳を含めた墓域の問題やI～III期の時間的空白を埋める住居跡群等の存在が明らかになることを期待したい。

引用参考文献

- 石田広美 1985 主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 奥田正彦他 1986 主要地方道成田松尾線III
- 小田静夫 1975 石神第1地点（臼井南）
- 清藤一順 1984 谷田木曾地遺跡（千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VIII）
- 金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984 橋本遺跡
- 関口達彦 1981 千葉東南部ニュータウン11-六通金山遺跡-
- 田村隆 1986 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV-元割・聖人塚・中山新田I遺跡-
- 橋本勝雄 1984 八千代市権現後遺跡（萱田地区埋蔵文化財調査報告書I）
- 古内茂 1971 No55遺跡（三里塚-新東京国際空港用地内における考古学的調査-）
- 藤岡孝司 1986 八千代市ヲサル山遺跡（萱田地区埋蔵文化財調査報告書III）
- 麻柄一志 1985 局部磨製石斧を伴う石器群について（旧石器考古学31）
- 三浦和信 1986 多古工業団地内遺跡発掘調査報告書
- 築瀬裕一 1988 旧石器時代（千葉市餅ヶ崎遺跡）

版 図



荒久遺跡周辺の遺跡



荒久遺跡

荒久古墳

千葉寺



Y = 28,100

Y = 28,000

Y = 27,900

Y = 27,800

Y = 27,700

X = -44,800

X = -44,900

X = -45,000

100m

荒久遺跡の地形

荒久遺跡(1)

荒久遺跡(2)







(1) 荒久古墳現状



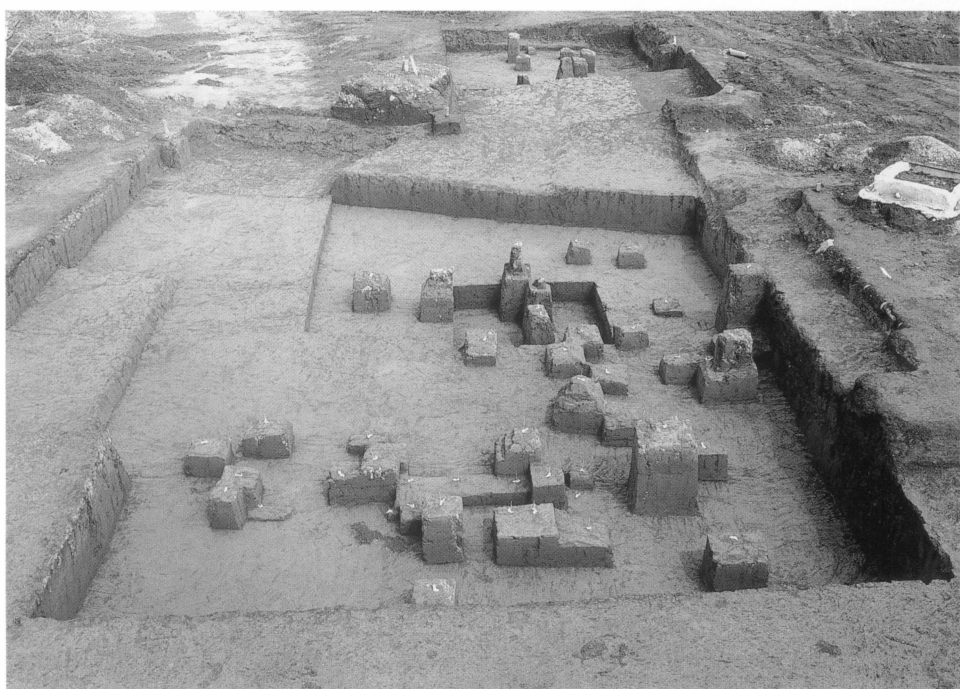
(2) 荒久古墳現状
南から



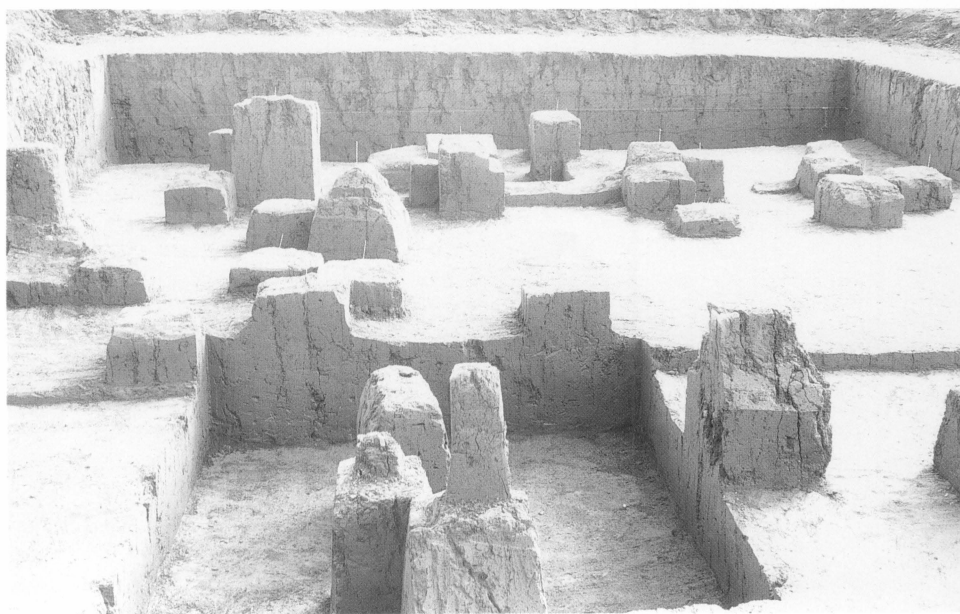
(3) 荒久古墳石室
南から



(1) 第1ブロック



(2) 第2ブロック(1)



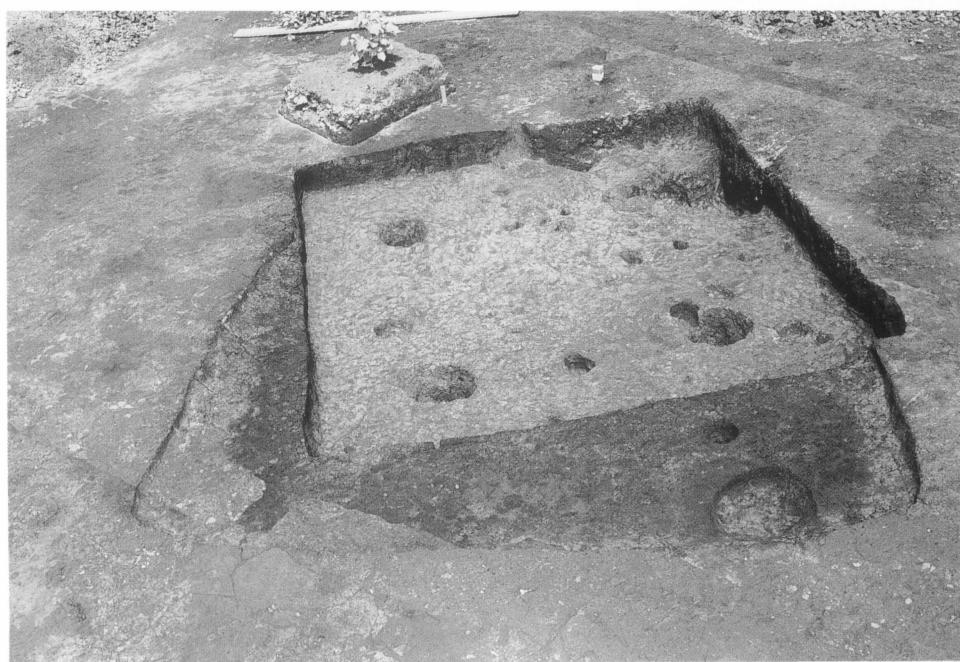
(3) 第2ブロック(2)



(1) 住居跡101・102



(2) 住居跡103



(3) 住居跡110・111



(1) 住居跡112



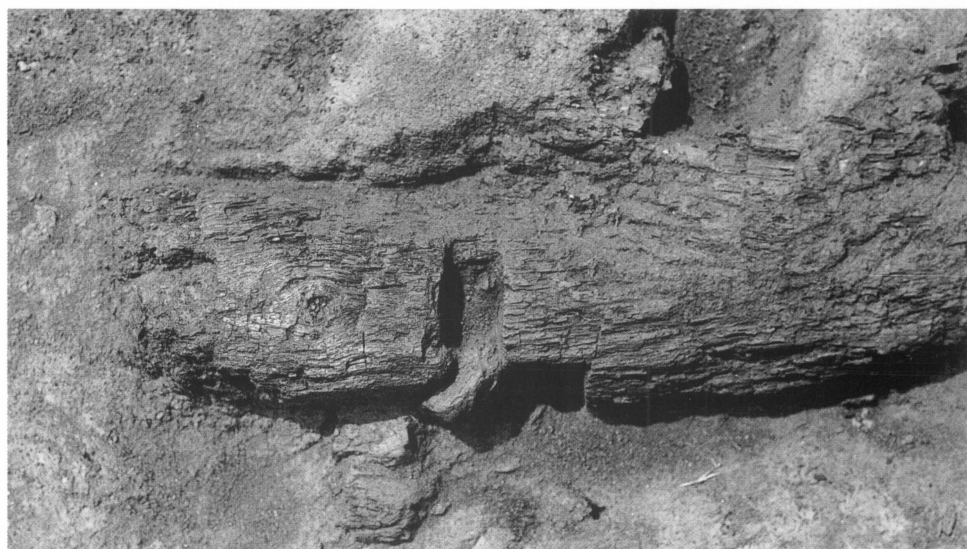
(2) 住居跡113



(3) 住居跡104



(1) 住居跡104
炭化材出土状況



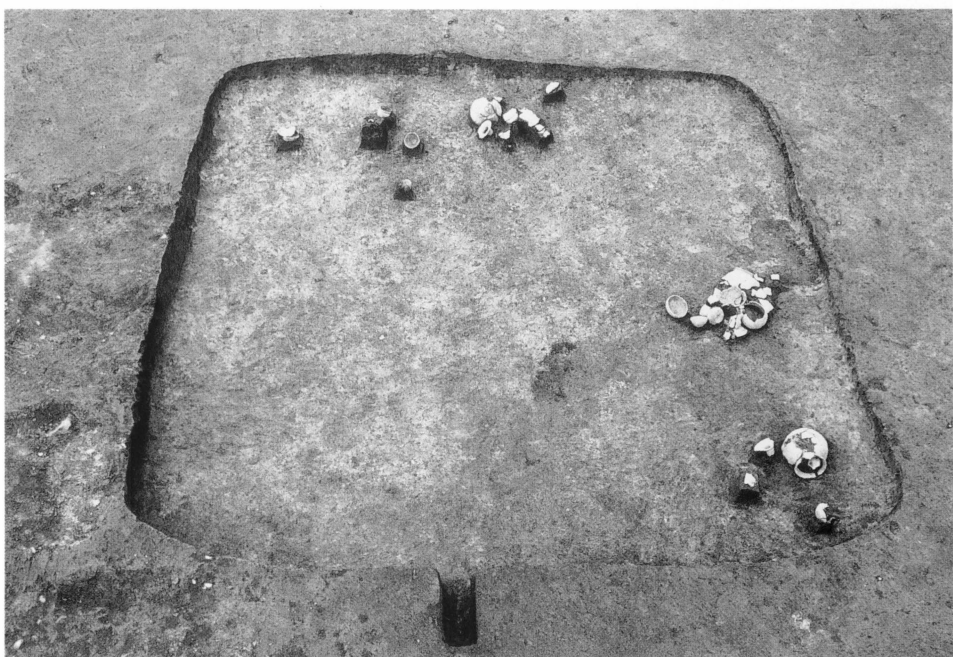
(2) 住居跡104
加工木材出土状況



(3) 溝107
馬歯出土状況



(1) 住居跡108



(2) 住居跡109



(3) 住居跡109
遺物出土状況

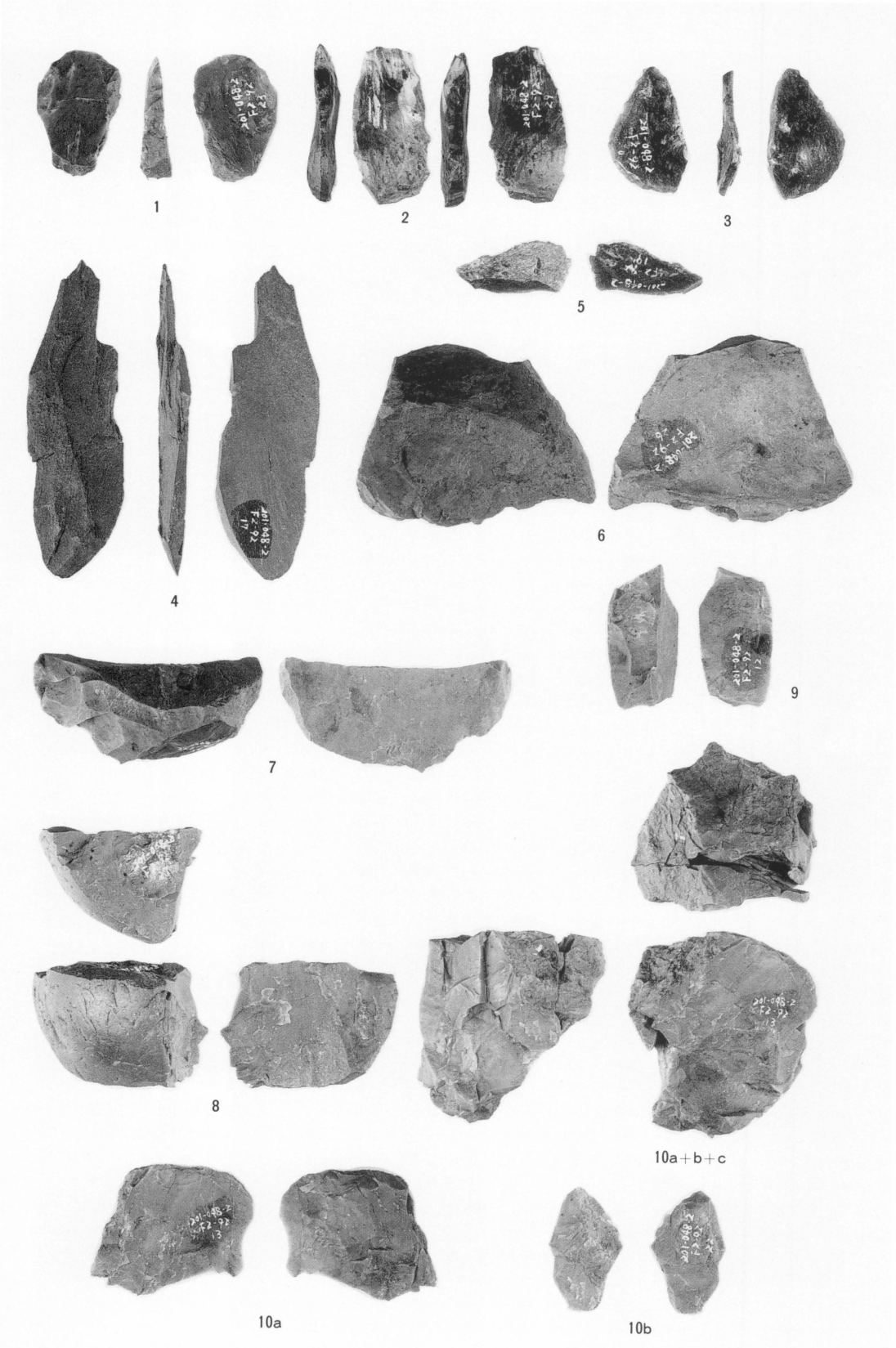


(1) 溝 西から



(2) 溝 東から

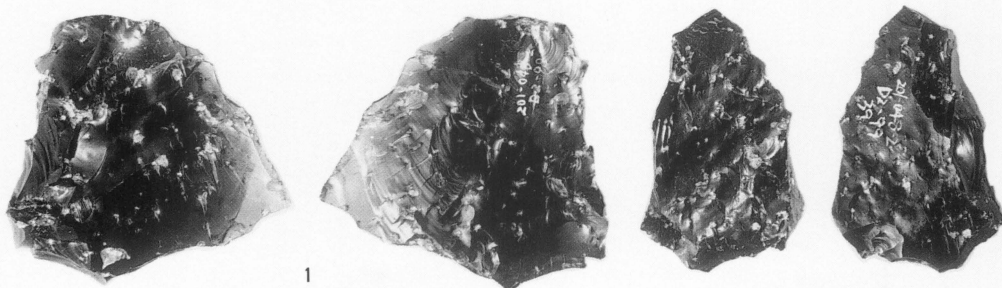
第1ブロック





10c

第2ブロック



1

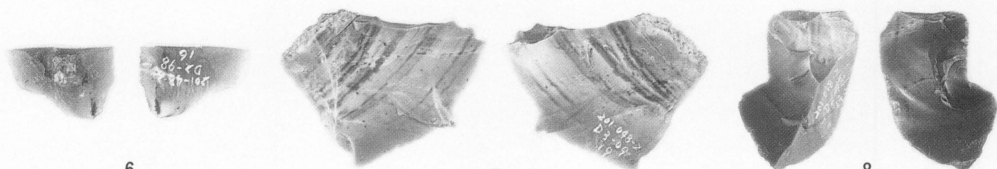
2



3

4

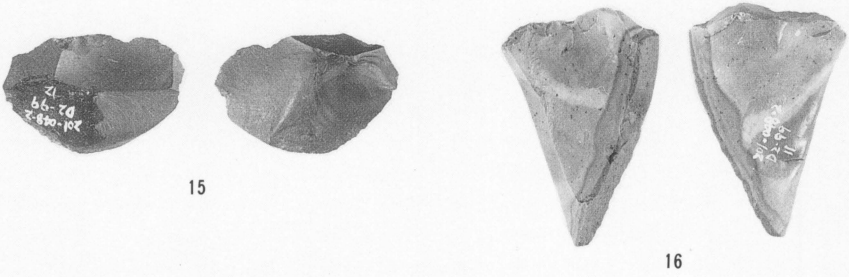
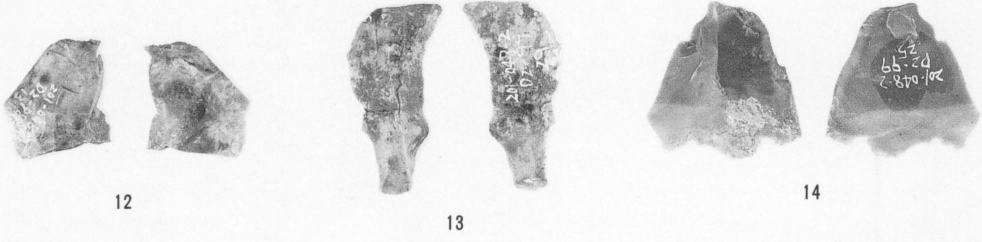
5



6

7

8





住居跡101-4



住居跡101-1



住居跡102-1



住居跡103-7



住居跡103-2



住居跡108-1



住居跡108-2



住居跡108-16



住居跡108-5



住居跡108-18



住居跡108-6



住居跡108-19



住居跡108-12



住居跡108-20



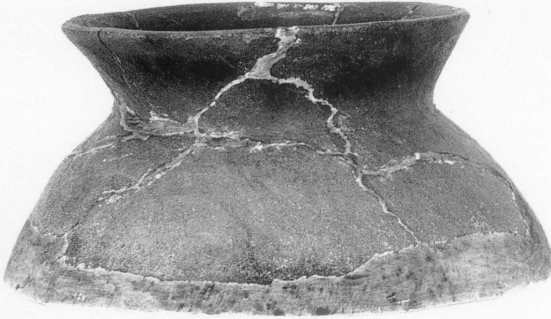
住居跡108-3



住居跡108-17



住居跡108-24



住居跡108-21



住居跡109-3



住居跡109-7



住居跡109-2



住居跡109-9



住居跡109-4



住居跡109-5



住居跡109-1



住居跡109-19



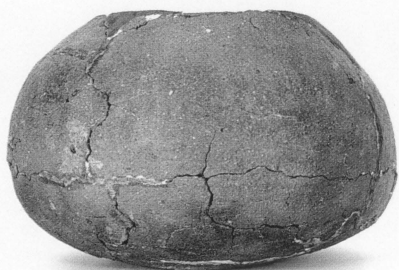
住居跡109-15



住居跡109-16



住居跡109-14



住居跡109-18



住居跡109-23



住居跡109-25



住居跡109-22



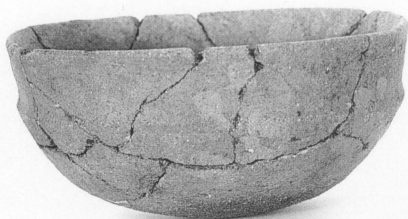
住居跡113-3



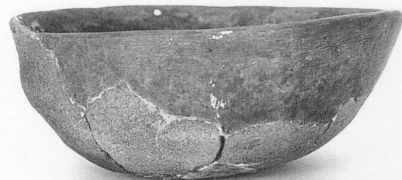
住居跡113-2



住居跡113-4



住居跡104-1



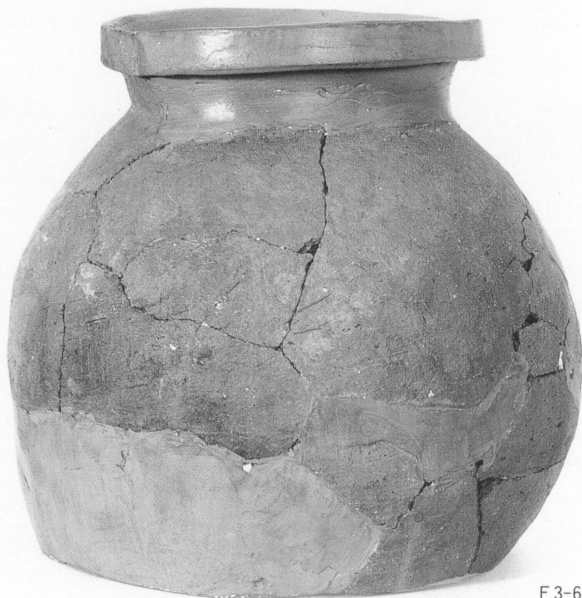
住居跡104-2



住居跡104-5



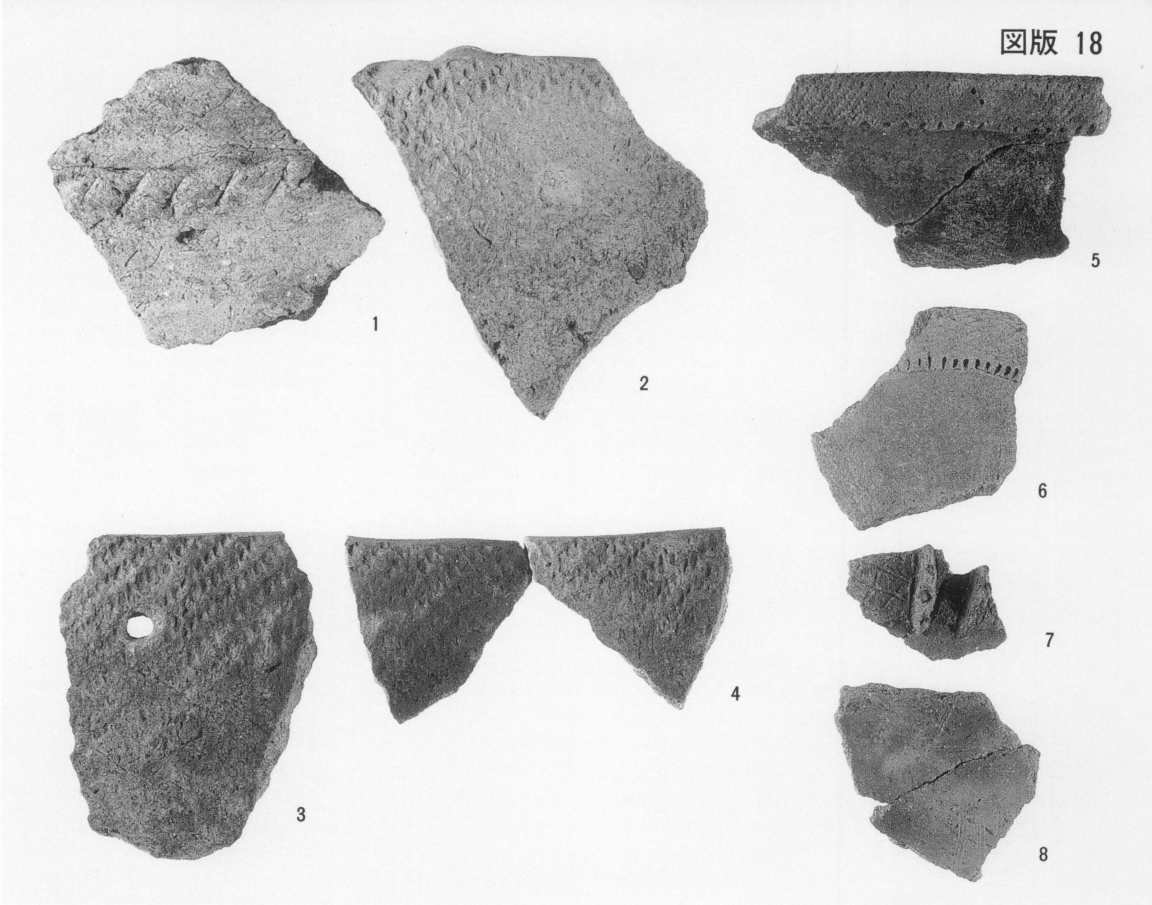
住居跡110-1



F3-6

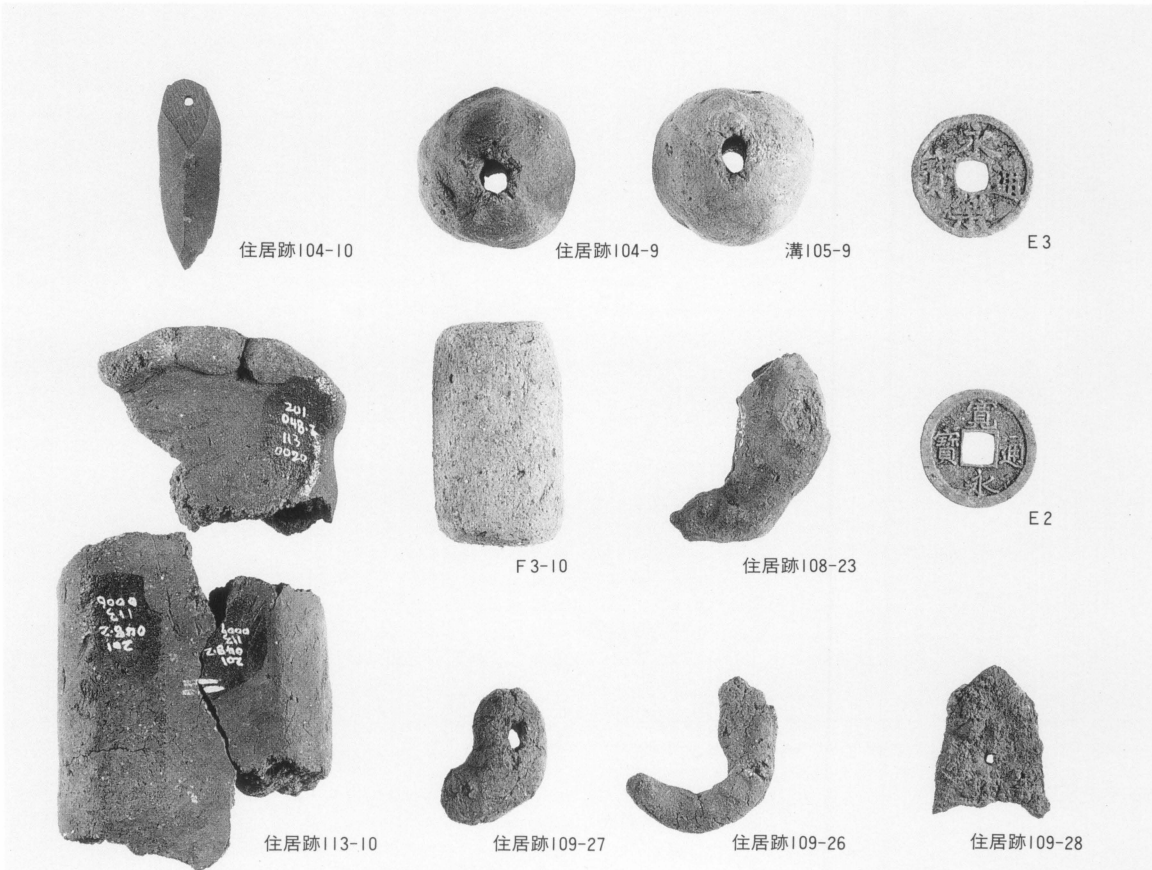


F3-5



(1) 縄文・弥生時代の出土土器

(2) その他の遺物



千葉県文化財センター調査報告第154集

千葉市荒久遺跡(2)

— 県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 千葉県都市部
千葉市市場町1番1号

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号
